

とあり、○歌意は、君が爲に、鴨頭草もて、綵色衣を摺むとおもひて、草原に分入しに、ゆくりなく、我衣ぞ色にそみたる、となり

春霞。井上從直爾。道者雖有。君爾將相登。他回來毛。

春霞は、枕詞なり、霞の居ると云意に、井につゞけたり、○井上は、契沖、地名なり、大和に在、聖武天皇の皇女にて、光仁天皇の后となり給へる井上内親王も、この井上を名におひ給へるなるべし、と云り、又河内にも井上と云地あり、和名抄に、河内國志紀郡井於(井乃倍)とあり、(今の歌は、いづれにもあるべし)○歌意は、井上よりゆく直道はあれども、君に行あはむとて、わざぐ道をまはりて、さてもからうしてくるよ、となり

道邊之。草深由利乃。花咲爾。咲之柄二。妻常可云也。

草深由利は、草深き地にさける百合を云、十一に、路邊草深百合之後云妹命我知、とあり、いづれもクサフカユリと訓べし、(略解に、クサフケユリと訓るはわろし)○花咲は、十八に、夏野能佐由利能波奈能花咲爾爾布夫爾惠美天云々、とあり、花のさくをゑむと云がゆるなり、○咲之柄二は、咲賜ひしものなるをの意なり、四卷聖武天皇大御歌に、道相而咲之柄爾零雪乃消者消香二戀云吾妹、又同卷に、青山乎横雲之灼然吾共咲爲而人二所知名、などあり、○妻常可云也は、(本居氏の、ツマトイフベシと訓べし、也はたゞに添たる字なりと云るは、相咲し故に、我に心を許せることしるければ、即妻といふべしと云意に、見たるなるべけれど、しからず)也は也波の也なり、

○歌意は、唯一目相見し時、百合の花のさきたるゑまひの如く、うるはしく相ゑみしのみ事なるを、即我妻と云べしやは、女の下心をば、知べからねば、唯うはべに咲しのみを見て、我に心を許せりとして、妻とはたのむべきことにあらざるをや、となり

默然不有跡。事之名稱爾。云言乎。聞知良久波。少可有來。

默然不有跡、契沖、古點には、ナホアラジトとよめるよし云れど、猶モダとよむべし、と云り、○事之名稱爾は、事のなぐさめにと云意なり、四卷に、吾耳曾君爾者戀流吾背子之戀云事波言乃名具左會、とあり、○少可有來、(者字、一本にはなし)或人の考に、苛曾有來の誤にて、カラクソアリケルなるべし、十一の歌合見べしと云り、と中山嚴水いへり、是よろし、十一に、大夫登云々小可者在來、とある、小可者在來は、小は不、者は曾の誤なるべし、不可は、義を得てカラクと訓べし、(不顔面、不行、不通、不樂、不明、不穢、不得、などの類を思ふべし、岡部氏は、小可は苛の誤なるべしといへり、さることもあらむか、考合べし、本居氏説には、少可は苛の誤にて、アヤシカリケリなるべし、と云へれど、猶前の説にしかず)○歌意は、心より思ふにはあらざれども、ただに黙止してはあらじとて、たゞ我をなぐさめむがためのみに、うはべにいふ言を、それと知て、又口ぐせにいふよと云ことを、聞知る事は、からくくるしくぞありける、たまぐの事ならば、うはべにいふ言をも、實意と思ひて、しばし心をなぐさむる事もあるべきを、となり

佐伯山。于花以之。哀我。子駕取而者。花散轡。

佐伯山は、契沖、安藝國に佐伯郡あり、そこなどにある山の名にや、と云り、又或説に、伯は、附字の草書を誤れるにて、佐附山なるべきか、と云り、さらばたゞ五月頃の山を云とすべし、十卷に、五月山宇能花月夜霍公鳥雖聞不飽又鳴鳴、又五月山花橋、爾霍公鳥隱合時爾逢有公鳴、などあり、古今集にも、五月山梢を高みほとゞぎすなく音空なるこひもするかな、などある類なり、これらの例を合思ふに、或説しかるべし、○哀我は、カナシキガとよみて、愛しく思ふ女がといふがごとし、契沖、かなしきは、うつくしみ愛する心なり、十四に、爾保杼里能可豆思加和世乎爾倍須登毛會能可奈之伎乎刀爾多氏米也母、古今集に、露をかなしぶと云ひ、つなでかなしもとよめる、これなり、伊勢物語に、ひとつこにさへありければ、いとかなしうしたまひけり、とも云り、と云るが如し、○子駕取而者は、契沖、子は、手の字をあやまれるなるべし、テヲシトリテバとよむべし、と云り、愛み思ふ人の手をとるは、集中に、君之手取者將縁言聶、又草取可禰手妹手乎取、又妹手取而引與治抹手折、など多くよめるが如し、○歌意は、卯花を持てありし、愛しきその女の、手をだにとりたらば、よしや花はちりぬとも、それをばいとはじ、となり

不時。斑衣。服欲香。島針原。時二不有鞞。

不時は、トキジクニとよむべし、又トキナラズとよみてもよし、○斑衣は、いろく／＼にそめ分たる衣なり、十四に、萬太良夫須麻、ともよめり、○島針原、舊本には、衣服針原とあり、それに依ば、衣をはると云かけたりとすべし、今は元曆本にかく有に従つ、袖中抄にも此歌を引て、島の針原ときにはあらねど、とあり、○島は、大和國高市郡にある地名なり、十卷に、島之榛原秋不立友、

とあると、同所なり、○歌意は、大和の島の榛原の榛をとりて、衣を染べき時節にはあらざれども、止ことを得ず、時ならず斑衣を染て、着まほしく思ふ哉、となり、此歌は、まだうらわかき女を、たとへたるなるべし

山守之。里部通。山道曾。茂成來。忘來下。

歌意は、守山の久しく里へ通ひこぬほどに、通ひなれて踏からし、山徑の草木の茂く生塞れるは、われを忘れにける故ならし、さても戀しく思はるゝよ、と云なり、山守は、女のもとに通ひなれし男を、たとへたるなるべし

足病之。山海石榴開。八岑起。鹿待君之。伊波比孀可聞。

本句は、十九にも、奥山之八峯乃海石榴とよみて、つばきは峯上にさくよし、おほくよみなれたるがゆゑに、八岑の形容を云るなり、○八岑は、彌津岑にて、疊れる峯を云、十九に、足引之八峯之鳩、ともよめり、又八峯布美越などもよみたり、(六帖木部さくるに、此歌を第二三の句を、山ざくろさくみねこしに、とて載たり、いかでさばかりには訓誤けむ、海石榴をツバキと訓ることは、古書に證いと多きをや、)○歌意、第三句までは序にて、狩人の鹿をうかがひねらひて待如くに、大切にするいはひ妻かな、と云意なり、と本居氏云り、(但しシ、マチキミとよむべしと云れど、なほシマツキミとよみてよけむ、又岡部氏は、鹿待は、狩人を云て、其男の遠路通ひくるいたづきに譬へ、其君が、いつきかしづく妻かなと、人の上をよめるなり、といへり、)

曉跡。夜鳥雖鳴。此山上之。木末之於者。未靜。

夜鳥雖鳴は、契沖が、遊仙窟に、誰知可憎病、鵲夜半驚人、薄媚狂雞三更唱曉、と云るを、引るが如し、○山上は、舊訓にチカとあるによるべし、(略解に、ミネとよみしはわろし、そもノヲカには、後世岡丘などの字をのみ書るに目なれて、ミネと云とは異にして、たゞいさゝか高き土をいふとのみおもふは誤なり、)ヲカのヲは、峰上、向峯、八峯などの峯にて、山の上を云ことなり、カは所の意にて、階所、在所、隱所、奥所、などのカの如し、既く一卷にも云り、○木末之於は、木末は、コノウラエの約りたるなり、ノウの切ヌ、ラエの切レとなれり、さて木末之於といはむは、言重りていたづらなる如くなれども、集中に、奥邊之方とも、荒風之風ともよめる如く、言さへ異なれば、重ね云に妨なきことゝしるべし、○歌意は、曉なりとて、夜鳥はなきさわげども、此のやかに宿ぐらしめたる異鳥は、まだなきたゝねば、いまだ夜の深きことしられたり、さばかりいそぎたまふな、と云るなり、男の別ていなむとするとき、女のよめるなるべし

西市爾。但獨出而。眼不並。買師絹之。商自許里鴨。

西市は、市に東西あれば云り、大和國添下郡九條村に、その趾ありと云り、なほ三卷に、門部王詠東市中木、とある所に具云り、○眼不並は、メナラベズと訓べし、目並ぶは、古今集に、花かたみ目ならぶ人のあまたあれば、わすられぬらむ數ならぬ身はとよめり、但し今の歌は、それとはいさゝかかはりて、獨目利をしたるを云なるべし、但獨出而とあるにて知べし、(略解に、眼不並は、

見くらぶるものゝなきなり、といへるは、いかに、)○商自許里鴨は、(略解に、シコルは、シミコルにて、物に執する意なるべし、と云るは、いかゞ、又契沖が、シコルはシキルなり、世に息もつぎあへずかたるを、しこりかゝりてかたるなど云これなり、と云るもいかゞ、今按に、商のしそこなひを云なるべし、失計ふことを、シコルと云は、源氏物語若紫に、しこらかしつる時はうたて侍るを、とくこそ心みさせ給はめ、とあり、(孟津に、しこらかしつるときはは、しそこなふてはなり、)梁塵秘抄口傳集に、左衛門督通季、おこりごゝちにわづらひて、しこらかしてけるに云々、とも見ゆ、十二に、我背子之將來跡語之夜者過去、思喚八更更思許理來自八面、とある思許理も同言なり、なほ彼處に云るを、考合べし、○歌意は、西市に唯獨出て、目並べず一人目利して、買得し衣を、今よく見れば、商のしそこなひにてある哉、となり、此はじめ思ひかけたる女を、中媒をも立ず、たゞわれひとりのはからひにて、はやまりて妻としたるに、後にあしきことなどありて、中たがひたるときに、悔てよめるか、又たゞこのまゝにて、譬喩歌にはあらざるか

今年去。新島守之。麻衣。肩乃間亂者。許誰取見。

新島守は、契沖、異國の寇をふせがむために、東の兵をつくしにつかはして、かのさきを守らせらるゝを、島守といふなり、國々の兵、相かはりく行ゆるに、今年の役にて行者を、新島守といふなり、天智天皇紀云、是歲(三年)於對馬島壹岐島筑紫國等、置防與烽、又於筑紫築大堤貯水、名曰水城、これさきもりをおかれし初なり、日本紀の和點に、セキモリとあるは、かたかなのセとサと似たる故に、關守に聞なれて、サキモリをかくまがへたるなるべし、サキモリは崎守な

り、異國の賊などの、よせくべき埼々を守るゆゑの心なり、その中に、むねと守らせ給ひけるは、筑紫なりと云り、○肩之間亂は、衣の肩の行の紙を云、集中に、袖はまよひぬとも、たもとのたりまよひきにけり、などもよめり、和名抄云、唐韻云、紙繒欲壞也、萬與布、一云與流とあり、○許誰取見(許は阿字の誤か、さらずば衍なるべし、と契沖云り)は、誰ありてか取見て、穢垢は洗ひ、綻び破るればぬひなどせむ、となり、○歌意は、今年の役にかはりて行新防人が、麻衣の肩の紙を、誰ありてか取見む、たびにして妹もなければ、ときあらひ、ぬひつどりなどすべき人もあらじと、防守の功勞をねぎらふなるべし

大舟乎。荒海爾榜出。八船多氣。吾見之兒等之。目見者知之母。

荒海は、アラウミなり、ラウの切ルとなれり、○八船多氣は、契沖、八船、こゝにてはおほかる數にはあらず、八度舟をたくといふ心なり、舟たくは、海のあらし所にて、舟のあやふきを、ちからをくはへてしのぐ心なり、土佐日記に、ゆくりなく風ふきて、たけどもくしりへしぞきにしぞきて、ほとくしくうちはめつべし、といへり、と云り、(按に、八船の八は、彌の意なるべし、船を彌度多久義なるべし)○目見者知之母とは、目見は目つきを云て、目もとにしるくあらはれてあるを云、まみと云こと、物語文にいと多し、(源氏物語若紫に、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうつくしげにそがれたるするも云々)母は歎息辭なり、○歌意は、父母などのまもりつよくして、たやすく見がたき女を、危く辛うして見しその女の、我に心をよせたりと云こと、その目もとにしるくあらはれて、嗚呼さても愛しく忘れがたしや、といふなるべし、父母などの常にきびしくまも

るを、其をしのごて、危く辛うして見たるを、舟を荒海に出して、風波の難にあひて、危き目を見たるに、漸その難を凌ぎたるに譬へたるならむ

就所發思

百師木乃。大宮人之。蹈跡所。奥浪。來不依有勢婆。不失有麻思乎。旋頭

百師木乃は、枕詞なり、既出つ、○蹈跡所、藥師寺佛足石碑歌に、彌蘇知阿麻利布多都乃加多知、夜蘇久佐等曾太禮留比止乃、布美志阿止、己呂麻禮爾母阿留可毛、とあり、○歌意は、京地となりて、大宮人の蹈平し、其跡所に、奥つ浪の來よらずありせば、猶もとのまゝに在て、失ずあらましを、奥つ浪の來よる海邊なれば、今は京都にてありしときの、跡形もなし、となり、此は、近江、大津、宮をうつつされし後に、志賀幸崎などのさまをよめるならむ

〔右十七首。古歌集出。〕

首字、舊本に無は脱たるなり

兒等手乎。卷向山者。常在常。過往人爾。往卷目八方。

兒等手乎は、枕詞なり、手を巻と云かけたたり、古事記神武天皇條御歌に、延衰斯麻加牟、とあるも將卷たり、十卷に、上瀬爾河津妻呼暮去者衣手寒三妻將枕跡香、廿卷に、若草能都麻乎母麻可受云々、とあるも同じ、(古今著聞集に、坊門院に、年比めしつかふ蒔繪師にいそぎ參れと仰遣されける返書に、御物を蒔かけて候へば、蒔はて候て參り候ふべし、といふことを、あさましき大假字に

書て進らせければ、子持を娶かけて候へば、娶はて候て参り候べしと、あしざまに讀れて、いたくなめげなるよし、さだせられたることあり、この娶も卷意なり。○過往人爾とは、むかしの人にといはむが如し、人は女をさせるなるべし、爾は乎と云意なり、君を戀、妹を戀など云意なるをも、君爾戀、妹爾戀、と云たぐひなり、○往卷目八方は、いかにたづねゆくとも、嗚呼卷得むやは、卷得じとなり、方は歎息辭なり、マクは、上に手乎卷と云かけたる卷にて、相宿するさまなり、宇治拾遺にも、人の妻まく者あり、と云り、○歌意は、子等が手を卷と云卷向山は、昔京都にてありしときの如くに、常にかはらず立てあれども、時うつり人異りたれば、すぎにしむかしの人を慕ひて、いかにたづねゆくとも卷得むやは、さても口をしき事ぞ、となり

卷向之。山邊響而。往水之。三名沫如。世人吾等者。

歌意は、卷向の山邊にとよるきて流行、穴師川の水の泡沫の如く、有にかひなくはかなき世間なれば、いかでか吾身の行末を、たのみに思ふべき、といへるなり、無常の歌なり

〔右二首。柿本朝臣人麿歌集出。〕

寄物發思。旋頭

鈿後。鞞納野爾。葛引吾妹。眞袖以。著點等鴨。夏草苜母。

鈿後は、枕詞なり、鈿の鋒の鞞に入といひかけたり、○納野は、神名式に、山城國乙訓郡入野神社あり、そこか、(契沖は、和名抄に、丹後國竹野郡納野にや、と云り)○夏草苜母は、草は、葛字の

誤なり、舊訓クズとあり、これよろし、又苜は引の誤なり、と本居氏の云るが如し、下に、姫押生澤邊之眞田葛原何時鴨絡而我衣將服、とあり、母は歎息辭なり、○歌意は、納野に葛引婦女は、己が夫に令著てむとてか兩袖もて引らむ、さてもあはれの婦女や、となり、此は婦女の葛引をみて、かれが夫に織て令著てむとてか引らむと、よそよりみてよめるなるべし、(略解に、我に織てきせむとてか、眞手もて夏葛引と云なり、といへるは、吾妹とあるに泥めるなるべし、古へは人の妻をも、女をも、親みて吾妹といへること、常おほかるをや、)

住吉。波豆麻君之。馬乘衣。雜豆臘。漢女乎座而。縫衣叙。

波豆麻君は、未詳ならず、もしは波豆麻は、地名などにて、そこに住人を云か、本居氏は、豆麻君は里摩著の誤にて、波里摩著之なるべし、と云り、なほ考べし、○馬乘衣、(舊訓に、マソコロモとあるはよしなし)契沖は、ウマノリキヌとよむべきか、今の俗、雨衣のせぬひのすそをぬひあはせぬを、うまのりをあくるといひて、馬にのる時、たよりよからむためにすれば、むかしもさる體の衣などを、馬のりきぬとて、用意したることもや侍りけむ、と云り、本居氏は、乘は垂字の誤にて、マダラノコロモとよむべし、と云り、猶考べし、○雜豆臘は既く云り、○漢女乎座而は、漢女は、舊訓にヲトメとあり、漢女と書る所由は、毛詩に、漢有游女、と云語によれるなり、と云り、(契沖は、漢は美女多き故に、漢女とかきてヲトメとよめり、といへり、)〔頭註、李周翰曰、漢女蜀、或説に、雄略天皇紀に、十四年春正月、身狹村主青等共吳國使、將吳所獻手末才伎漢織吳織、及衣縫兄媛弟媛等、泊於住古津、とあるによりて、漢女はアヤメと訓て、漢國の衣縫女を呼て、ぬはせた

る衣ぞといひやるなり、と云り、座而は、マセテと訓べし、俗に招待してと云むが如し、十六に、千磐破神爾毛莫負卜部座龜毛莫燒會云々、十二に、十五日出之月乃高々爾君乎座而何物乎加將念、などあり、○歌意は、此は大方の衣ならず、愛しき漢女を招待してぬへる衣ぞと、衣をしたて、人に贈るとて、戯によみてやれるなるべし

住吉。出見濱。柴莫苺會尼。未通女等。赤裳下閤。將往見。

出見濱は、地名なるべし、イデミノハマか、イヅミノハマか、なほ探索ぬべし、○柴莫苺會尼は、柴の上に、今一つ濱字を脱せるならむ、さて柴は菜の誤、會は者の誤、莫は衍にて、濱菜苺者尼とありしを、字を誤て、シバナカリソネとよみたるより、莫字を謾に補へたるか、なほよく考べし、(略解に、尼字をネのかなに用ひたる例なし、と云れど、しからず、集中ネのかなに用たる例、九卷に、著而榜尼、同吾爾尼保波尼、などあり、又第三句、莫乘會苺尼の誤にて、ナノリソカリニと訓べしと云説も、うべなひがたし、)○第三句已下は、ヲトメドモアカモソソヒヂユカマクモミムとよむべし、(略解に、四五の句を、アカモノソソヌレテユカムミム、とよめるも誤なり、)○歌意は、住吉の出見濱の濱菜を苺賜はね、さらば其苺に行をとめどもが、赤裳の裾の濕て行容貌をも見むぞ、となるべし

住吉。小田苺爲子。賤鴨無。奴雖在。妹御爲。私田苺。

小田苺爲子は、ヲダチカラスコと訓、カラスはカルの伸りたるにて、(ラスの切ル、)苺賜ふと云に

じ、○賤鴨無は、奴隷なくて、手自ら田を刈賜らむかと云なり、○私田苺は、私は秋字の誤ならむと云る説によるべし、さて此句は、アキノタカルモとよむべし、○歌意、本句は問にて、末句は答なり、住吉の小田を刈賜ふ君は、令刈べき奴隷なくて、手自ら刈賜ふらむかと問たるに、いなさにあらず、からすべき奴隷はあれども、奴隷に令せて刈しめば、鹿忽にもぞなる、親切におもふ妹が御爲の故にかる稲なれば、大切にとりまかなひて、手づから秋田をかるぞ、さてもからき業ぞ、とことわれるなり

池部。小槻下。細竹苺嫌。其谷。君形見爾。監乍將偲。

細竹の下に、莫字落たりと契沖云り、さもあらむ、又嫌は、きらひいさむる謂なれば、莫字にあたる義あれば、もとのまゝにてもあるべし、さらば次の歌に、莫苺嫌とある莫字は、かへりて衍とすべきか、○歌意は、池邊の小槻が下の、細竹を刈ことなかれ、其をなりとも、君が見しかたみに見つゝ慕はむぞ、となり

天在。日賣菅原。草莫苺嫌。彌那綿。香鳥髮。飽田志付勿。

天在云々は契沖、天にある日とつゞけて、姫菅原と云は、地名なるべしと云り、然ることなるべし、又按に、在は傳の誤にてもあらむ、天傳日笠の浦などもよめればなり、○日賣菅原は、いづくにあるならむ、尋ぬべし、○草莫苺嫌は、草は菅の草書を誤れるなるべし、集中外にも例有、スゲナカリソネと訓べし、○彌那綿は、枕詞なり、既に委云り、こゝは那の下に、乃字などの落しか、○歌

意は、菅原に立入て菅を刈女を見て、しか菅をかることなけれ、汝がうるはしき髪に、芥のつきて穢れむは、さてもをしき事ぞ、と云るなり、(略解に、本居氏説を引て、天なるは、天上にあるひめすげ原なり、しからざれば、髪に芥のつくると云よしなし、これは天なるさゝらの小野の類に、ただまうけて云のみなり、と云れどわろし、たゞ設て云も物にこそよれ、天上の野にて菅をからむに、此國土の人の髪に、芥のつくなどいむは、いともくうつけたることにあらずや、さゝらの小野は、天上にありもやせむ、此ひめ菅原は、決て天上のにはあらざることにしるし

夏影。房之下邇。衣裁吾妹。裏儲。吾爲裁者。差大裁。

夏影房之下邇(邇字、舊本に庭と作るは誤なり、今は元曆本に従つ)は、契沖、夏のあつきころは、木にもあれ何にてもあれ、陰の涼しき所にぬるゆゑに、夏かげのねやの下とはいふなり、今按に、女は北の方ふかくこもりてをるものなり、北窓の涼も夏によるしければ、夏かげのねやとは云り、といへり、(已上契沖説)下は裏と云むが如くなるべし、○裏儲は、衣の裡を設なしての意なり、○差大裁、(ヤ、オホニタテとよめるは、いとつたなし)こゝは義を得て、イヤヒロニタテとよまむか、(ヤ、と云も彌々にて彌と同言なり、イヤは彌に伊の發語のそはりたるなればなり)○歌意は、房の裏に衣を裁吾妹よ、吾に著せむが料に、裡を設なして裁ならば、彌廣にたちて賜へよ、となるべし

梓弓。引津邊在。莫謂花。及採。不相有目八方。勿謂花。

梓弓は、引といはむための枕詞なり、○引津邊在は、引津のほとりにあるといふ意なり、引津は、筑前國志摩郡にあり、十五に、引津亭船舶之作、とありて、海邊の津なり、岐志といふ所の北にありて、昔は船入しを、今は田となれるよし、貝原氏名寄にいへり、○歌意は、なりのその花の咲て、そを採取する時節まで、あはずてあらむやは、あはずにはえあらじと思ふを、その間よくしのびて、わが名を勿謂そ、人に知られては、あふことかたからむぞ、と云意を、勿謂花にいひかけたるなるべし、十卷に、梓弓引津邊有莫告藻之、花咲及二不會君壽、とて擧たり

擊日刺。宮路行丹。吾裳破。玉緒。念委。家在矣。

擊日刺は、宮の枕詞なり、○玉緒は亂の枕詞なり、○念委、(オモヒステ、モにては、玉緒の言よりつゞきがたし)元曆本に、オモヒミダレテとあるからは、もと念亂とありけむを、念委と書誤りつらむ、○歌意は、思ふ人に行あふこともやとて、みやづかへなどにことよせて、しげく宮路をかよふに、我裳は破れぬ、さりとてあふこともなければ、中々に思ひみだれながら、それなりに家にありぬべかりけるものを、となり

君爲。手力勞。織在衣服斜。春去。何何。摺者吉。

次服斜は、本居氏云、斜は料の誤なり、織たる絹は、衣服の料なれば、かく書てキヌとよませたり、○何何は、同人、何色の誤なり、何色と書を、何々と見て、書誤れるなり、と云り、○歌意は、夫君に著せむが料に、女の手力つからしいたづきて織たる其衣を、春の來らば、何色に摺

そめて著せたらば、君が心にふさひてよからむぞ、となり

橋立。倉崎山。立白雲。見欲。我爲苗。立白雲。

橋立は、倉崎を云むとの枕詞なり、まづ橋立とは、垂仁天皇紀に、八十七年、石上神寶を、大中
姫命に掌しめむとせらるゝ時、姫の言に、吾手弱女人也、何能登天神庫邪、五十瓊敷命曰、
神庫雖高、我能爲神庫造梯、豈煩登庫乎、故諺、曰神之神庫隨樹梯之、此其緣也、(神之は
天之の誤か)とある梯樹これなり、さて樹梯は、何處にまれ、高所に登らむ料に造れるものなる
を、其を庫に登らむ料に造れる梯をば、庫梯とぞ云けむ、(うづつば物語に、樓にのぼり給ふべきほど
のくれはしは、色々の木をまぜくにつくりて、下より流るゝ水は、涼しく見ゆべく作る云々、枕
冊子に、泊瀬などにまうで、つぼねするほどは、くれはしのもとに、車引よせてたてるに、おび
ばかりしたる、わかき法師ばらの、あしだといふ物をはきて、いさゝかつみもなく、おりのぼる
とて、何ともなき經のはしうちよみ、俱舎の誦を、少いひつゞけありくこそ、所につけてをかしか
れ、云々、又くれはしをのぼりこうじて、いつしか佛の御かほ拜み奉らむと、つぼねにいそぎ入た
るに云々、など見えたるくれはしも、くらはしの轉語にて、庫梯なるべくおぼゆ、又和名抄に、遊
仙窟云、六尺象牙床、楊氏漢語抄云、牙床久禮度古、とあるも、今按に、これ座床の義なるべき
か、此は事のついでに、いへるのみなり)か、れば庫梯は、やがて庫の梯立にてあるなれば、梯立
の庫梯とは續けしなり、(冠辭考の説は、言足はで、聞とりがたし)なほ梯立は、續後紀十九、興福
寺僧等長歌に、瓠葛天能梯建踐歩美天降利座志々、云々、丹後風土記に、與謝郡、郡東北隅方有

速石里、此里之海有長大石、前長二千三百廿九丈、廣或所九丈以下、或所十丈以上廿丈以下、先
名天梯立、後名久志濱、云々、和名抄には、梯、木階、所以登高也、和名加介波之、と見え
たり、○倉梯山は、大和國十市郡にあり、崇峻天皇、倉梯柴垣宮に天下しろしめされ、又諸陵式
に、倉梯岡陵、在大和國十市郡、天武天皇紀に、十二年十月、天皇狩于倉梯、續紀に、慶雲二年
三月癸未、車駕幸倉橋離宮、などあり、古事記に、仁德天皇御弟速總別王、女鳥王をぬすみ、難
波をにげて大和國に至り、倉梯山に上るとてよみ給ふ、波斯多且能久良波斯夜麻袁位賀志美登伊波
迦伎加泥且和賀且登良須母、又波斯多且能久良波斯夜麻波佐賀斯祢杼伊毛登能煩禮波佐賀斯玖母阿
良受、と見えたり、○立白雲は、契沖云、立る白雲みまほりといへるは、女にたとへたり、よ
そにのみみてややみなむかづらきの高間の山のみねの白雲、と云歌も、同じ心なり、浪雲のうつく
し妻とよめるやうに、はれたる山に白雲のかゝるも、見所あるものなれば、よせていへり、○歌意
かくれたるところなし

橋立。倉崎川。石走者裳。壯子時。我度爲。石走者裳。

倉崎川も、右と同地なり、河は、天武天皇紀に、七年、是春云々、堅齋宮於倉梯、河上云々、三代
實錄、貞觀十一年七月八日、大和國十市郡椋橋山河岸崩裂、高二丈深一丈二尺、其中有鏡一、廣一
尺七寸、採而獻之、とあり、○石走者裳は、石の橋は、今いづくにあるぞと尋慕ふよしなり、石走
のことは、既に云り、者裳は、歎息きて尋慕ふ意の辭なり、○壯子時は、をとこざかりの時にとい
ふ意なり、○我度爲は、アガワタセリシとよむべし、○後の石走者裳は、上の事を反復ひいひて、

尊慕ふ意の深切なるをあらはしたるなり、○歌意は、をとこざかりの時に、倉崎川に、吾わたしてありし石の橋は、あとかたもなし、今いづくにあるぞと、たづねしたふよしなり、此歌は、むかし契りをかけし人の、今はたえぬるを、たとへたるならむ

橋立。倉崎川。河静菅。余菫。笠裳不編。川静菅。

静菅は、略解に、下草の意にて、菅の小さきを云か、又は一種の菅の名かと云れど、ひがことなり、静は借字にて、石著菅なり、六卷に、千鳥鳴其佐保川爾石二生菅根取而云々、とも見えたれば、石著菅とはいふべきものなり、○余菫 笠裳不編とは、契沖云、心ひとつにわが物とはしめても、まだことならぬにたとふるなり、此意なる歌多し、第十一に、各二首、第十三の長歌にもあり、すべて物によせてよめるは、菅ならねど同意あり、第三に、託馬野爾生流紫 衣染未服而色爾出来、およそ此類なり、○川静菅は、上の事をふたゝび反復ひいひて、その深切なる意をのべたるなり、○歌意は、倉崎川の石著菅の愛しきを刈取来て、吾物とは領たれど、未笠に編て著すといへるにて、女の心にうけひきて、契をばかはしたれど、いまだ相宿せざるを、たとへたるなるべし

春日尙。田立嬴。公哀。若草。嬬無公。田立嬴。

歌意は、長き春の日をさへ、終日田に立つかるゝ君は、妻なき人にて、業をたすくる人もなき故に、いとなみの間なきことよ、さてもかなしきさまや、と云なるべし

開木代。來背社。草勿手折。己時。立雖榮。草勿手折。

開木代、十一にもかく書り、契沖、山と云に、開木とかけるは、第六に、百木成山は木高しとよめるにて、諸木山より開出す故か、と云り、代をシロとよむは、拾芥抄田籍部に、凡田以三方六尺爲三十歩云々、積七十二歩爲三十代、百四十歩爲廿二代云々、五十代爲一段、式云、代頭也云々、とあり、(今云、諸木山より開出すと云は、開は開發する意にて、材木を伐り薪を採る類を、開木と云といふことならむか、これは開木とかきて、ヤマと訓せたる所以を解るなり、按に代は、綱代、苗代などの代にて、その設にする地をいふことなれば、木を伐り出す設にする地を、ヤマシロといひしより、開木代と書るならむか、されば代字に連ねて意をとるべきか、)○來背社は、契沖云、神名式に、山城國久世郡に、大社十一座、小社十三座、を載たり、大社十一座は、石田神社一座水主神社十座なり、石田神社は、此集にも異にして名を出したれば、久世社は、さだめて水主神社なるべし、式に、水主神社十座の下に註して云、並大、月次新嘗、就中同水主座天照御魂神、三座伴託山背大國魂命神二座、預相嘗祭、といへり、〔頭註、三座伴託不審し、本書を検するに、水主〕○己時は、シガトキトとよむべし、(舊訓に、オノガトキとあるはわろし、)シガは、それがと云意にも、又汝がと云意にも、かよひて聞ゆる言なり、古事記歌に、波毘呂由都婆岐斯賀波那能云々、芝賀波能云々、又加良奴袁志本爾夜岐斯賀阿麻理云々、書記雄略天皇卷歌に、志我都矩屢麻泥爾云々、又柯該志須彌難波旨我那稽摩云々、集中には、五卷に、愛久志我可多良倍姿云々、十九に、鸕河立取左牟安山能之我婆多婆、又黃楊小櫛之賀左之家良之、又秋花之我色々爾、など見えたり、(略解に、サガトキトとよめるは、いみじきひがことなり、)○歌意は、山城の來背社の草は、神の領賜ふ地の草にて、その恐あれば、謾に手折ることなかれ、たとひ己時と、時を待得て立榮のびて、折まほしく思

ふとも、堪忍びて手折ることなかれ、と反復ひいひて戒たるなるべし、此は社をもていへるを思ふに、主ある女に思ひをかくる人あるに、しかけさうはするとも、あながちなるわざなせそ、たとひしがときと、女のみさかりの時を待得て榮ゆるを、愛しくは思ふとも、主ある女なれば、あながちなるわざをすることなかれ、と深く戒めたるか

青角髪。依網原。人相嶋。石走。淡海縣。物語爲。

青角髪は、まづ角髪は、廿卷に、阿母刀自母多麻爾母賀母夜伊多太伎呂美都良乃奈可爾阿徹麻可麻久母、と見えたる美豆良にて、上代男の装にて、髪を左右へ分て結縮たるものなり、古事記に、天照大御神の即解御髪纏御美豆羅、と見え、書紀に、息長足姫尊の櫛日浦にして、結髪爲髪、とあるなども、假に男の貌に、化たまふを云りとぞ、又崇峻天皇紀に、古俗、年少兒年十五六間、束髮於額、十七八間、分爲角子、今亦然之、と見ゆ、左右にあるが角の如くなる故に、角髪、角子など書るなり、(契沖が、角髪は鬢の義にて、カヅラともよむべければ、もしは、日本紀に見えたる天吉葛の心にて、アヲカヅラヨサミとつゞけたるか、あをみづらにても、此義難なしと云るは非ず、)さてこゝに角髪と書るは借字にて、依網は碧海郡なれば、碧海面依網といへるなるべし、と門人南部嚴男いへり、さもあるべし、面とは、海面を海豆良といふ、その豆良にて、碧海の地面にある依網といへるなるべし、○依網原は、和名抄に、參河國碧海郡依網、與佐美、とある地なるべし、(他にも依網てふ地はあれど、此歌にては、參河のよさみなり、)○人相嶋は、ヒトモアハヌカモとよみて、いかで人もがなあへかしと願ふ意なり、○石走は、淡海の枕詞なり、一卷に出づ、○

淡海縣は、遠江の縣にて、淡海とは、近江を近津淡海と稱、遠江を遠津淡海と稱て、古はたゞ淡海といふときは、二國にわたれる故に、此は遠江をいへるなり、縣は官人の任國を云り、本居氏、此歌遠江國司の下る道に、參河國の依網原にてよめるにて、淡海縣とは、任國の遠江をさして云るなり、古今集に、文屋康秀が參河掾になりて、縣見には得出た、じやと云やれりける云々、土佐日記に、或人縣の四年五年はて、云々などあるも、其任國を指て縣と云るなり、又縣召と云ことも、諸國の官人を任よしの名なり、さて縣は、もと朝廷の御料ふ陸田物を貢進る地を云ことにて、官人の任國を指て縣と云は、古に京より、國々の御料の縣に、官人などの、往來しころの名目の遺れりしなり、と云り、なほ古事記傳廿九に、委曲に見えたり、○歌意は、京へ上る道中の、參河國依網原に、いかで思ふ人もがなあへかし、さらばわが任られてありし、遠江國のありしやうを、物語してきかせむを、となるべし、此歌は遠江國の司、任はて、上る道、參河のよさみの原にてよめるにて、實は思ふ人に逢まほしきを、さとはいはで、たゞおほよそにいへるなり

水門。葦末葉。誰手折。吾背子。振手見。我手折。

振手見は、或説に、振の下に、衣字を脱せるか、ソデフルミムト、とあるべしと云り、○歌意は、みなどのあしのうら葉を、そも誰が手折しぞと、とがめたるに、これは旅行君が、みなどときぎはなれてゆくととき、かへりみしつゝ、袖ふるをみむ爲にとて、わが手折のけしなり、とことわれるなり、一首の中に、問答の意あること、上の住、吉小田菊爲子云々の類なり

垣越。犬召越。鳥獵爲公。青山。葉茂山邊。馬安君。

垣越は、本居氏、犬と云む枕詞なり、歌意にはかゝはらず、と云り、○犬召越はイヌヨビコセテと訓べし、犬をよび令來而なり、○歌意は、犬をよび令來て、率往て鳥獵したまふ公よ、青山の木ぐらく葉茂くしげりたる山邊は、きはめて、けはしくさがしかるべきなれば、その處には馬をとどめやすめて、よくしてつゝみなく、おはしたまへ君よ、となり、これは夫君をいとほしみて、女の告たるなるべし

海底。奥玉藻之。名乗會花。妹與吾。此何有跡。莫語之花。

此何有跡は、契沖、何は荷の誤なるべし、と云り、コ、ニアリトと六言によむべし、○歌意は、本は、莫語といはむための序に、設けいへるのみにて、妹と吾と、此處に率て密び隠てあり、といふことをゆめく人に告ることなけれ、といふことを、莫語之花に云つゞけたるにて、此歌は、男女海邊の葦原などに率て、隠れ居るとき、其所のものに、令するやうにいへるなり

此崗。草薊小子。然薊。有乍。君來座。御馬草爲。

小子は、コドモと訓べし、(略解に、ワラハともチノコともよみたるは、うべなひ難し)○然薊、この兩字の間に、莫字などの落しか、シカナカリソネと訓べし、(職人歌合に、朝夕に君をばかれずみまくさのしかかりそと人などがめそ)○歌意は、此岡にて草刈子等よ、然ばかり、ことごとく残さず刈取てゆくことなけれ、わが思ふ君が、ありく、絶す馬に乗て來りまさむ、其馬を飼料の御秣にせむぞ、となり

江林。次完也物。求吉。白棒。袖纏上。完待我背。

江林は、契沖、名所なるべしといへり、山中嚴水、我土佐國にて、麓は海にほとり、上は平にして畠など有、其涯けはしくて林となれる所を、俗にえみと云り、若古言ならば、江林の江は、このえみと同言にや、此えみにやどるし、は、取やすければ、求るによきと云か、と云り按ふに、江は、いへばえに、或はえならぬなどいふえは、淺き意なり、されば江林と云も、奥深からぬ林の義なるべし、さる處にやどれる猪鹿は、奥深く逃入方なければ、獵やすき謂なり、いはゆるえみのえも、さるよしにこそあらめ、猶考べし、○次完也物とは、完は猪鹿なり、完は古書に突と通用たり、猪鹿に借てかけり、(本居氏、次は伏の誤、求吉は來告の誤にて、フセルシ、ヤモキヌトツゲコシなるべし、といへれどいかど)○袖纏上は、うでまくりをする事となり、後拾遺集に、袖ふれば露こぼれけり秋野はまくり手にてぞゆくべかりける、とあり、○歌意は、江林にやどる猪鹿の求るに易にや、うでまくりをして、猪鹿の出來むを吾兄の待居よ、といふが表にて、裏の意は、女のなびきより來むほどをうかゞひて、いまだ言出をもせずして、下待居る男を、かたはらより見ていへるにや

丸雪降。遠江。吾跡川楊。雖薊。亦生云。余跡川楊。

丸雪降は、遠の枕詞なり、十一にも、霰零遠津大浦爾縁浪、と見えたり、丸雪とかけるは、戀水、火氣、白氣、重石、青頭鷄、などかけるに同じく、義を得て書たるなり、さて此つゞけの意、い

と心得かてなるを、(契沖が、あられふるおとつゞくなり、音を、とよのみよむ、其例、浪の音を
なみのと、梓弓つまひく夜音など、云り、と云るは、わろし)強て考るに、霰零飛打といふ意につ
づけたるなるべし、霰の降は、飛走り打附くるごとくなれば、かくいふならむ、(あられたばしると
いふ意なるべく、又霰打とも云るを、思合べし)さて飛打の備字切夫なれば、等夫都となるを、夫を
保に轉して、遠津と云に云かけたるなるべし、(但し夫の濁音を、保の清音に轉したりとせむこと、
いさゝか心ゆかぬやうなれど、言を轉すときは、さることもあるべし)○遠江は、中山殿水が、
近江國にも遠江と云地あり、そこなりと云るが如し、靈異記下卷に、近江國坂田郡遠江里、有
富人、姓名未詳也、と見えたり、(但し阿渡川は高島郡なれば、遠江と云地も、同郡なるは論なし、
然るに靈異記に、坂田郡としては、郡忽にたがへるは、いぶかしきことなり、もしは遠江里といふ
は、高島坂田の兩郡に亘れる地ならむかとも思へど、いはゆる琵琶湖を隔て、西方に高島郡、東方に
坂田郡あれば、兩郡にわたれらむこといかゞ、然れども遠江と云は、もとより湖水につきたる稱と
おぼゆれば、高島郡にも、坂田郡にも、湖水にかたよれる地を、各然呼し名にてもあらむか、もし
は靈異記なるも、もとは高島郡なりしを、傳聞の誤にて、坂田郡と記せるにもあらむか、彼國の地
理知らむ人に尋ねて、重に正すべし)○吾跡川楊は、近江國高島郡阿渡川の川柳なり、○歌意
は、遠江の地の阿渡川の川柳は、刈除ども、つひに除くことを遂ず、其根より根ばえして、又も生
と云なる、その阿渡川の川柳ぞとなるべし、これは詞の表なり、裏の意は契沖云、柳のかれども又
おふるをいふは、下の心、おもひすてゝもまたおもはるゝにたとへたるか、しばしいひたゆれど、
又おもひかねて云かはすにたとふるなるべし、柳はかりてもやがてねばえして、よくおふるものな

れば、ことにたとふるなり、第十四に、楊奈疑許會伎禮婆伴要須禮余能比等乃古非爾思奈武乎伊可
爾世余等會、とあり

朝月日。向山。月立所見。遠妻。持在人。看乍憇。

朝月日は、向といはむとての枕詞なり、○月立所見は、古は月の出るを立と云り、十一に、味酒之
三毛侶乃山爾立月之云々、十四に、乎豆久波乃爾呂爾都久多思、などよめり、月數の歴るを、月
の立といふも、又朔を月立といふも、もとこれより起れるなり、さてタテルミユと云ずして、タテ
リとしばらく歌絶て、ミユと云こと古風なり、上にたびく例あり、○歌意は、見渡さるゝむかひ
の山に月の立て、面白くてれるが見ゆる、あはれ遠き所に、思ふ女を持たらむ其人だに、今夜は必
その女の許に往て、共に見つゝ、愛むらむと思ふを、吾は妻なしにして、獨見るには、そのしるし
なければ、いよくかなし、といへるにや

〔右二十三首。柿本朝臣人麿之歌集出。〕

春日在。三笠乃山二。月船出。遊士之。飲酒杯爾。陰爾所見管。

歌意、表は、きこえたるまゝにて、裏は愛しき女のかほの、ほのかに此方に見えたるのみにて、た
とへば、酒杯に月影のうつりたるごとく、ものいひかはすこともかなはねば、いよくたつかしき
心に堪がたき謂ならむか

〔右一首。古歌集出。〕

行路ミチユキアリノウチ

遠有而トホクアリテ。雲居爾所見クモキニミユル。妹家爾イモガヘニ。早將至ハヤクイタラム。步黑駒アユメクロコマ。

歌意は、間遠く遙に在て、雲居の外に見やらるゝ妹が家に、早く至らむと思ふぞ、速に歩め吾のれる黒駒よ、となり、十四に、等保久之氏久毛爲爾見由流伊毛我敝爾伊都可伊多良武安由賣久路古麻、とていせり

〔右一首。柿本朝臣人麿之歌集出〕

譬喻歌ダトヘウタ

寄衣ヨスコロモニ

今造イマツクル。斑衣服マダラノコロモ。面就オモツキテ。吾爾所念アレハオモホユ。未服友イマダキネドモ。

今造は、今新に造るよしなり、今の意既く委云り、平家物語に、新日吉、新熊野などいへる新に同じ、○面就は、契沖が、メニツキテとよめるよろし、目に就ての意なり、一卷にも、衣爾著成目爾都久和我勢、とあり、(略解に、オモツキテとよめるは、非ず)○吾爾所念は、もとのまゝにては通難し、爾は者の誤にて、アレハオモホユなり、即一本に者とあり、と云り、もし又爾字本のまゝならば、吾は常の誤にて、ツネニオモホユにもあるべし、○歌意は、いまだ逢見ざれども、女のうるはしさの目につきて、われはつねに、こひしくおもはるゝ、といふことを、衣に譬ていへるなり

紅衣クレナキニ。染コロモノ。雖欲ホシケドモ。著丹穗哉キチニホヘヤ。人可知ヒトノシルベキ。

著丹穗哉は、穗の下に字をおとせるなり、と契沖云り、さることなり、按に、羽者の二字などを脱せるか、さらばキテニホハヤなり、又は瀬者の二字を脱せるにもあるべし、さらば、キテニホセバヤと訓べし、ニホセはニホハセと云が如し、○歌意は、紅はうるはしき色なれば、衣に染まほしくは思へども、著てにほはさば、それと人のしるべきか、さても染まほしき色哉、との謂なり、愛しき女を戀しくは思へども、それに逢見ば、早くあらはれむかと云を、たとへたるなり

千名カニカクニ。人雖云ヒトハイツトモ。織次オリツガム。我二十物アガハダモノ。白麻衣シロアサゴロモ。

千名は、集中に、千名の五百名などよみたれど、こゝはチナニハモとよみては、平穩ならず、こは古寫本の傍書に、名字を各と書り、これによりて考るに、千は千字の誤にて、千各なるべし、千千相誤れる例集中にあり、○歌意は、人は色々にいひさわぐとも、よしやそれにもさはらずして、なほ織次で著むと思ふ、我機物の白麻衣ぞ、となり、なほ思つぎて、つひにあはむと云意をたとへたり、(○拾遺集に、第三句已下、おりてきむわがはたものにしろきあさぎぬ、とて載たり)〔右三首。柿本朝臣人麿之歌集出。〕

橡人者ツルハミノ。衣人者コロモハヒトノ。事無跡コトナシト。日師時從イヒシトキヨリ。欲服所念キホシクオモホユ。

第一二句のこと、本居氏説に、人者は、著人とありしが、下上になりたるにて、ツルハミノ衣はヒ

トノと訓べし、といへり、(元曆本に、者、字皆と作り、いかゞ)さてツルハミは、和名抄染色具に、唐韻云、椽、椽實也、和名都流波美、とありて、椽衣は、古賤者の服にて、さて賤者を其服もて、やがて椽衣といへるなり、○歌意は、賤者は、何事も事なしと人の云しときより、賤者になりて、椽衣を著まほしく思ふ、となり、さてこの歌は、貴人は所せき身にて、いさゝかのことも、言しげくいひなされなどすれば、賤者の、中々に事なきを羨て、賤者になりたきといふことを、椽衣を服ほしきといふならむ、さてこれは、賤しき女などに心をかけたるに、人目はよかることのありて、よめるなるべし

凡爾。吾之念者。下服而。穢爾師衣乎。取而將著八方。

歌意は、大かたのものにおもはゞ、下著にして穢垢し衣なるを、すてもせずして、又新に取あげて著むやは、嗚呼深く愛く思へばこそ、取あげて著なれ、といへるにて、これはいやしき婢などを、久しくなれうつくしみて、妻とするときよめるか

紅之。深染之衣。下著而。上取著者。事將成鴨。

歌意は、しのびに心をかよはしたる人を、のちにあらはれてつまとせば、人の言痛いひさわがむか、さてもせむすべなしや、と云を、たとへたるなり

椽。解濯衣之。恠。殊欲服。此暮可聞。

殊欲服は、ケニキホシケキとよむべし、ケニはことさらにと云が如し、他所に、勝異などの字をケとよめり、同意なり、○歌意は、一たび中絶たる人を、又おもひいだして、堪がたくあやくも、ことさらに逢まほしくおもふ哉、と云をたとへたり

橘之。島爾之居者。河遠。不曝縫之。吾下衣。

橘之島は、契沖、大和國橘寺のある邊なり、第二に、橘之島の宮とよめると同地なり、と云り、○歌意は、人遠くはなれたる地にゐたる故に、仲媒なども立て、表立て婚娶の禮を、とよのへたるにはあらで、其儘妻とせるよしをたとへいへるか、(契沖は、種姓高貴の人をも、あひすまむとおもへど、よしのなければ、さらぬ人を、下におもふをたとふるにや、といへり、いかゞ)

寄絲

河内女之。手染之絲乎。絡反。片絲爾雖有。將絕跡念乎。

河内女は、契沖云、河内國の女なり、十四には大和女ともよめり、そのほか難波女、泊瀬女、などの類なり、○歌意は、片思にてはあれど、しかすがに思ひ絶果むと思はむやは、絶むとはおもはず、くりかへしく、え思ひわすれず、と云を、たとへたるなり

寄日本琴

伏膝。玉之小琴之。事無者。甚幾許。吾將戀也毛。

伏膝は、五卷琴娘子歌に、伊可爾安良武日能等伎爾可母許惠之良武比等能比射乃倍和我麻久良可武、とありて、そこに書紀を引て云る如し、○事無者は、さゝはることなからばの意なり、男女の中に障事ありて、え逢がたきときによめるなり、○甚幾許は、イトコ、ダクニと訓むもさることながら、十一に、伊田何極太甚利心及失念戀故、とあるによらば、こゝもハナハダゴ、ダと訓べし、同じ意なる詞を重ねて、其深切なるを思はせたるなり、物語書に、いといたうといへる類なり、(さてかの極太甚を、ネモコロゴロニとよむ説は、なほ彼卷にいふべし、)○歌意、第二句は、事をいはむ料の序なり、障事なくて、思ふ如く心だらひに相見ば、嗚呼そこばく甚う戀しく思はむやは、となり

寄弓。

陸奥之。吾田多良真弓。著絃而。引者香人之。吾乎事將成。

吾田多良真弓とは、安太多良てふ地より、造り出せる真弓にて、古の名物にぞありけむ、吾田多良は、陸奥の地名なり、按に、陸奥國安達郡ありて、安達山あり、安太多良の嶺は、その山嶺を云るにや、さて此郡は、もと安太多良を和銅の制にて、國郡の名を二字に定められしとき、安達と書て、即安太多良と唱へけむを、後に字によりて、安太知と呼ことになれりしならむ、安太多を安達とかきて、良を省けること、牟射志を武藏とかきて、志を省きたる例なり、此類多し、しからば、安太多良は、後の安達なるべし、十四に、安太多良乃禰爾布須思之能、又美知乃久能安太多良末由美波自伎於伎氏、などよめり、(詞花集に、關のゆる人に問ばや陸奥の安達の真弓紅葉しにきや、とあ

るを思へば、吾田多良を安達といへるはさらにて、後には真弓をも檀木の事と思へるにこそ、(頭註、陸奥森岡の城下に、たゝら山と云小山あり、これ安太多良真弓とよめる處にや、今獅子社と號くるがあらむ、あたゝらの根にふま鹿とよめるを思ふに、よしありて聲ゆ、鹿をしゝともいへばなり、と語れる人あり、と閑田耕筆に云り、)○著絃而(絃、舊本には絲と作り、今は一本に従ふ)は、弓絃をかけてと云なり、○歌意は、安太多良真弓に弦をかけて引ごとく、思ふ女を、吾方に引依たくは思へども、もし引依たらば、世人が、とにかく云たてさわがむか、となり

南淵之。細川山。立檀。弓束級。人二不知所。

南淵之細川山は、大和國十市郡なり、天武天皇紀に、五年夏四月、是月、勅禁南淵山細川山、並莫二麩。薪一契冲云、南淵は、ひろくて、其中にわきて、みなふち山といふも、細川山と云もありて、みなふちの細川山とこゝによめるなるべし、○弓束級は、弓束は、和名抄に、釋名云、弓末曰彌、中央曰彌、和名由美都加、とあり、級、字、字書に絲次第也、とありて、マクとよむべき義なし、又マテとよむべき字なし、或説に、級はもと纏及とありしを、纏の傍減て、及を上へつけて級となりしにやと云り、さもあるべし、兵庫寮式に、凡御梓弓一張云々、纏彌料、綠組一條(長四丈五尺)とあり、これは收置く料なるべし、こゝに弓束纏といへるは、引料に、にぎり革を纏ことなり、同式に、造彌角裁革纏彌、とあるこれなり、○歌意は、細川山に、生立たる檀木を伐取來て、弓に造りて、そのにぎりに革を巻など、よろづとへのへて、事成就べく思ふ女を、わがものとして、手に入て持までは、人にしられじ、となり

寄玉

安治村。十依海。船浮。白玉採。人所知勿。

十依海は、或人の考に、十は群字の畫の滅失たるにて、ムレヨルウミニなるべし、といへり、(十縁と云詞はあれども、こゝには然いふべくもなし)○白玉採は、シラタマトルトと訓べし、○歌意は、安治群の群て依來る海に船を浮て、かゆきかくゆき玉を求るごとく、人多く群れる中を、かゆきかくゆき、けさうのさまをなして、世にしらるゝことなかれと、外より見る人のいさむるなるべし

遠近。礮中在。白玉。人不知。見依鳴。

歌意かくれたるところなし、女を玉に譬へたるなるべし

海神。手纏持在。玉故。石浦迴。潛爲鴨。

手纏持在は、三卷に、笠朝臣金村、角鹿津にてよめる長歌に、綿津海乃手二卷四而有珠手次懸而之努櫃、ともよめり、○玉故には、玉なるものを、といはむがごとし、(俗に玉ぢやにといふ意なり)○歌意は、海神の手に纏持賜ふ玉なれば、いかにしても、とり得ることは難きを、忍びあへず、なほいかにもしてとり得むとて、礮の浦のめぐりにて潛するかな、となり、たとふる心は、ぬしある女なるを、それになほ思ひはなつことをえせずして、心をかけて、いかでとおもひをつくすよしなり

海神。持在白玉。見欲。千遍告。潛爲海子。

千遍告は、チタビソツゲシと訓べし、(告はツゲシなり、略解に、ノリシとよみしは、いかど、)○潛爲海子は、仲媒をたとへたるなるべし、○歌意は、海神のもちたまへる玉の見まくほしさに、止ことを得ず、海子をたのみて千返告し、と云ならむ、○此下に、第一二の句、底清沈有玉乎とて、同歌を出せり

潛爲。海子雖告。海神。心不得。所見不云。

歌意は、仲媒は、主に千返告はしつれども、領したる主の心底をしらねば、あひみえむともいはぬ、といへるにや

〔右五首。柿本朝臣人麿之歌集出。〕

海底。沈白玉。風吹而。海雖荒。不取者不止。

沈は、(略解に、シヅクは、しづけるを約云るにて、沈みてあるなりといへるは、いとわろし、)石著なり、次下の歌に、石著玉と書たるが如し、此次に、沈有玉乎、又沈白玉、又十一に、淡海海沈白玉、十九に、藤奈美能影成海之底清之都久石乎毛珠等吾見流、などあり、海底の石に著てあるを、志豆久といへり、催馬樂に、かづらきの云々白玉しづくや云々を、靈異記には礮著と書り、思合べし、又廿卷に、豆久志奈流美豆久白玉、とよみたるは、水著にて、志豆久の石著なることをも思ふべし、十八に、海行者美都久屍、とも見ゆ、(但し、古今集十六哀傷歌に、水の面に志豆久花の色さやかにも君が御蔭の念ほゆるかな、とよめるは、志豆久は、蔭の移ることを云言と心得たるに

や、此歌のみによりて、古志豆久といひし言の意を思ひ誤るべからず、さて志豆久は、十九に、志都久、濱成式に、旨都俱旨羅多麻、とあるなどによるときは、都の言清べきがごとくなれども、多く沈字を借用ひ、廿卷にも、美豆久とあるなどによりて、姑濁音と定つ、○歌意は、父母などのいさめころびて、逢がたき女なれど、つひにあはずしては止じ、の心にたとへたり

底清。沉有玉乎。欲見。千遍會告之。潛爲白水郎。

此上に、第一二句かはれるのみにて、同歌を載

大海之。水底照之。石著玉。齋而將採。風莫吹行年。

齋而將採は、齋祈して、疵つけず、全くたひらかに採得む、といふなるべし、○風莫吹行年は、本居氏云、行は所の誤にて、カゼナフキソネなり、○歌意は、わが思ふ女を大切に、首尾よく事なくわがものにせむと思ふを、人のかにかくに、いひさわぎなどしてさふることなかれ、といふならむ

水底爾。沈白玉。誰故。心盡而。吾不念爾。

歌意は、水底の玉に心をつくしてこそ、いたく思ひつきたるなれ、誰故に心をつくして、思ふべしやは、他に心をつくして、思ひはせぬことなるを、となり、吾不念爾の詞に、意を含めたるなり、古今集に、誰故に亂そめにしわれならなくに、とある類なり、(略解に、人のいひつげるをとめをこ

ふるなり、といへるはいかゞ)こは女を玉に譬へたるなり、○此歌、仙覺抄に濱成式を引て美那會已弊旨都俱旨羅他麻他我由惠爾已々呂都俱旨且和我母波那俱爾、と載たり

世間。常如是耳加。結大王。白玉之緒。絶樂思者。

緒字、舊本に結と作るは誤なり、今は元曆本に従つ、○歌意は、かたく結びてありし玉の緒なればいつまでも絶ることはあらじと思へるに、今かく絶ることをおもへば、世間の人の約も、常にかやうのことにもあるらむか、それ故に、わがかたくちぎりしことも、絶たるならむ、となり

伊勢海之。白水郎之島津我。鰓玉。取而後毛可。戀之將繁。

白水郎之島津は、契沖、島津は、むかしありけむ伊勢の海人の名にや、日本紀に、海人の名をも載られたり、鵜をしまつ鳥といへば、よくかづきするとて、鵜を名とせし海人なるべし、と云り、さてその譬へたる意は、かの鰓玉を取て後、いよくめづらしき如く、逢見て後、戀る情の増らむと云意を、そへたるなり、と云り、(略解に、島津は、島は鳥の誤、我は流の草書より誤て、アマガトリツルなるべし、といへるは、いかゞ)○歌意は、海人の島津が、鰓玉を採得しごとく、女を吾物に領得たらば、心をなぐさむべきに、さはなくして、得て後に、いよく戀しく思はむか、といへるなり、逢見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり、の謂なり

海之底。奥津白玉。縁乎無三。常如此耳也。戀度味試。

縁乎無三は、縁邊のなき故にの意なり、いひよらむたづきのなきをたとふ、○歌意は、奥つ白玉をとり得むとおもふに、とり得む縁邊のなき如く、いひよらむ爲方のなき故に、常に如此ばかり戀しく思ひつゝ、月日を經度らむか、となり

葦根之。勲念而。結義之。玉緒云者。人將解八方。

勲は、勲の誤なり、○人將解八方は、中をさくる人あらじ、といふ意にたとふ、○歌意は、深切に思ひて、堅く結びてし玉緒の如くに、深く約りて、いつまでも變らじと、堅く結かはせしといはゞ、吾中をさまたげさくる人あらむやは、嗚呼さる人はあらじを、となるべし

白玉乎。手者不纏爾。匣耳。置有之人會。玉令泳流。

手者不纏爾、略解に、爾は底の誤なり、マカズシテと云べきを、マカズニと云は俗語なり、マカズテとあるべしと云るは、しひ言なり、もとのまゝに、マカズニなり、かやうに不爾と云も古言なり、九卷に、五十母不宿二吾齒曾戀流、十二に、安河安寢毛不宿爾、十三に、眠不睡爾妹戀丹、又、人寢味寢者不宿爾、十七に、伊母禰受爾今日毛之賣良爾、十三に、蛾葉之衣浴不服爾、(字の誤あり、彼卷に云べし)など見えたるを思ふべし、○歌意は、白玉をとりあげはしつれど、手玉になしてまかずに、箱に入てのみ、大切に齎きおきて、つひにいたづらに、その玉を水中に捨ておぼらしめつると同じく、下には契置ながら、あふこともなく、あらはれて妻ともさだめず、つひにはいたづらになりて、わが物ともえせざる人を、かたへよりいとをしみて、よめるなるべし

照左豆我。手爾纏古須。玉毛欲得。其緒者替而。吾玉爾將爲。

照左豆は、未詳ならず、契沖、テルは、ものをほむることば、サツは、薩男なり、と云り、(又略解に、岡部氏の説をあげて、テルサツは、玉商人を云よしいへれど、うべなひがたし、)今按に、これは誤字あるべし、ワタツミノなどあるべき所なり、猶考べし、○歌意は某が手玉にして、久しく纏ふるしたりとて、今はその玉を、用なきものに思ひ、手をはなすこともがなあれかし、さらば其緒を貫替て、わが手玉にせむを、となり、たとふる意は、手にまきふるすとは、女をもたる人あるに、いかで其女をふるき物にして、思ひすてよかし、さらばわが妻にせむを、と云るなり、其緒とは、先の夫をたとふるなり、十六に、ある人のむすめ、をここに捨られて後、ある人にむかへられけるをしらすして、又ある人のゑむとおもひて、女のおやのもとへ、よみておくれる歌に、眞玉者緒絶爲爾伎登聞之故爾其緒復貫吾玉爾將爲、答歌、白玉之緒絶著信、雖然其緒又貫人持去家里、これにてたとへの意あきらかなり

秋風者。繼而莫吹。海底。奥在玉乎。手纏左右二。

歌意かくれたるところなし、得かてなる女を玉に比へ、父母などのころびを、風にたとへたるなるべし

寄山。

磐疊。恐山常。知管毛。吾者戀香。同等不有爾。

磐疊はイハタ、ムと訓べし、(イハダ、ミと訓るは、わろし、)磐を疊み重ねたる山は、物おそろしく見ゆるものなれば、恐山とつゞけたり、六卷に、奥山之磐爾蘿生、恐毛問賜鴨念不堪國とあり、思合べし、○恐山は、さがしくて、物おそろしき山を、おふけなく、わが及ばれぬ品貴人に、たとへたり、○同等不有爾は、(舊本には、トモナラナクニとよめり、)ナソヘラナクニとよめるよろし、同等に、なぞらへいふべき品の人に、あらぬことなるをの意なり、伊勢物語に、おふなく思ひはすべしなぞへなく高き賤しきくろしかりけり、とあり、○歌意は、多くの磐石を疊み重ねて、さがしく物おそろしき山の如く、品貴き人にて、吾儕と同等に、なぞらへいふべき人にあらず、されば恐れ憚りてあるべきことなるを、なほ思絶ことを得ずして、戀しく思ふ哉、となり

石金之。凝木敷山爾。入始而。山名付染。出不勝鴨。

石金は、磐之根なり、○凝木敷は、木凝とありけむを、下上に誤れるか、コシシクの言は、既く云り、○歌意は、磐根の疊重りて、凝々しく物おそろしき山に、入始てより、その山がものおそろしければ、出去むとは思へども、なほ山が馴著しき故に、他所に出来るに得堪ぬ哉、となり、契沖云、此歌も、同等ならぬ人にいひそめて、人のため、身のため、よくもあらじなど思ふことあれど、えおもひやまぬを、山なつかしみ出かぬるとは、たとふるなり

佐保山乎。於凡爾見之鹿跡。今見者。山夏香思母。風吹莫勤。

於凡爾見之鹿跡は、おほよそに見てありしかど、(オホニは、一通りにといふが如し、)○歌意

は、今までは、佐保山を一通の山と思ひて、おほよそに見てありしかど、其山に分入てよく見れば、花紅葉などもことにすぐれて、さてもなつかしや、ゆめく、此山に風吹荒て、花紅葉などを散し亂すな、となり、契沖云、これは人になるまゝに、いとどふかくおもひまさるにたとへたり、かぜふくなゆめは、佐保山をなつかしむは、花紅葉によりてなれば、思ふ中をさくる人を、風にたとへて吹なと云は、さふることをすなと云なり、第三に、家持、昔許會外爾毛見之加我妹子之奥櫛常念者、波之吉佐寶山、吾王天所知卒登不思者於保爾曾見谿流和豆香蘇麻山、とあり

奥山之。於石蘿生。恐常。思情乎。何如裳勢武。

本句は、此上の歌に、六卷の歌を引るが如し、○歌意は、なつかしき人なれば、立入て親交むとは思へど、品貴き人なれば、同等の人の如く、立交りて親かむは恐あれば、憚り遠ざかりてあるべきなれど、え思ひ放さずて、かくなつかしく思ふ心を、いかにかせむ、さても爲む方なしや、となり

思勝。痛文爲便無。玉手次。雲飛山仁。吾印結。

思勝は、(舊本には思贖とあり、それに従は、オモヒアマリと訓べし、字註に、贖餘也、と見えたり、)今是一本にかくあるに従つ、オモヒカテと訓べし、思不得といはむが如し、思に得堪ずの意なり、○雲飛山は、畝傍山なり、後紀一卷にも、雲飛宿禰淨永、とあり、○歌意は、峻く峻しき山なれば、恐憚りてあるべしとは知ながらも、なほ思に得堪ず、甚も爲む方のなき故に、畝傍の峻しき山に分入て、標を結つる、となり、契沖云、うねび山にしめむすぶとは、およびなき人を、いかにしてが

などおもふを、高く大きな山を勝鬘として、わが物と領せむとするによするなり、夫木集に、尋
來て今ぞしめゆふ玉手すき雲居る山の初さくら花、とあるは、今の歌を、あしくよみてとりたるな
るべし

寄木

天雲。棚引山。隱在。吾忘。吾忘。

吾忘は、本居氏、忘は、下心二字の誤で、一字になりたるなり、といへり、アガシタゴ、ロとよむ
べし、○木葉知(知の下、一本に良武の二字あれど、此歌の書様、いたく略きて書たれば、なきぞ
よろしき)は、二卷に、鳥翅成有我欲比管見良目杼母人社不知松者知良武、三卷に、眞木葉乃之奈
布勢能山之奴波受而吾超去者木葉知家武、これらに合せて見べし、十一に、我背兒爾吾戀居者吾屋
戸之草佐倍思浦乾來、ともあり、○歌意、第一二句は序にて、山の雲に隠るといひかけたるなり、
さてかく人目をしのび隠れて、色にあらはさぬ心を、木葉はそれと知けむにや、其さまあらはれた
りとなり

雖見不飽。人國山。木葉。己心。名著念。

人國山は、契沖云、大和なり、下に、人くに山のあきづ野の、とよみたれば、吉野にあるなるべし、
○己心は、これも下心の誤にて、シタノコ、ロニなるべし、と本居氏云り、○歌意は、みれどもみ
れども見あかぬ、人國山の木葉のうるはしきに見つきて、心の裏にのみ馴著く思ふぞ、といへるに

て、女を木葉にたとへたるなるべし

〔右二首。柿本朝臣人麿之歌集出。〕

白管之。眞野乃榛原。心従毛。不念君之。衣爾摺。

心従毛云々は、心裏よりも云々、と云がごとし、毛は、表はさるものにて、裏よりも眞實に思ふを
いふなり、されば此は自我心裏よりも、といふなり、○歌意は、自我心裏よりも、眞實に、あの君
が衣に摺れむとは思はざりに、思はずも、その君が衣に摺れつる、となり、女の自を榛にたとへ
たるなるべし、もとより思ひよらぬ人に、さがたきよしありて、得られたる女よめるにや

眞木柱。作蘇麻人。伊左佐目丹。借廬之爲跡。造計米八方。

伊左佐目丹は、契沖云、いさゝかなり、かりそめにといふも、心は通ぜり、古今集にも、いさゝめ
に時まつまにぞ日はへぬる、こゝろばせをばみゆるものから、とあり、○歌意は、そま人のつくれ
るまきばしらは、みや木のためにして、いさゝかなるかりほなどの柱のために、とおもひあて、つ
くりけむやは、そのごとく、わがおもひそめていひ出しことも、ことのなぐさにいへる類にはあら
ず、嗚呼末とほく偕老のちぎりをとげむとこそ、いひいでたるなれ、といふなるべし

向峯爾。立有桃樹。成哉等。人曾耳言爲。汝情勤。

成哉等の上、元曆本には、將字ありて、ナラムヤトとよめり、○耳言は、さゝやくことなり、(阿佛

が乳母のふみに、心しれるどち目見あはせて、人のあまねくしらぬほどのことうちわらひ、そよや
などさゝやいて、おのづからなぞやなどとふ人あれば云々、土佐日記異本に、舟君のからく拵り出
して、ふと思へる事を、えしも誣へとて、さゝめきてやみぬ、(落窪物語に、四の君の御めのと、か
のとのなりける人を、知たりけるをよろこび給て、さゝめきさわざ給うて、ふみやらせ給ふめり
といへば云々、とあるは、榮花物語に、そよき立て、狭衣に、そよきありき給ふ、などいへる、そ
そくに同言にて、こゝとは別なるにや、)さゝめきごと、云も、さゝめきごとなるべし、(長恨歌に
私語、)源氏物語若菜上、にあやしううちにのたまはする、御さゝめきごともの、おのづからひ
るごりて云々、とあり、又靈異記に、唯佐々支且、とあるを見れば、佐々久ともいへるにや、もし
佐々女支且とありしを脱せるか、○汝情勤は、勤は忌といふと同言にて、なむぢが心忌つゝしみ
て、人にしらるゝことなかれといふなり、○歌意、第一二句は、桃子の成といひつゞけたる序な
り、夫妻の約契成就ぬるやいかにと、世人がさゝやきていひしぞ、よくせばあらはれぬべし、汝
が心忌つゝしみて、人にしらるゝことなかれ、となり

足乳根乃。母之其業。桑尙。願者衣爾。著常云物乎。

母之其業は、ハ、ガソノナルと訓べし、ナルとは、何事にまれ、その産業をするを云詞なり、業を
ナリとよむ、即ナルの體言となれるなり、廿卷に、佐伎牟理爾多々牟佐和伎爾伊能伊毛何奈流能
伎己等乎伊波須伎奴可母、とあるにても知べし、(略解に、ハ、ガソノワザノとよむべし、と云るは
いみじきひがことなり、)○桑尙、契沖云、桑の下に、子の字の落たるなるべし、寄木と云ことに叶は

すと云べけれど、此集の題は、のちくゝに題をするてよむにはかはりて、おほやうなること集中を案
すべし、かふこの桑をはみてそだてば、桑子といふにて、寄木と云心あり、といへり、さもあるべ
し、蠶をかふことは、女のわざなるが、中にも母親は、その夫その子などに、衣になして著せむが
ためにすることなれば、もはらとある方につきて、母之其業とはいへるなり、十二に、垂乳根之母
我養蚕乃眉隱馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿異母二不相而、とあるも同じ、○歌意は、母親の、その夫やそ
の子に、衣になして著せむがために、心をつくして、そのしわざにする蠶にてさへ、いかで吾衣に
して著せたまへとねがへば、ゆるして吾に著すれば、吾物として著るといふものなるを、人の女子
をも、いかで吾に得しめたまへと、ひたすらにねがふときには、ゆるすまじきにあらねば、その母
親にねがひて見ばや、となるべし

波之吉也思。吾家乃毛桃。本繁。花耳開而。不成在目八方。

本繁は、木繁といはむが如し、○歌意、本句は序にて、ただうはべに、花々しくうるはしく約れ
るのみにて、嗚呼つひに實に成ずしてあらむやは、となり、契沖云、約することのみありて、實な
からむやとたとふるなり

向岡之。若楓木。下枝取。花待伊間爾。嘆鶴鴨。

若楓木は、楓の若木なるべし、楓は加都良なり、(加徹流氏にあらず、)品物解に委云り、○花待伊
間爾は、伊は助辭にて、花待間になり、さてこの伊の言は、待の下につく伊なり、故花待伊と絶

心持あるべし、(間につけて、伊間と云にはあらず)十卷に、青柳之絲乃細紗春風爾不亂伊間爾令視
子裳欲得、とあり、この類の伊の助辭、續紀宣命にことに多し、○歌意は、むかひの岡の楓の若木
の、いつか生樹て花咲むと、下枝を取て待間の、嗚呼さても待遠やと、歎息きつる哉、となり

寄草

冬隱。春乃大野乎。燒人者。燒不足香文。吾情熾。

冬隱は、春の枕詞なり、既出づ、○歌意は、春の野をやく人は、猶やきたらねばにや、わが心をま
でやくらむ、さてもくるしや、と思ひにもゆる心をいへり、さまざまに思ふことのしげき心も、野の
くさのごとくなればなり、と契沖いへり、其意もあるべし、遊仙窟に、未ニ會飲炭、腹熱如燒、とあり

葛城乃。高間草野。早知而。標指益乎。今悔拭。

早知而は、契沖、はやく領してなり、といへり、知は、領地の領にて、吾物に領得たるをいふこ
となり、○今悔拭は、拭は音にて、シキに用ひて、イマソクヤシキかとも思へども、或説に、拭は
茂の誤にて、イマシクヤシモならむ、と云るぞよろしき、○歌意は、葛城の高間の野を、早く吾物
に領得て、勝示さして、人にとられぬやうにすべかりしを、しかせずして、人に得られて、今更一
すぢにさても悔しく思ふよとなり、此歌は、わが手にいりぬべき人を、人にとられてくいてよめ
るなり

吾屋前爾。生土針。從心毛。不想人之。衣爾須良由奈。

土針は、草名、品物解に具云り、物を染る草なるべし、○從心毛は、心裏よりもと云が如し、毛は、
表はさるものにて、裏よりも、眞實に思ふよしなり、○歌意は、吾やどに生る土榛よ、汝が心裏よ
りも、眞實に思ふ人は、他にあらじと思へば、ゆめく他人の衣に摺ることなかれ、となり、吾
屋前爾云々と云るは、わが手に入たる女にたとへたるなり、とかくいひかづらふ人ありとも、わ
れをおきて、心の裏よりもおもはぬ人にうつるな、といましむるなり

鴨頭草丹。服色取。摺目伴。移變色登。儂之苦沙。

歌意は、鴨頭草に衣を綵りて、摺まほしくは思へども、そのつき草は、當時はうつくしけれども、
はやく變ひて、色のかはりやすきものと、かねて聞たれば、たとひ摺とも、はやく變はむと思ふ
が、苦しさや、となり、これはあだなる人のたのみがたきにたとへたり

紫。絲乎曾吾搓。足檜之。山橘乎。將貫跡念而。

搓。舊本據に誤、今は元曆本に従つ、○歌意かくれたるところなし、これは、人をふかくおもひ入
て、さまざまにこゝろをつくすをたとへたり

眞珠付。越能菅原。吾不茹。人之茹卷。惜菅原。

眞珠付は、枕詞なり、○越能菅原は、十三に、息長之遠智能小菅、とあると同處か、彼は近江國坂
田郡なり、又は二卷に、玉垂之越野、とあると同地ならば、大和國高市郡なり、○歌意かくれなし、

女を菅にたとへたるなり

山高。夕日隱奴。淺茅原。後見多米爾。標結申尾。

歌意は、淺茅原のおもしろきを、日暮て後も、なほ見愛むが爲に、灼く標結て置べかりしものを、山が高き故に、それに夕日が隠れて、見えなくなりぬるゆゑ、標結ことをせざりしを悔るなり、契沖云、これは、淺茅原のおもしろきを、うるはしき人にたとへて、夕日かくれぬとは、たま／＼あひみて、あかぬわかれせし後、又もみぬたとへなり、かゝらむとらば、淺茅原にしめゆふごとく、人をもかたくちぎりて、のちもあひみましものを、と悔るなり

事痛者。左右將爲乎。石代之。野邊之下草。吾之刈而者。

左右將爲乎は、カモカモセムヲと訓べし、(略解に、トモカモセムヲとよみたれども、トモカクモなどやうに云むは、古語には聞も及ばぬことなり、中比よりの語にこそあれ、)六卷に、凡有者左毛右毛將爲乎、恐跡振痛袖乎忍而有香聞、とあり、○歌意は、石代の野べの下草を刈得るを、思ふ女を得るにたとへたるにて、思ふ女を得て後には、人の物いひのしげくとも、それはその時にあたりて、ともかうもせむものを、まづ得て、わがものとだにしたらばよからむ、とよせたるなり、○舊本、此歌の下に註して曰、一云、紅之寫心哉於妹不相將有、これは右の歌とは別なり、一云とあるはあたらす、これは十一に、玉緒之鳥(寫の誤)意哉年月乃行易及妹爾不逢將有、とある歌の、亂れてこゝに入しものにやあらむ

眞鳥住。卯名手之神社之。菅根乎。衣爾書付。令服兒欲得。

眞鳥住は、枕詞なり、(契沖、まとりは鶉なれば、うなてとつゞくといへども、住と云字心得がたし、鶉は海に住ものなれば、まとりすむ海、と云かけたるものなり、又按に、鶉ならずとも、木をまきと云如く、よろづの鳥を眞鳥と云べし、もりに諸鳥來てあつまるものなれば、かくもつゞくるか、といへり、今按に、宇奈原など云は、海之原と云ことなれば、海を宇奈とは云べからず、又萬の鳥を、ひろく眞鳥と云むことも、いかゞなり、)仙覺註に、眞鳥は鶉なり、えびすは、鶉の羽をば、眞鳥の羽と云なりといへり、此説によるに、眞鳥大臣といふ名も、此鳥によりたるものなるべく、又九卷に、鶉住筑波乃山とよみ、又集中に、筑波嶺にかゝ鳴鶉ともよめるを、むかへ見るに、この雲梯の社は、世に木深くて、鶉の常に來棲が故に、千鳥鳴佐保川、味乃住落沙之入江、たどやうによめる類につゞけたるならむ、十二にも此つゞけの歌あり、(伊勢氏、四季草にも、眞鳥羽にて矢をはぐこと見えたり、これも鶉を云ならむ、)○卯名手之神社、卯名手は、和名抄に、大和國高市郡雲梯(宇奈天)とあり、神社は、出雲國造神賀詞に、事代主命能御魂乎、宇奈提爾坐云々、とあるこれなり、(契沖云、神社とかきてモリとよめるは、木のしげき所には、神のまし／＼てまもり玉へば、守と云心にて、森の名も負たるか、)なほこの神社の事、十二に、眞鳥住卯名手乃杜之神思將御知、とある歌につきて、委註べし、○菅根は、根は、實字の誤歟、と云る説は、さることなり、(岡部氏の、根は、彌の誤ぞと云るは、やゝ字形は似たれども、菅彌と書むこと、こゝはいかゞなり、)さて實と根とは、字形は甚異りたれども、常に菅根てふ歌の多かるに目なれて、ふと暗に菅根とは寫誤

れるなるべし、さて菅實は、上に、妹爲菅實探、とよめり、○書付は、摺著と云むが如し、眉畫、繪畫など云畫なり、○歌意は、雲梯の神社の、菅實のうつくしきを、衣に摺つけて、嗚呼吾に著せむ女もがなあれかし、となり、この歌は譬喩の體にあらず、きこえたるまゝなり

常不知。人國山乃。秋津野乃。垣津幡駕。夢見鴨。

常不知は、舊本に知字落たり、五卷に、都禰斯良農道乃長手裳、とよめり、さてこの歌にては枕詞にて、常に經知ぬ、他國、とつゞきたり、○人國山は、此上に出たり、○秋津野乃垣津幡駕とは、契沖が、秋津野に澤ありて、それにおふるかきつばたなり、と云るがごとし、鶯は借字、乎は語辭、之は例のその一すぢなることをいふ助辭なり、○歌意は、人國山の秋津野の、その澤にさきたる、かきつばたのうるはしき花を、現には見るることならずて、夢に見し哉、となり、契沖、かきつばたを、夢にみるとよめる喩の心は、かきつばたは、紫にてうるはしければ、色ある人にたとへ、夢は、その人をうつゝともおぼえぬばかり、ほのかにみるによするなり、といへり

姫押。生澤邊之。眞田葛原。何時鴨絡而。我衣將服。

姫押は、ヲミナヘシなり、かく書るは、いかなる所由にか、未詳ならず、(もしは誤字などにもありむか)さてこゝは枕詞なり、○生澤邊之は、サキサハノベノと訓べし、これを古來、オフルサハヘノとよみたれども、ひがことなり、こは己がはじめて考得たるよみなり、生を、サクと訓例は、六卷に、春者生管、十六に、八重花生跡、などあるが如し、(又十卷に石走間々生有白花乃、とあるを

も、マ、〇〇〇〇〇〇カホバノともよむべし、さてこそ、姫押は、さくと云にか、れる枕詞にはありけれ、さて生澤は、佐紀澤にて、四卷に、娘子部四咲澤二生流花勝見、十二に、垣津旗開澤生菅根之、又十卷に、姫部思咲野爾生白管自、又佳人部爲咲野之芽子爾、十一に、垣津旗開沼之菅乎、などあると同じ、さて、佐紀は、大和國添上郡の地名にて、その澤を佐紀澤と云ひ、その野を佐紀野と云、その沼を佐紀沼とよめり、又佐紀山ともよめり、十卷に、春日在三笠乃山爾月母出奴可母佐紀山爾開有櫻之花乃可見、とあり、○歌意は、佐紀澤の邊の眞葛を絡依取來て、いつか衣に織て、吾服むぞ、さて早く衣に織て著たしや、となり、女を田葛にたとへたるなり

於君似。草登見從。我標之。野山之淺茅。人莫苜根。

於君似云々、十九に、妹爾似草等見之欲里吾標之野邊之山吹誰可手乎里之、とあり、○野山之淺茅、いかなり、按に、山は上字の誤にて、ヌノへ歟、淺茅は女をたとへたるなり、○歌意は、君に似て、うつくしき草と見しより、我標結置し野の淺茅を、ゆめく謾に刈てとることなかれ、となり、女を淺茅にたとふるは、秋になりて、露霜にあひて色づけるが、紅顔に似たるをいふなり、契沖云、淺茅を人にたとふるに、和漢の心あるべし、詩衛風云、手如柔荑、鄭風云、出其闔閭有女如茶、註云、茶茅華、詩にかくたとふるは、つばなの白くうるはしきを、女にたとふるなり

三島江之。玉江之薦乎。從標之。己我跡曾念。雖未苜。

三島江之玉江は、攝津國なり、十一に、三島江之入江之薦乎刈爾社吾乎婆公者念有來、又三島菅未苜

在時待者不著也將成三島菅笠、などあり、○歌意かくれたるところなし、たとへのさまあらはなり
如是爲而也。尙哉將老。三雪零。大荒木野之。小竹爾不有九二。

如是爲而也といひ、尙哉といひて、也の疑辭重りて、いかゞしきやうなれど、古歌にはその例多き
ことなり、既に委説るが如し、○尙哉將老は、尙は借字にて、默止ありて、老なむかと云なり、す
べて、奈保は、事を起したつることなくして、たゞあるを云ことなり、續紀十卷詔に、猶在倍伎物
爾有禮夜止思行之亘云々、とある猶も借字にて、此歌なるに同じ、委くは五上に、奈保奈保爾伊弊
爾可弊利提云々、とある歌の註に、例どもを載たり、考合べし、○三雪零には、さして用なし、たゞ
枕詞の如く云たるなり、○大荒木野は、神名式に、大和國宇智郡荒木神社、とある所なるべし、と
契沖云り、古今集に、大あらしのりの下草老ぬれば駒もすさめずかる人もなし、曾丹集にも、大
あらしのをさゝが原、とよめり、○歌意は、大あらし野の小竹の、人に刈のこされしこそ、つひに
かる人もなくて、いたづらに年経るものなれ、その大あらし野のしぬにもあらぬことなるを、われ
は人にいざなはるゝこともなく、默止ありて、このまゝに年の老はてなむか、と云なるべし、十一
には、如是爲哉猶八成牛鳴大荒木之浮田之柱之標爾不有爾、とて載

淡海之哉。八橋乃小竹乎。不造矢而。信有得哉。戀敷鬼乎。

信有得哉は、マコトアリエムヤと訓べし、十五に、於毛波受母麻許等安里衣牟也、と假字書あり、
又サネアリエムヤとも訓べし、九卷に、核不所忘面影思天、十四に、安志可流登我毛左禰見延奈久

爾、十五に、伎美爾故布良牟比等波左禰安良自、又夜須久奴流欲波佐禰奈伎母能乎、十八に、由可
牟登於毛倍騰與之母佐禰奈之、廿卷に、伎美乎安我毛布登伎波左禰奈之、などあればなり、○歌意
は、矢橋の小竹を取、來て、矢に造る如く、わが思ふ人を、わが物と領得ずして、まことにありえら
れむものかは、かほどにこひしく思はるゝものを、と云るなり、(舊説、矢橋の名におふ小竹なれば、
矢に造るべきを、と云意なり、といへれど、これは必矢橋と云にはかゝはらぬなるべし、所はいづ
くにもあれ、たゞ、小竹を矢にするを云るならむ)

月草爾。衣者將摺。朝露爾。所沾而後者。徒去友。

歌意は、月草のうつくしき色にて、衣は摺て染む、よしや朝露にぬれて、後にはうつろひかはりは
すとも、そこはいとはじ、となり、人の心のうつりかはりやすきを、月草にたとへ、朝露にぬれて
後と云は、なにぞさはることあれば、やがて心のかはるによせたり、かはりやすき人の心は、すこ
しなにぞさはることあれば、やがてうつろふものにて、たのみになりがたけれど、後の事はとまれ、
それまでは思はず、まづしばしなりとも、うつくしき人に相見む、となり、(現存六帖に、月草に衣
はすらじうつろふを心の色と人もこそみれ、とあるは、今の歌に本てよみながら、意はうらうへな
り、契沖云、今の歌、古今集秋上に載たるは、萬葉集にいらぬふるき歌をたてまつるといへども、
かむがへもらして入たるなるべし、といへるは、さることなり、抑古今集に、萬葉集の歌の入たる、
これかれあるにつきて、かにかくいぶかしみいふ人あれど、さのみ疑ふべきにたらず、いかにと云に、
かの延喜の頃は、既に古風はうせはて、凡そ世の人、萬葉をよくよみわきだめしはなかりしと見

ゆれば、此集に出たるを、得見わきまへずして、七八首ばかり、彼集に擧げむは、げにさも有べきことなり、既く古今集序に、吉野の山の櫻は、人麻呂が心には、雲かとのみなむおもほえける、とあるにても思ふべし、およそ人麻呂の歌に、花紅葉を、雲錦に見立たるたぐひのことは、一もあることなきは、此集を讀たらむ人は自知べし、さばかり萬葉に暗き世なりければ、かばかりの事は、などかながるべき、これにてとかく擧いふに及ばず、契沖が云しごとく、檢へもらせるのみにて他の理なし、やゝ下りて、さばかり才識の聞ありし源順なども、萬葉は得讀とかれざりしにて、そのかみを思ひやるべし、

吾情。湯谷絶谷。浮蓐。邊毛奥毛。依勝益士。

湯谷絶谷は、ゆたくと心の動搖をいへり、古今集に、大舟のゆたのためだに、と云るに同じ、○浮蓐は、品物解にいへり、池沼などに生るものなり、○邊毛奥毛は、池沼などの邊方にも奥方にも、と云なり、池沼などにも奥とよむこと、三卷に既く委く云りき、○歌意は、浮蓐の池沼などの、水上に浮びたゞよひて、邊方にも奥方にも依ぬが如くに、吾心もゆたくと搖ぎ動きて、つひに心を一方によせ定めて、鎮むる事を得ざらましを、となり

寄花。

是山。黄葉下。花矣。我小端。見反戀。

花矣は、本居氏云、矣は咲の誤にて、咲花なりしが、下上になりたるなり、○見反戀は、反は、乍の誤なり、と同人云り、さらば末句は、アレハツハツニミツ、コフルモとよむべし、○歌意かくれたるところなし、女を花にたとへたるなり

〔右一首。柿本朝臣人麿之歌集出。〕

氣緒爾。念有吾乎。山治左能。花爾香君之。移奴良武。

山治左は、契沖、常もちさの木と云ものなり、十一にも、山ぢさの白露おもみ、とよみ、十八長歌にも、ちさの花さけるさかりに、などよめり、和名抄に、本草云、賣子木、和名賀波知佐乃木、とあるも、たゞ知佐の木のことによ、と云り、なほ品物解に委云り、○歌意は、われは命にかけておもふものを、君は山ぢさの花のうつるふやうに、はや心かはりしぬらむか、さてもうらめしき事ぞ、となり

墨吉之。淺澤小野之。垣津幡。衣爾摺著。將衣日不知毛。

淺澤小野は、住吉郡、今の大歳神社の東南の方にありて、今田圃となれる地なりとぞ、(風雅集、俊成、いざや子等若菜探てむ根芹生る淺澤小野は里遠くとも)○歌意は、かきつばたのうつくしきを、衣に摺つけそめて著む、その日をいつとしらず、さても待遠や、となり、かきつばたは、紫にうるはしくほふものなれば、それをうつくしき女にたとへて、その女と事なるを、衣にすりつくるに、たとへたるなり、かきつばたを衣に摺ことは、十七に、加吉都播多衣爾須里都氣麻須良雄

乃服會比獵須流月者伎爾家里、とよめり

秋去者。影毛將爲跡。吾蒔之。韓藍之花乎。誰採家牟。

影毛將爲跡は、本居氏、影は移の誤にて、ウツシモセムトとよむべし、移すは、染るを云なり、と云り、今按に、毛も爾の誤にて、ウツシニセムトとありしにはあらずや、さらば移と云こと體言になりて、移染に爲むと云ことなるなり、○歌意は、秋になりて、花さきたらば、その花をとりて、移染に染むと、深く思設けて、吾蒔生し、韓藍の花を、誰が他方に採取て行けむぞ、となり、女を韓藍にたとへたり

春日野爾。咲有芽子者。片枝者。未含有。言勿絶行年。

未含有は、契沖云、含は、花のつぼめるを云、萩は秋草の中にぬき出たる物にて、その片枝のまださかぬと云は、うるはしきうなるに、行末をちぎる心なり、○言勿絶行年は、言の通ひは絶ることなかれ、と云なり、行年は、本居氏云、所年の誤にて、ソネなり、○歌意は、春日野の、うるはしき萩の、片枝は咲出で、片枝は未つぼめる如く、未人となりをへざる童女なれば、吾得て妻とすべき時にはあらず、されどこの愛たき女を、他人に得さすべきにあらざれば、今より吾に、言の通は絶ことなかれ、と行末をちぎれるなり

欲見。戀管待之。秋芽子者。花耳開而。不成可毛將有。

歌意は、人となりて、花の咲たる如く、うるはしき光儀を見まくほしさに、戀しく思ひつゝ待しその女なれば、たゞうはべの花々しき事のみにて、實に成就すては得あるまじきに、なほ實にならずしてあらむか、さても本意にかなはざることや、と女を芽子に比へたるなり

吾妹子之。屋前之秋芽子。自花者。實成而許曾。戀益家禮。

歌意、第一二句は序の如くいひたるにて、女に花々しく、言のみいひかはしたる時には、實に事成就たらば、かくまでは戀しくは思はじと思ひしを、中々にさはなくて、眞實になりてこそ、彌益に戀しく思ふ心は、まさりてあれ、となり、逢見ての後の心にくらぶればの意なるべし、契沖云、これは萩の實を賞して、たとふるにはあらず、第十にも、わがやどにさける秋はぎ散過て實になるまでに君にあはぬかも、とよみて、實ある物なれば、花やかに云わたりたるよりは、あひみて眞實をみるがまされり、といふにたとふるなり

寄稻。石上。振之早田乎。雖不秀。繩谷延與。守乍將居。

振之早田乎は、第五句の、守乍と云へつゞく意なり、不秀とも守つゝ居む、と云なり、第三句へ直に續ては聞べからず、○雖不秀は、穗に出ずともと云意にて、まだいはけなき人にとよ、○繩谷延與は、標繩なりとも引延よ、となり、繩は、舊訓のまゝに、シメと訓べし、繩はやがてしめなればなり、(略解に、ナハとよみしは、いたくなづめり、と中山嚴水が云たるぞよき、)十卷に、足曳之山

田^タ佃^{テン}子^シ不^フ秀^{シュ}友^ユ繩^ヅ谷^コ延^ニ與^ヨ守^シ登^ト知^チ金^ニ、同^ト打^ウ細^コ爾^ニ鳥^ト雖^モ不^レ契^ス繩^ヲ延^テ守^ル卷^ヲ欲^ス寸^ヲ梅^ヲ花^ヲ鳴^カなど、皆^ハシメと訓^ベし、
○歌意は、いまだ穂には出されば、刈取べき時にあらず、よしや刈取ずとも、標繩なりとも引はへよ、さらば吾それを他人に刈しめず、守つゝ居らむ、となり、いまだいはけなき女なれば、取得べきにあらず、されどうつくしき少女なれば、他人には得させじ、つひに吾物とせむとおもへば、他人の得ぬやうにちぎりて置てよ、と仲媒にかたらふ意をたとへたるなるべし

寄^ヨ鳥^{トリ}

明日^ア香^カ川^{ガハ}。七^ナ瀬^セ之^ノ不^ヨ行^ド爾^ニ。住^ス鳥^{トリ}毛^モ。意^コ有^ロ社^{ソウ}。波^ナ不^レ立^タ目^メ。

七瀬之不行とは、七瀬は、ひろき川の瀬のおほかるを云り、五卷に、麻都良我波奈勢能與騰波、ともよめり、鈴鹿川に八十瀬とよめる類なり、不行は、義を得て書るなり、不通、不逝などの如し、○歌意は、契沖、七瀬によどむ水は、水鳥の心にはかなふまじけれど、さりとして、いつくにうつりすむべきにもあらず、と思ふ心あればこそ、波を立て打さわぎても、立さらずすむらめ、七瀬のよどの、よどみがちなるやうに、さはることのみありて、あふことなき中も、さりとしておもひすて、誰にかはうつらむとなり、と云り、今按に、あすか川にすむ水鳥も、七瀬のよどのしづかなる處に、處得てすむなれば、心ありてこそ、波をはふり立などして、人にもしられず、ながくひそみて住なれ、されば吾中も、人にしられて、とにかく云さわがれぬべきことにあらず、といふにもあるべし、吉野爾有夏實之河乃川余村爾鴨會鳴成山陰爾之氏、などいふごとく、しづかなる處得てすむを、淀に住と云るか

寄^ヨ獸^{ケダモノ}

三^ミ國^{クニ}山^{ヤマ}。木^コ末^ノ爾^ニ住^ス歷^ス。武^ム佐^サ左^サ妣^ヒ乃^ニ。此^{コト}待^{マツ}鳥^ツ如^ク。吾^{アレ}俟^マ將^チ瘦^{セム}。

三國山は、契沖云、越前國なるべきか、神名式云、越前國坂井郡三國神社、繼體天皇紀云、男大迹天皇、譽田天皇、五世孫、彥主人王子也、母曰振媛云々、天皇父、聞振媛顔容姝妙甚有嫩色、自近江國高島郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、中此云那、納以爲妣云々、天皇幼年、父王薨、振媛歎曰、妾今歸寧、高向、高向者、越前國邑名、奉養天皇云々、日本紀によれば、三國の内に、坂中井と云處も、高向と云處もあるなり、延喜式和名抄によれば、坂井郡に、三國高向あり、しかれば坂井郡もとみな三國なり、此所に三國山あるべし、(和名抄に、越前國坂井郡高向多加無古、これをいへり)○住歴は、住の伸りたる言にて、棲て居ると云意なり、武佐左妣は、獸名なり、物品解に具云り、○此待鳥如は、此は衍文にて、トリマツガゴトなり、鸕鼠は木末に居て、鳥の飛來を待て捕食ふものなれば云り、○歌意は、三國山の、梢に棲て居るむさゝびの、鳥の飛來るをうかゞひ待居る如く、吾も人を待て待久しく、いつと云かぎりもなくて、やせおとろへむぞ、となり、(略解に、終句を、ワヲマチヤセムとよみしはいかに)

寄^ヨ石^{イハ}倉^{クラ}

石^{イハ}倉^{クラ}之^ノ。小^コ野^ノ從^ヨ秋^{アキ}津^ツ爾^ニ。發^{タチ}渡^{ワタル}。雲^{クモ}西^{ニシ}裳^シ在^{アレ}哉^ヤ。時^{トキ}乎^ナ思^シ將^マ待^{タム}。

石倉は、契沖、秋津に立わたると云るにて見れば、石倉の小野といふも、大和國なり、類字抄に、

山城に屬したるは非なり、といへり、○秋津は、吉野の秋津なり、○雲西裳在哉は、之裳は、多かる物の中に、その一をとり出ていふ助辭なり、さればこゝは、羨しき物の多かる中に、雲をひとへに羨しく思ふよしなり、在哉は、あれかしの意なり、○歌意は、石倉の野より、はるくくと秋津の野まで、見るがうちに立わたる雲にてもがな、吾身のあれかし、さらば通路遠き中をも、たはやすく通行て、逢ふこととなるべきを、さる雲にしもあらねば、あふべき時の來るを待居む、となげきたるなり

寄雷

天雲。近光而。響神之。見者恐。不見者悲毛。

歌意は、高貴き人をたとへたるなるべし、相見れば、しかすがにおそれはどからしく、又さりとて相見ねば、こひしく思はれて、かなしく堪がたければ、二しへにわたりてさても爲む方なしや、となり、上は恐といはむ料の序なり

寄雨

甚多毛。不零雨故。庭立水。大莫逝。人之應知。

不零雨故は、ふらぬ雨なるものをの意なり、○庭立水は、ニハタヅミにて、ヅを濁るべきに、此に立字を書るは、既くも云る如、凡て借字には、清濁かたみに通、用ひたること、此集の例なり、○大莫逝（大は、太字の誤ならむか、と本居氏云り、されど大字にてもイタクと訓るべし）は、甚

く流れゆくことなかれの意なり、○歌意は、はなはだしくもふらぬ雨なるものを、潦水よ、しかばかり甚くながれゆきて、人に雨のふりたりと云ことを、しらるることなかれ、となり、契冲云、これは、しのびて思ふ思ひを、はなはだしくもふらぬ雨にたとへ、涙を、にはたづみにたとへて、戀すと人のしるばかりに、しのびなるおもひにこぼるゝ涙は、いたくなながれそ、といふ心なり

久堅之。雨爾波不著乎。恠毛。吾袖者。干時無香。

歌意かくれたるところなし

寄月

三空往。月讀壯士。夕不去。目庭雖見。因縁毛無。

夕不去は、契冲云、よひくとなり、一夜もおちずの心なり、○歌意は、月のおもしろくなつかしきを、よひく目には見はずれども、親くよりそひて、かたらふ爲方もなし、となり、高貴人を月に比へたるなるべし、四卷に、目二破見而手二破不所取月内之楓、如妹乎奈何責

春日山。山高有良之。石上。菅根將見爾。月待難。

菅根、おだやかならず、本居氏は、舊郷の誤かと云り、猶考べし

闇夜者。辛苦物乎。何時跡。吾待月毛。早毛照奴賀。

歌意は、闇夜は心もくもりて、いと人の戀しく思はれて、爲む方なくくるしきものを、いつしか出むいつしか出むと、吾待月だにも、早くもがな照出よかし、さらばその月を見て、なぐさむかたもあるべきなれば、今の如く苦しきは有まじきを、となり、月毛は、月だにもせめての謂なり、毛の言味ふべし、(契沖は、夜は人待時にて、やがてまつ人のこぬほどは、夜のうちにも、やみの夜のやうなればくるし、といへり、わが待月は、人の光臨をまつによせたり、と云り、いかゞあらむ、闇夜のやうなれば、くるしといへること、きゝとりがたきことなり)

朝霜之。消安命。爲誰。千歳毛欲得跡。吾念莫國。

歌意は、朝霜の如く、微くはかなく消失易き身命を、千年にもがな、いきながらへよかしとねがふは、そも誰が爲にとか思ふ、其方故にこそ、壽の長からむことを欲へ、となり

〔右一首者。不有譬喻歌類也。但闇夜歌人。所心之故。並作此歌。因以此歌。載於此次。〕
所心、略解に、心は、思の誤かといへるはわろし、所心と云こと、集中におほく見えたるをや

寄赤土。

山跡之。宇陲乃眞赤土。左丹著者。曾許裳香人之。吾乎言將成。

左丹著者、(者、字、舊本になきは、脱たるなり、一本に従、)左は眞に通ひて美稱たるなり、丹は赤土なり、もし眞赤土の衣に著たらば、と云なり、○曾許裳香は、それをもかの意なり、○歌意は、もし宇陀の眞赤土の、衣にうつり著たらば、それをも人のとにかくいひたてさわがむか、となり

寄神。

三幣帛取。神之祝我。鎮齋杉原。燎木伐。殆之國。手斧所取奴。施頭。

三幣帛取は、ミヌサトリと訓べし、(トルとよむはわろし、)御幣帛を取て、いはふと云意につゞきたり、○神は、カミと訓べし、(神をミワとよむは、大神にかぎりたること、おぼゆ、)○殆之國は、殆は、邊りばむをいふ言にて、既に委云り、しくは戀之久などいふ之久に同じ、○所取奴は、ほとほとに取れむとせし、と云べきを、かく奴と云るは例なり、幾、死と云も、ほとむどしなむとしきと云意なるを、ほとむどしにきと云がごとし、○歌意は、神祝が御幣帛を取て、いつきいはふ杉原を犯して薪を伐、禁衛の人に見あらはされて、殆、手斧をとられむとしつ、と云るにて、父母などのかたく守る女を、犯しいざなひて、ほとむどからき目を見むとせし、と云譬なるべし、又は、やむことなき人をおかして、ほとむど罪にかゝらむとせしを云にもあるべし、さて神木を、いみじく大切におそる、ことは、四卷に、神樹爾毛手者觸云乎打細丹人妻跡云者不觸物香聞、とよみ、又味酒乎三輪之祝我忌杉手觸之罪歟君二遇難寸、又景行天皇紀に、五十一年八月、云々、所獻神宮蝦夷等云々、仍令安置御諸山傍、未幾時、悉伐神山樹、叫呼隣里、而脅人民、天皇聞之、詔群卿曰、其置神山傍之蝦夷、是本有二獸心、難住中國、故隨其情願、令班邦畿之外、とあるも、神木を伐しことを、いみじくかしませたまひし故なるを思ふべし

木綿懸而。祭三諸乃。神佐備而。齋爾波不在。人目多見許增。

祭三諸、三諸のことは既に云り、十二に、祝部等之齋三諸乃大馬鏡云々、十九に、春日野爾伊都久三諸乃梅花云々、なども見えたり、○神佐備而は、御室に祭拜る神の、神々しきよしにいひ下して、ふるめきたるよしにいひつゞけたり、人をふるきものにして、と云意なり、○齋爾波不在とは、神をば齋敬み畏避れば云るにて、人をふるきものにして、神を畏避るごとく、遠離るにはあらず、と云なり、○歌意は、人をふるき物にして、いとひ遠離るにはあらず、人目しげくて、得あはぬにこそあれ、となり

木綿懸而。齋此神社。可超。所念可毛。戀之繁爾。

歌意は、木綿を懸て祭拜る神社なれば、常は尊敬畏避て、親づくことさへえせざりしに、今は、戀しく思ふことのしげく、心の亂れたれば、しかばかり尊き神社をも、敬ふべきわきまへもななく、をどり超ぬべくおもはるゝ哉、となり、十一に、千葉破神之伊垣毛可越今者吾名之惜無、この歌、伊勢物語に、ちはやぶる神のいかきも越ぬべし大官人の見まくほしさに、と改めて載たり、拾遺集にも出。

寄川。

從此川。船可行。雖在。渡瀬別。守人有。

歌意は、川を舟にのりて、此方より彼方へ、かよふべき道はありといへども、その河渡瀬ごとに、禁衛の人ありて、心まかせに通ふことのかなはぬものを、其をいかにとかせむ、といへるにて、父

母兄弟などの目をしのびて、女のもとにかよひがたきを、ゆるしなき人をば、渡守のとがめて、みだりに渡瀬をわたさぬにたとへたり

不絶逝。明日香川之。不逝有者。故霜有如。人之見國。

歌意は、我思ふ人のもとへ、あすかの川の流れたえぬ如く、たびくかよふことなるに、もしさはることありて、川の中よどのやうに、しばしとどこほりてゆかぬことあらば、なにぞ尋常ならぬ事故ありて、心かなはぬすぢ出来しにつきて、ゆかぬやうに人の思はむことなるを、其をいかにかしてまし、となり、四卷に、他辭乎繁言痛不相有寸心在如莫思吾背、とある心在如と、今の故霜有如と、意味似たり、○此歌、古今集四卷に、たえず行あすかの川のよどみなば心あるとや人のおもはむ、とて載て、あるは、ありを誤れるなり、此歌、或人の云、中臣東人がうたなり、と註せり

明日香川。湍瀬爾玉藻者。雖生有。四賀良美有者。靡不相。

歌意は、あすか川の瀬々に生たる玉藻は、たがひによくなびきあふことなれど、しがらみあれば、そのしがらみにさへられて、心のまゝになびきあふことならぬことなるを、といへるにて、あもひあへる中も、さはる人あれば、思ふやうにえあはぬにたとへたり、二卷の長歌に、明日香乃河之、上瀬爾生玉藻者、下瀬爾流觸經、玉藻成彼依此依靡相之孀乃命乃、多田名附柔膚尙乎、劔刀於

身副不寝者、とあり、考あはずべし

廣瀨川。袖衝許。淺乎也。心深目手。吾念有良武。

廣瀨川は、大和國廣瀨郡に在川なり、(文德天皇實錄に、仁壽三年十月己卯、遠江國奏言、廣瀨河、舊有二郵船二艘、而今水濶流急、不_レ由_レ利涉、公私行人、擁_レ滯岸上、請更加_レ置二艘、以濟_レ驛旅之難、許之、とあるは、同名異處なるべし、)○袖衝許は、催馬樂に、さは田川袖つくばかり淺けれどくにの宮人高橋わたす、ともよめり、衝は流る水に袖のつかるよしなり、契沖が、十七に、多知夜麻乃由吉之久良之毛波比都奇能可波能和多里瀨安夫美都賀須毛、とある、このつくの心なり、と云るが如し、裝束の袖は今も長ければ、その袖の漬るばかりなるは、いと淺きこと著し、○淺乎也は、人の我がうへを思ふ心の淺をや、と云なり、○歌意は、人の我がうへを思ふ心はいと淺く、かりそめなるものを、吾はなほ心に深く思ひてあらむか、かくては末長くたのみに思ふとも、かひはあらじをや、となり、第一二句は、淺をいはむとて設けたる詞なり、(元可法師集に、廣瀨川袖つく水の流さへ淺くは見えぬ霧のうち哉、)

泊瀨川。流水沫之。絶者許曾。吾念心。不遂登思齒目。

泊瀨川。流水沫之、これは今按に、沫は脉の誤なり、ナガル、ミヲノと訓べし、上に、泊瀨川流水尾之云云、と見えたり、これは、わがはじめて考へ得たるなり、○歌意は、泊瀨川の水は、絶る世はあらじなれど、もしその水の絶はてむ世もあらば、其時にこそ、吾思ふ人に逢遂す止もせめ、さなく

は、いつまでもとげじとは思はず、と云なり、(略解に、水沫を、水脉の誤なることを得しらずして、流る水の泡の絶るを、ながらふる命の限にたとへたるか、またさなくば、譬喩歌にはあらず、誓へる歌なるべし、といへるは、いみじきひがことなり、)さて此歌は、正しく譬喩たるには非ず、こは六卷久邇新京歌に、泉河往瀨乃水之絶者許曾大宮地遷往目、とよめる類なり、すべて譬喩歌の標内に入たるに、君身人身の上のことを、萬の草木鳥獸の類に譬喩たるはこともなし、此歌のごときは、正しく譬喩たるには非ざれども、萬の物に寄てよめるをば、なべて譬喩歌の標内に收しは、譬喩歌は、其主とある一方につきたる名目なれば、疑ふべきに非ず

名毛伎世婆。人可知見。山川之。瀧情乎。塞敢而有鴨。

塞敢而有鴨は、十一に、言出云忌々山川之當都心塞敢在、續後紀長歌に、堰加部留天などあり、(歌意は、もし長き息をつきて、嗚呼嗚呼と嗟きたらば、他の故にあらずと、世人が知べき故に、山川の瀧のごとく激りて、やるせなき心を、しひてせきとどめてある哉、さてくくるしき心の内ぞ、となり)

水隱爾。氣衝餘。早川之。瀨者立友。人二將言八方。

水隱は、しのびかくすにたとへたり、○歌意は、しのびかくすに堪かねて、嗚呼やる瀨なやと氣衝あまり、急流の瀨の如くたぎる心の、たとひわかへるとも、人にそれといはむやは、人にはいはじ、嗚呼やる瀨なや、となり、古今集に、吉野川水の心は早くともたぎの音にはたてじとぞおもふ

寄埋木。

真鏡持。弓削河原之。埋木之。不可顯。事等不有君。

真鏡持は、枕詞なり、(持はモチとよむべし、モチとよむは、いみじくわろし)○弓削河原は、和名抄に、河内國若江郡弓削由介とある所の河なり、神名式に、河内國若江郡弓削神社二座(並大、月次相嘗新嘗)稱徳天皇の御時、由義宮を作らせ給ひて、行幸せさせたまへること、續紀に見ゆ、(義字、多くは古書にゲの假字に用ひし所以に、由義宮とかけるなり、その證、余が南京遺響に委しくいへり)○弓削道鏡が本居なり、契沖云、今も弓削樫原などいひつゞけて、人のよくしれる所なり、○埋木之は、たゞ不可顯と云む料なり、埋木は、水底の沙中に埋て、あらはるまじきものなればなり、古今集に、なとり川せゝの埋木あらはればいかにせむとかあひみそめけむ、とあり、○不可顯は、アラハルマジキとよめるよろし、あらはるべからぬの意なり、(垂仁天皇紀に、忽積稻作城、其堅不可破、とある、この不可破をヤブルマジと訓せたるに同じ)書紀仁徳天皇御歌に、豫屢麻志積箇破能區莽愚莽、などもあり、(略解に、不可顯は、不可戀の誤にてシタニコフベキとよむべし、と云るは、強説なり)○事等不有君、等字、一本には爾と作り、いづれにてもよろし、○歌意は、吾しのびたる男女の中の、人に顯はるまじとは、手堅くいはるゝ事にあらぬことなるを、もしあらはれなば、其時いかにかせむ、となり、(現存六帖に、年經ぬる弓削の河原の埋木の浮び出べき行へしらせよ)

寄海。

大海。候水門。事有。從何方君。吾率陵。

第一二句は、本居氏、オホウミハミナトヲマモル、とよむべし、といへり、大海は、大海神をいふべし、即大總津見神なり、○何方は、イヅへとよむべし、○吾率陵は、陵は、隱字の誤と云説しかるべし、アチキカクレムなり、(本居氏は、率陵は、義を以てキテユカムと訓べし、といへり、いかがあらむ)○歌意は、第一二句は、大海神は、水門ごとに、目を離したまはず、守護りまして、人の船出をしらしたまへば、しのびて、みだりに船を出すことならぬがごとく、父母などの心をつけて、起居おきふしにわれをきびしく守りたまふことなれば、事ありとて、たやすくしのびて、門出せらるべきやうなし、さればもし吾一人の中に、事あらば、いづくぞへ吾を竊み出で、率て行たまはむと、君はおぼしたまふなめれど、率て行たまふべきでたてなければ、其時はいかなる方に、吾を率行て、かくれたまはむとにや、と云なるべし

風吹。海荒。明日言。應久。君隨。

歌意は、風吹て海のあるゝ如く、父母などのころびは、おそろしけれども、それをいとひて、父母のゆるさむ時をまたば、明日にもあれ、いと待遠に覺ゆべし、されば、君しもあはむとならば、よしやよし、君にしたがはむぞ、といふならむ

雲隱。小島神之。恐者。目間。心間哉。

雲隱は、契沖、島ははるか奥に、雲がくれてあるものなれば、かく云と云り、○小島神とは、

いづくの小島にもあれ、(集中に、吉備のこしまとよめる所にもあらむ)其島に座神なり、さて父母などの、きびしく守るにたとへたるなり、○歌意は、父母などのきびしくまもれば、其女に親相見ることかなはず、小島神の神威を恐るゝごとく、恐れ遠離て、日を隔はすれども、相思心まで隔らむやは、心ばかりは、いつも女に比てあり、となり、○今按に、雲隠と云、小島神といへること平穩ならず、故按るに、小は光字の畫の滅え、島は鳴の誤にて、雲隠光鳴神之、とありて、雷にたとへたる歌なりけむを、はやくより今の如く誤て、寄海歌の中に收たるか

〔右三首。柿本朝臣人麿之歌集出。〕

大船爾。眞梶繁貫。水手出去之。奥者將深。潮者干去友。

奥の下考字、舊本にはなし、今は一本に従つ、○歌意は、浪風の間をうかどひて、大船をこぎ出すとき、とにかくいたづく心を、人間をうかどひて、からうして打出すにたとふるならむ、さて今かく打出して、相云て後には、いよく吾中の深からむ、たとひ潮のひくとき來るとも、磯のかたにこそ、潮の満干はあるなれ、奥は常にしほのひることもなきが如く、いつも深からむぞ、と云歟、猶考べし

伏超従。去益物乎。間守爾。所打沾。浪不數爲而。

伏超は、中山巖水、我土佐國安藝郡に、伏超と云る坂あり、そは飛石はね石ころく石など云て、名高き難所を行過て、此坂を超ることなり、此坂いとけはしくして、立てあゆみがたければ、伏超

と云なるべし、此伏超の山の岬は、海に臨みて、今は行かよふべき處にあらず、いにしへは、浪間をうかどひて、道行人もかよひしにやあらむ、扱此歌によめるは、土佐國とも定めてはいひがたし、總て地名は、いづくにも同じきがあるものなればなり、されども伏超と云る處は、いづくにてもかかる所なるべき據とはなりぬべし、と云り、○行益物乎は、行ましものにてありしをの意なり、伏超の方を行すして、浪にぬらされたるを、後に悔る謂なり、○間守爾は、浪の打よせ引とる間をうかどふにの意なり、打よせたる浪の、引たる間を候ひてゆかむとて、と謂なり、○所打沾は、打よする浪に沾されたるよしなり、尾にめぐらしてきくべし、○浪不數爲而は、打よする浪の數を數計るを、浪數といへば、浪數は、浪の數をかぞへて、打よせたる浪の、引たる間をうかどふことなり、さてこは、ふつに浪數ざりし詞つきなれど、さにはあらず、浪を數はしつれども、よくせずして、數そこねて、浪に沾されたるを謂なり、○歌意は、伏こえのかたより行通ひなば、浪に沾されむおそれなければ、伏超の方より行ましものにてありしを、近道を行むとて、打よする浪の數をかぞへて、その浪の引たる間に、海際より通り行むと、浪間をうかどひまもりしが、あまりに心いられして、浪の數をかぞへはしつれども、よくせずして、かぞへそこねて、浪に打ぬらされつる、と悔るよしにて、たとへたる意は、よくして、人目のなき間をうかどひて、行べかりしものを、人目を守はしつれども、あまりに心あわたしかりしによりて、人目を守りそこなひて、見あらはされたれば、今は悔れどもそのかひなし、よくして、人間にのみ、しのびしのび通ふべかりしものにてありしを、となり、伊勢物語に、たびかさなりければ、あるじきつけて、夜ごとに人をすゑて、まもらせければ、とあるを思合べし

石灑。岸之浦迴爾。緣浪。邊爾來依者香。言之將繁。

石灑は、灑は隱の誤にてイソガク。なるべしといへり、さもあるべし、岸の浦に磯隠てよする浪とつゞく意なり、石隱は、たゞ浪のよするさまをいへるのみなり、人目をしのぶ意を、よそへたるには非ず、○歌意は、思ふ人の邊に、依近づきたくはあれども、もし依近づきたらば、世人が言しげく、とにかくいひさわがむか、となり、本句は序なり

磯之浦爾。來依白浪。反乍。過不勝者。雉爾絕多倍。

磯之浦は、いづくにまれ、たゞ海の磯への浦なり、○雉は、(四卷に涯とあるに依て、こゝも涯の誤なるべし、と本居氏はいへれど、しにはあらじ、)岸の借字なるべし、雉をも、古は吉斯と斯を清て唱へしなるべし、と吾徒南部嚴男云り、(金葉集に、雨ふればきしもしとゞに成にけりかさゝぎならばかゝらましやは、とあり、)吉斯の斯を清て唱へし故に、此も岸を雉によせたるにや、)和名抄に、雉を支々須とも、支之とも云り、吉斯と云も古名ならむ、○歌意は、磯の浦に依白浪よ、しかばかり立かへり立かへり、此所を過がてにのみするならば、なほ引行て異所にはよせず、此處の岸にゆたくとゆらへてあれ、となり、此歌は、思ひかはしたる男の、女の家あたりに來て、人目はかりつゝ、えあふこともせず、そこを過行がてにするを見て、女のよめるなるべし、反乍過不勝者、は、古今集に、わがやどに喚る藤なみ立かへりすぎがてにのみ人のみるらむ、とある立かへりすぎがてにと云ると同意にて、立かへりつゝ、過がてにするをいふ、過不勝者は、過がてに無ば

といふ意の詞つきなれど、さにはあらず、過がてにするならば、と云意なり、この詞のことは、既にたび／＼いへり、きしにたゆたへは、なほそのあたりにゆらへていませ、さらばひまもとめつつ、あふこともかなひ侍らむぞ、といふならむ

淡海之海。浪恐登。風守。年者也將經去。榜者無二。

歌意は、浪風のおそろしきが故に、浪風の和む間を守りうかゞひて、船がよりしてをることなるに、浪風がよく静まりて、今こそと思ふ日和なれば、漕も得出さずして、とかくするうちに、多くの年を経なむか、といへるにて、浪恐登風守は、人目人言のおそろしき故に、それをまもるをそへ、榜者無二は、近くよりて、相見ることよせていへるにて、かくのみ人間をまもり、あふこともえせずして、多くの年を経なむことが、といふなるべし

朝奈藝爾。來依白浪。欲見。吾雖爲。風許增不令依。

朝奈藝爾は、第三句の上につて聞べし、静なるたとへにて、人目の間をいふなるべし、○歌意は、來よる白浪を、静なる間に見まほしくはすれども、風こそ心してよせきたらね、と云て、思ふ人を、人目のなき間に見まほしくすれど、さゝふる人ありて、よせ來させぬを譬たるなるべし

寄二浦沙。

紫之。名高浦之。愛子地。袖耳觸而。不寐香將成。

紫之名高浦は、本居氏玉勝間に云、名高の浦は、紀伊國名草郡にて、今はそのわたり海士郡に入れり、今も名高とも名方とも云里にて、藤白のすこし北の方なり、あるとき若山にて、人に物語しけるついでに、一人が云やう、名高の里中に、むらさき川と云ちひさき川のあるなりと云、そはいとおかしきことなるを、もし萬葉の歌によりて、事好むもの、つけたる名にはあらじか、猶たしかにとひきかまほしきことなり、とおのれいひ、又一人、おのれかのあたりは、しばしゆきかよふところなれば、いまよくあないとひきよむ、と云るが、後に又きたりしをり、かたりけるは、一日名高のわたり物せしに、かの川のこと、里のわらはべのあそびありしに、此里にむらさき川と云川やあると問しかば、よくしりあて、ちひさき流れに橋かけたる所を、これなむそれとをしへつ、とぞかたりける、しかわらはばまでよくしれるは、つくりごとにはあらざるを、もしこれふるき名ならば、かの萬葉に、むらさきの名高とつづけたるは、いにしへのわたりを村崎など云て、そこなる名高の浦と云るにはあらじか、されどかの川のこと、なほ人づてなれば、たしかには云がたきを、かしこに物せむ人、なほよくたづね給へ、としるせり、枕冊子に、浦は云々、名高の浦とあり、さて此地名、此次下、又十一にも見えたり、又十六に、紫乃粉瀨乃海爾潛鳥、とよめるも、そのあたりならむか、○愛子地は、マナゴツチとよむべし、織沙のある地を云、さて人の子を愛しみて最愛子と云ば、即此を、うるはしき女にたとへたるにもあらむ、○歌意は、うるはしき最愛女に、袖ばかり行觸たるのみにて、つひに相宿せずなりなむか、袖ばかり行觸たるのみにては、止まじき女なるを、となり

豊國之。聞之濱邊之。愛子地。眞直之有者。何如將嘆。

聞之濱(聞字、舊本に間と作るは誤なり、今は一本に従つ)は、和名抄に、豊前國企救郡岐久、(一本に、岐多とあるは誤なり)令義解には、規矩郡とかけり、雄略天皇紀に、十八年秋八月、云々、物部目連、自執太刀、使筑紫、聞物部大斧手執楯、叱於軍中、俱進、とあり、十二に、豊州聞濱松、又、豊國乃聞之長濱、豊國能聞乃高濱、十六に、豊國企救乃池奈流、など見ゆ、○愛子地は、眞直と云むとての序なり、○眞直之有者は、ますぐにあらばといふ意なり、爾之と連たるは、そのさだかにしかる意をきかせたる辭なり、いふ言のたがはず、さだかにその通りますぐならばの意なり、○歌意は、いふ言のたがはず、そのいふ通にさだかに眞直にあるならば、何とて嘆かむなれども、言のみにては、たのみになりがたきによりて、嘆かるゝぞ、となり

寄藻。鹽滿者。入流磯之。草有哉。見良久。少。戀良久乃太寸。

歌意は、わが思ふ人は、鹽が滿來れば、没ぬる磯の草にてあればにや、見ることは、いとまれにすくなくして、えみずて戀しく思ふことの多き、となり、濱成式云、雅體十種云々、十新意體、此體非古事、非直語、或有相對、或無相對、故云新意、如孫王鹽燒戀歌、曰、しほみてばいりぬる磯の草ならし見る日すくなくこふる夜おほみ、譬如潮關之磯、盈時不見、落時纔見、故鹽爲喻、遠古雅旨、故曰新意、下句是相對也、袖中抄に、萬葉は、見らくすくなくこふるのおほ

き、とあるを、佛式には、見る日すくなくこふる夜おほみ、と云り、されど大旨は同事なり

奥浪。依流荒磯之。名告藻者。心中爾。疾跡成有。

名告藻者、者は、之を草書にて誤れるなるべし、ナノリソノと訓べし、○疾跡成有は、通難し、誤字なるべし、中山巖水、次の歌によるに、疾跡の二字は、靡の一字を誤、成は、來とありけむを、草書にて誤り、さてもとは有來とありしを、下上に寫誤れるならむ、さらばナビキタリケリなるべし、と云り、今按に、成は、相か合かの誤なるべし、靡相有とありしならむか、○歌意は、人こそしらね、心の中には、此方彼方に靡相にけり、といへるか、本句は序なるべし

紫之。名高浦乃。名告藻之。於磯將靡。時待吾乎。

歌意は、本句は、序にて、強なるわざせば、人にとにかくいひさわがれむとて、自靡依む時を待居る吾なれば、いさゝかの心に、疎くなれるにはあらざるものを、となり

荒磯超。浪者恐。然爲蟹。海之玉藻之。憎者不有乎。

然爲蟹は、集中に多き詞なり、然しながらにの意なり、新古今集にも、かくしつゝ暮ぬる秋と老ぬればしかすがになほ物ぞ悲しき、○乎、舊本には手と作り、今は一本に従つ、○歌意は、玉藻を得まほしくは思へども、荒磯をこす浪荒く高ければ、そを凌ぎて、強に行て得むことは、危くおそろし、しかしながら、其うるはしき玉藻のすがたの、なつかしくて憎からずあれば、つひには、浪間

をうかゞひて行て得むとおもふを、となり、これは父母などのさへて、娶がたき女をたとへたるなり

寄船。

神樂聲浪乃。四賀津之浦能。船乘爾。乘西意。常不所忘。

乘西意とは、人のうへに、わが心をうつしおきたるをいふこととなり、集中にこれかれ出たる詞なり、後撰集十九に、おくれずぞ心に乘てこがるべき浪に求よ船見えずとも、○歌意、本句は、序にて、人のうへに、わが心をうつしおきたるより、常にその人のうへのおもはれて、わすらるゝひまもさらになし、となり、さて此歌は譬喩ともきこえず

百傳。八十之島廻乎。榜船爾。乘西情。忘不得裳。

百傳のことは、既くいへり、○歌意、本句は序にて、人のうへにうつしおきたるわが心を、しばし休息めむため、いかにぞして、わすれむとおもへども、つかのあひだも得わすれず、さても戀しくおもはるゝ事、となり

島傳。足速乃小舟。風守。年者也經南。相常齒無二。

島傳は、海の島々を歷傳て榜よしなり、八卷に、難波方三津崎從、大船爾二梶繁貫、白浪乃高荒海乎、島傳伊別往者、云々、十三に、斧取而丹生檜山、木折來而機爾作、二梶貫儀榜回乍、島

傳雖見不飽、三吉野乃瀧、動々落白浪、とあり、濱傳、磯傳などいへることもあり、○足速乃小舟とは、舟の軽くてとくゆくを云、(元可法師集に、鳥づたふあしはや小舟ながき夜に幾浦かけて月を見るらむ、とあり、今は乃字あれば、あはやのをぶねと訓べきなり、文徳天皇實錄に、嘉祥三年九月壬辰、授播磨國足速手速神從五位下、とあるは、因ある神名か、) 十四に、母毛豆思麻安之我良乎夫禰、とあるも、足輕小舟にて、同意なり、又相模國風士記にも、足柄山の杉をきりて船に造れるに、その足のいと軽かりければ、山の名となれるよし見えたり、と云り、○歌意は、上に、淡海海浪、恐登風守、といふ歌に、引合て考べし

水霧相。奥津小島爾。風乎疾見。船縁金都。心者念杼。

水霧相は、齊明天皇紀御歌に、阿須箇我播瀨磯羅羅都々、喻短瀨都能阿比娜謨儼俱母於母保喻屢柯母、とあり、○歌意は、心には依たくおもへども、風が疾く荒き故に、奥つ小島に、よすることを得せず、となり、五三一二四、と句を次第で心得べし、鳥をおもふ人にたとへ、さて父母などの嘖を恐れて、いひよりがたきよしをそへたり

殊放者。奥從酒嘗。湊自。邊著經時爾。可放鬼香。

殊放者は、まづ殊は借字にて、如なり、かくの如く吾を遠離むとならばの意なり、さて如は、常に、ナニノ碁登、クノ。碁登と碁の言濁れども、其は上より連ぬる音便にて、本は清音にて、首に許登云々と云ときは、清例なり、允恭天皇紀御歌に、許等梅涅膠波椰區區波梅涅孺、十卷に、殊落者袖副

沾而可通將落雪之空爾消爾管、十三に、琴酒者國丹放管別避者宅仁離南、古今集春、下に、許等ならば咲ずやはあらぬ櫻花見る我さへにしづ心なし、離別に、ことならば君とまるべくにははなむかへすは花のうきにやはあらぬ、かきくらしことはふらなむ春雨にぬれぎぬきせて君をとめむ、戀五に、ことならば言の葉さへも消なく見れば涙の瀧まさりけり、俳諧歌に、ことならば思はずとやは云はてぬ何ぞ世中の玉だすぎなる、後撰集春に、許等ならば折盡してむ梅花我待人の來ても見なくに、などある許等皆同じ、(古今集の、ことならばの歌を、顯註密勘に、かくの如くならばの意とせるはあたれり、略解に、殊離者は、殊更に我をさけむとならば、と云意なり、といへるは、ひがことなり、凡この許等の言を、よくとき得たる人、むかしよりすくなし、源氏物語帚木に、なよびかに女しと見れば、餘りになさけに引こめられて取なせば、あだめく、此をはじめの難とすべし、ことが中になのめなるまじき人の、うしろみのかたは、物のあはれしりすぐし、はかなきついでとなさけあり云々、とある、ことが中にも、如が中にて、如、此中にと云意なり、) ○湊自云々とは、湊は船のいり隠むところをひろく云、邊は岸側をいへば、湊より邊著よしにいへるなり、○邊著經は、邊附の伸たるにて、邊の方に附むとして居る、と云意なり、○歌意は、かくの如くに遠ざけむとならば、はじめ奥の方に居るほどに、邊の方によせつけず遠ざけなむ、舟を湊から程なく今は邊方につかむとして居るときに至りて、遠ざけむものは、と云にて、事ならむとするきはに至りて、事とげず、なかのさかれるを、たとへいふなるべし

挽歌。

鏡成。吾見之君乎。阿婆乃野之。花橋之。珠爾拾都。

鏡成云々は、鏡の如く、大切にわが見し君、と云なり、○阿婆乃野は、大和國添上郡なり、皇極天皇紀謠歌に、烏智可掩能阿婆努能根々始騰余謀作儒倭例播爾始柯騰比騰會騰余謀須、延喜式神名帳に、大和國添上郡澤川阿波神社、とあり、此所なるべし、○珠爾拾都は、橘の玉を拾ふ如くに拾つと云て、火葬の骨を拾ふをいへり、○歌意は、鏡の如く、大切に吾見し君なるを、思はずも、阿婆の野の橘の玉を取如くに、火葬の骨を拾ひつる、となり

蜻野則。人之懸者。朝蔭。君之所思而。嗟齒不病。

蜻野は、吉野の秋津野なり、○人之懸者は、人が言のはにかけて云出せばの意なり、○朝蔭は、火葬の灰を朝に蔭散せし、と云なり、○歌意は、秋津野のことを人が言端にかけて云出せば、其野にて、火葬の灰を朝に蔭散せし其君が、ありし世の時の思出されて、嗟乎さてもかなしや、と息づかる、歎息は止す、となり

秋津野爾。朝居雲之。失去者。前裳今裳。無人所念。

朝居雲は、火葬の煙をそへたり、○歌意は、秋津野に朝居る、火葬の煙の雲の、立消て失行ば、今まで死し人のかたみに見し煙も、ふたゝび相見ることならずと、いよく亡人の戀しく思はれて、昨日も、今日もあはれに悲し、となり

隱口乃。泊瀨山爾。霞立。棚引雲者。妹爾鴨在武。

これも、火葬の煙を、雲と見なしたり、○歌意は、泊瀨山に、霞となりて立棚引たる雲は、火葬せし妹が煙にてあらむか、さてもかなしや、となり

枉語香。逆言哉。隱口乃。泊瀨山爾。廬爲云。

枉は狂の誤、○廬爲云は、山に葬埋れるを云、○歌意は、思ふ人が、泊瀨山に廬してありと云は、狂言にてあらむか、逆言にてあらむか、よまことにてはあらじ、となり

隱口乃。泊瀨之山丹。照月者。盈異爲鳥。人之常無。

盈異爲鳥は、(舊訓に、ミチカケシテヲとあるは、いたくわろし)鳥は、集中に焉と通用たるところ甚多し、ミチカケシケリとよむべし、○歌意は、泊瀨山に照月さへも盈異しけり、されば人身の無常は道理ぞ、とあきらめたるなり、十九に、天地之遠始欲、俗中波常無毛能等、語續奈我良倍伎多禮、天原振左氣見婆、照月毛盈異之家利、云々、とあるに同じ、(易云、日中則異、月盈則食、釋名云、月缺也、滿則缺、)

秋山。黃葉柯恰。浦觸而。入西妹者。待不來。

浦觸而は、第四句の下にめぐらしてきくべし、浦觸は、恍惚として、愁ひ憐む形をいふ言なり、○歌意は、秋山の黄葉を賞愛みて入にし妹は、昨日やかへり來む、今日やかへり來むと、ほれくとしてうつらく立待ど、いかに山道に迷ひ入ぬるにかあらむ、未かへり來まさず、となり、秋の

比、女の死たるを、山にはふりたるを、もみぢを賞愛みて入にし、と云なしたり、二卷人麻呂の歌に、秋山之黄葉乎茂、迷流妹乎將求山道不知母、とあるに似たり
世間者。信二代者。不往有之。過妹爾。不相念者。

二代往とは、うまれかへりて、再び現在を経るを云、往は常世ゆくの行にて、經行ことなり、四卷に、空蟬乃代也毛二行、とある所に、はやく云り、○歌意は、世間は、二世ゆくことはなきものなり、と人のいひけれど、さることあるまじと、豫ては信がはず居しを、此たび死去し妹に、ふたび相見ぬことをおもへば、げにも世間は、二代行ものにはあらざりけり、となり

福。何有人香。黒髪之。白成左右。妹之音乎聞。

妹之音乎聞は、妹が物言を聞、と云なり、○歌意は、いかなる福のある人か、黒髪の白くなりて、年の老はつるまで、共に存命て、妹が物言を聞物ぞ、となり、これは妻におくれたる人のよめるなり

吾背子乎。何處行目跡。辟竹之。背向爾宿之久。今思悔裳。

何處行目跡とは、いづくへゆかむやは、いづくへも行はずまじと、と云意なり、○辟竹之は、枕詞なり、わりたる竹の、せなか合になる故に、背向とつゞきたり、○背向爾宿之久は、そむきあひてねしと云なり、之久は、過去にし方にありし事を、今云辭なり、ノリシク、イヒシク、キ、シク、

ど、古言に多し、既に云り、○歌意は、あるときはありのすさみににくかりき、と云如く、現在のときは、いさゝか、恨むることなどありしとき、死なむとは思ひもよらずして、相そむきてねしことありしが、今更悔しく、さても悲しや、となり、あはれなる歌なり、十四に、可奈思伊毛乎伊都知由可米等夜麻須氣乃曾我比爾宿思久伊麻之久夜思母、と載たり
庭津鳥。可鷄乃垂尾乃。亂尾乃。長心毛。不所念鴨。

可鷄は、契沖、此鳥のなくこゑの、かけるときこゆるによりて、名とするなり、神樂歌に、庭鳥はかけると鳴ぬなり、おきよくわがひとよつま人もこそみれ、これ證なり、と云り、○歌意、本句は、長といはむ料の序のみにて、長き心も云々は、長くゆたけき心もおもほえずして、なき人を戀しく思ふに堪がたく、かなしく思はるゝ哉、となり

薦枕は、卷の枕詞なり、○歌意は、纏て相寝せし妻も、今に存命てあらばこそ、嗚呼さても、相宿する夜の更行に、惜やとて、更行ことををししく思はめ、今は其妻も亡なりて、獨宿る夜の明るをのみ待なれば、何故にかは、ふくるををしまむ、となり

玉梓能。妹者珠氈。足氷木乃。清山邊。蒔散漆。

玉梓能妹とは、契沖、玉づさは弓なるべし、弓をあづさとのみ云證は、十三の挽歌に、みゆきふる

冬のあしたは、さすやなぎねはるあづさを、おほみてにとらし給ひて、とよめり、これは、さすや
 なぎの根のはると云かけて、はるあづさは弓なり、玉は物をほむるときに云詞なれば、玉づさは、
 玉弓と云こゝろなり、しかれば、弓はをのこの祕藏して、手に取ものなれば、女を弓にたとふるこ
 と、めづらしからぬことなり、此心にて、玉梓の妹と云にや、と云り、猶考べし、○蒔散漆、(漆字、
 舊本染と作、一本に染と作り、今改つ)本居氏、蒔は、上の朝蒔しと同じくて、火葬して、其灰を
 まき散すことなり、清き山邊と云るも此故なり、さて火葬して骨をまきちらすことは、續後紀九卷、
 承和七年五月辛巳、後、太上天皇、願命皇太子、曰、云々、予聞、人没精魂歸天、而空存冢墓、鬼
 物憑焉、終乃爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉散之山中、於是中納言藤原朝臣吉野奏言、昔
 宇治稚彦皇子者、我朝之賢明也、此皇子遺教、自使散骨、後世效之、然是親王之事、而非帝王之
 迹、我國自上古、不起山陵、所未聞也、山陵猶宗廟也、縱無宗廟者、臣子何處仰、云々、
 これ火葬にあらずしては、骨を散すべきよしなし、然るに、宇治皇子の比、火葬なきことなり、さ
 れば宇治稚彦皇子云々は、世の誤り傳へなり、しかれどもかく云傳ふことは、世中にあまねく火葬
 することのひろまりて、骨を散すならはしの有によりて、古へ宇治皇子の遺命より始れることぞ、と
 云傳へたるなるべし、しかれば後世效之と云にて、骨を散すことの有しを知べきなり、と云り、○
 歌意は、玉と云ものは、貫たる緒を斷ば、亂散て行方もしれず、捨りはつるものなるに、愛しき妹
 は、その玉にてあればにや、骸を火葬して、清き山邊に蒔ば、やがて亂散て行方もしらすなるらむ、
 さても悲しき事ぞ、となり

〔或本歌曰。玉梓之。妹者花可毛。足日木乃。此山影爾。麻氣者失留。〕

○舊本此處に、羈旅歌と標して、名兒乃海乎朝榜來者海中爾、鹿子曾鳴成恻恰其水手、と云一首を
 載たり、其は既く上羈旅作としるしたる標末に收て、註しつれば、こゝには略けり

萬葉集古義八卷之上

春雜詠

志貴皇子 權御歌一首。

志貴皇子は、天智天皇の皇子、田原天皇と謚奉れり、御傳一卷下に、委云り

石激。垂見之上乃。左和良妣乃。毛要出春爾。成來鴨。

石激は、枕詞なり、(舊本にイハソ、グと訓たるはわろし)七卷に、石流垂水水乎結飲都、十二に、石走垂水之水能、などよめり、○垂水は、攝津國豐島郡にあり、袖中抄に、たるみのうへのさわらびとは、攝津と播磨とのさかひに、たるみと云處あり、岸よりえもいはぬ水出る故に、たる水と云なり、垂水の明神と申す神おはす、そのたるみのうへをば、たるみ野といへば、其野にさわらびはもえ出るなり、とあり、垂水明神とは、神名帳に、攝津國豐島郡垂水神社、(名神大、月次新嘗)とある是なり、姓氏錄に、孝元天皇御世、天下旱魃河井涸絶于時、阿利眞公造高樋、以垂水四山基之、令通水宮内、供奉御膳、天皇美其功、便賜垂水公姓、掌垂水神社、とも見えたり、○左和良妣は、眞蘇と云むが如く、左は美たる稱なり、左小牡鹿など云左に同じ、(しかるを、早蘇とかきて、左は、その早く先だちて萌出るをいふことなり、と思ふは、あらぬことな

り、)○御歌意は、垂見の野邊の蘇の、萌出榮ゆる時を得たる如く、まことに懼しき時に至にける哉、となり、源氏物語蓬生(源氏君の歸京を待思ふ事を云る處)に、としごろあらぬさまなる御さまを、かなしういみじきことと思ひながらも、もえ出る春にあひ給はなむと、ねんじわたりつれど、たひしがはらなどまで、よろこび思ふなる、御くらるあらたまりなどするを、よそにのみきくべきなりけり、云々、思合へし、契冲云、此御歌、いかなる吉事にあはせ給へる時に、よませ給ふとはしらねども、さわらびの、根にこもりて、かじまりをれるが、もえ出る春になるは、まことに時にあへるなり、天智天皇の皇子ながら、御位につかせ給はざりしかども、時におもむせられ給ひて、事にあたり給ふこともなくて、御子白壁皇子、思ひかけぬ高御座にのぼらせ給ひて、光仁天皇と申奉り、皇子も田原天皇の御おくり名を得給ひ、御子孫今にあひつゞきて、御位をつがせ給ふは、此歌にもとるせるなり、今うけ給はるもよろこばしき御歌なり、略解に、慶雲元年二百戸封せられ、和銅七年に二百戸、靈龜元年三品にならせ給ふと見ゆれば、是等の時の御歌か、此地をよみ給へるは、封戸攝津などにありしか、と云り、(六帖に、此御歌を、いはそゞたるひの上の、と載たるは誤れり、)

鏡女王歌。

女王、舊本には、玉女に誤れり

神奈備乃。伊波瀬乃杜之。喚子鳥。痛莫鳴。吾戀益。

伊波瀬乃杜は、大和國平群郡にあり、此下にも二所によめり、按に、集中に、毛利に杜字を書、新撰字鏡にも、杜毛利、又佐加木、と見えたり、さて此は木の土てふ意の國字なるべし、〔頭註、名所磐瀬社、神南の東、車〕〔本居氏玉勝間、二に、史記の周本紀、贊に、所謂周公葬我畢、畢、在鎔東南杜中、註に杜一作社、また秦本紀に、蕩社、註に、社一作杜、といへり、これらは、杜と社とは、字の形の似たるによりて、かくたがひに誤れるもの歟、はた相通ふよし有てかゝるか、もし杜字も社と通はゞ、毛利に殊によし有、又かの社中とあるは、何とかや毛利めきて聞ゆ、と云り、されどこはれ、それまでもあらじ、又谷川、清神代紀通證に、湯津杜木云々、杜又訓毛利、蓋神地必植杜樹、故指神社、林叢爲杜也、萬葉集、訓神社或社字爲毛利亦同、といへり、いぶかしき説なり、おむなを娘、さかきを榊、おもひを榊と作るたぐひ多かるを、これも其類と見てことたれり、さて毛利は、毛流てふ言の體となりたるにて、木の高く繁りたる土を云、十卷に、朝旦吾見柳、鷲之來居而應鳴、森爾早奈禮、〔夫木集に、光俊朝臣、玉ぼこの道のなはてのさし柳はや森になれ立もやどらむ、とあるは、この十卷の歌によりてよめり、〕十六に、大野路者繁道、森徑之氣久登毛云々、とよめるにて知るべし、又六卷に、百木成山者木高之、とあるも、成は盛の省文にて、もろは繁ることにて、森の用語なるを思ふべし、源氏物語蓬生に、かたもなくあれたる家の、木立しげくもりのやうなるをすぎ給云々、うつぼ物語俊蔭に、人の家のつくれる山のやうにて、木立をかしう、所々に松杉花の木ども、くだ物の木枝をつくしてなき物なく、椎栗もりをはやしたらむごとくめぐりて、おひつらなれり云々、よども見ゆ、さて神社を毛利と云も、神の座處は、必木の繁りて有ものなればなるべし、又飯を毛流といひ、又物など高く積置を毛流といふも、毛流の言は一なり、○喚子

鳥は、いかなる鳥ならむ、詳ならず、なほ品物解に云、○痛莫鳴吾戀益、とは、鳴聲の感情を催さるゝにつけて、人を戀しく思ふ心のまさる、となり、古今集に、時鳥はつ聲きけばあぢきなくぬし、さだまらぬ戀せらるはた、とあり、○歌意は、石瀬の杜に居喚子鳥よ、しかばかり甚く鳴ことなかれ、汝が音を聞ば感情の催されて、人を戀しくおもふころの、いよく益るぞ、となり

駿河采女歌一首

駿河采女は、既く四卷に出つ、傳未詳ならず

沫雪香。薄太禮爾零登。見左右二。流倍散波。何物之花其毛。

薄太禮は、離の意にて、既く四卷下夜之穗杼呂、とあるところに具云りき、雪の離々に散て降よしなり、○流倍散波は、ながれちるの伸りたるなり、(ラへの切レ、)さてかく伸云は、その緩なる形をきかせたるなり、ながれも則ちることなり、五卷に、和何則能爾字米能波奈知流比佐可多能阿米欲里由吉能那何列久流加母、十卷に、卷向之檜原毛未雲居者子松之末由沫雪流、などあり、○何物之花其毛、(之字舊本にはなし、今は一本に従つ、)契沖云、梅のちるとは知ながら、ほむる心に、知ずしてとふよしによめり、今の世の人のいふにも、かくのごとくなること多し、古今集旋頭歌に、打わたすをちかた人に物申すわれそのそこに白くさけるはなにの花そも、とあり、其毛は、問かくる意の詞なり、十卷に、我屋戸之田葛葉日殊色付奴不來座君者何情會毛、古今集に、色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅そも、などあり、又四卷に、劔太刀身爾取副常夢見

津河如之怪會毛君爾相爲、十八に、何可爾世流布勢能宇良會毛許已太久爾吉民我彌世武等和禮乎等登牟流、などあるも、皆同意なり、○歌意は、沫雪の離々に散てふる敷と見るまでに、ちらく、と流れてちり来るは、そも何の花にてあるぞ、さても面白のけしきや、となり、初二句は、沫雪のはだれにふる敷と、といふ意なり

尾張連歌二首。

尾張連は、傳未詳ならず、首の下に、舊本名闕、と註せり

春山之。開乃乎爲黑爾。春榮採。妹之白紐。見九四與四門。

開乃乎爲黑爾は、岡部氏、乎爲黒は手烏里の誤なるべし、さて開は岬の意にて、山の岬のたわみたる所に、春榮つむとつゞくなり、をかのさきたみたる道などよめるを、思ふべし、と云り、十三に、高山峯之手折丹射目立、とあるも同じ、○春榮は、ハルナとよむべし、はる草、はる鳥、はる花など云例多し、止由氣宮儀式帳に、大神宮司、奉進春榮漬料鹽二斛、と見ゆ、○歌意は、春山の岬のたわみたる處に出て、春榮つむ女の、衣の白紐を見れば、見る事にあかず、さてもなつかしく心よしや、となり

打靡。春來良之。山際。遠木末乃。開往見者。

開往は、サキユクとよむべし、花の次第に開をいふ、○歌意は、山間の遠く見わたさるゝ處の、花の

木の、次第に開ゆくを見れば、草木の弱くなよゝかに靡く、春になりけるならし、となり

中納言阿倍廣庭卿歌一首。

去年春。伊許自而植之。吾屋外之。若樹梅者。花咲爾家里。

伊許自而植之は、伊はそへ言にて、許目は、根こじにすることなり、根こじは、根ながらに掘取ることにて、俗に根引して庭に植し、といふが如し、(本居氏云、俗語に、物をこじると云も、是よりぞ出つらむ)古事記に、天香山之、五百津眞賢木矣根許士爾許士而云々、書紀に堀とあり、又神武天皇卷に、拔取、景行天皇卷に、拔なども見ゆ、古語拾遺に、古語佐禰居自能禰居自、六帖に、秋野は根こじにこじて持去とも巖の種は遺しやはせぬ、新後撰集に、さねこじてさか木にかけし鏡こそ君がときはの陰は見えけれ、現存六帖に、はるかにも思ひ來しかど吾やどの根こじの梅は花咲にけり、などあり、○歌意かくれたるところなし、此歌、拾遺集には、去し年根こじて植し、とて載たり

山部宿禰赤人歌四首。

春野爾。須美禮探爾等。來師吾曾。野乎奈都可之美。一夜宿二來。

須美禮探は、衣を摺む料、又たゞ花を愛みてもつむなるべし、○野乎奈都可之美は、野の景色のなつかしく面白き故にの意なり、○一夜宿二來は、十九に、伊佐左可爾念而來之乎多枯乃浦爾開流藤見而一夜可經、とよめり、○歌意は、春野にて衣を摺む料の、すみれを摘取にとて、かりそめに

來しを、野の景色のなつかしく面白き故に、立歸りがたくて、一夜宿をとりてぞ寢にける、となり
足比奇乃。山櫻花。日並而。如是開有者。甚戀目夜裳。

日並而は、日を重ての謂なり、六卷にも、茜刺日不並二、とよめり、○歌意は、山櫻花が、幾日
も日を多く重ねて、かくのごとく咲てあるならば、かばかり甚々戀しく思はむやは、日を重ねては
咲ず、盛と見れば、はや變ひ散が故にこそ、かく戀しく思ふなれ、さてもなつかしの花盛や、とな
り

吾勢子爾。令見常念之。梅花。其十方无所見。雪乃零有者。

歌意は、開たらば、吾兄子に見せむ見せむと、かねて思入し梅花の咲たるに、雪の深くなべて降積
みたれば、其ぞ花なると分ても知がたく、かくては見すべきよしもなし、となり、古今集序古註に、
梅花それともみえず久方の天ざる雪のなべてふれれば、とあり

從明日者。春榮將採跡。標之野爾。昨日毛今日。雪波布利管。

歌意かくれたるところなし、(六帖には、春たゞばわかなくなむと、とて載、新古今集には、明日か
らは若菜つまむと、と載り、)

草香山歌一首

草香山は、河内國河内郡なり、既く出づ

忍照。難波乎過而。打靡。草香乃山乎。暮晚爾。吾越來者。山毛世爾。咲有馬醉木乃。
不惡。君乎何時。往而早將見。

忍照は、難波の枕詞なり、既く出づ、○打靡は、草の枕詞なり、草は打しなひ靡くものなれば、か
くつゞけたり、○山毛世爾は、山も狭爾にて、山も狭きまでと云むが如し、(俗に、山一杯にあまり
てさけるといふが如し)國毛世爾、里毛世爾、野毛世爾、濱毛世爾、道毛世爾などいへる、皆其地
に充滿たる謂なり、さて此と次なる二句は、不惡をいはむ料に、目に觸たるものもて云る章中の
序なり、○不惡は、アソカラヌとよむべし、あしびのあしからぬとつゞくなり、十卷に、春山之馬
醉花之不惡公爾波思惠也所因友好、と見えたり、○歌意は、難波を過て草香山を越來るに、早日も
夕暮に及びたるに、未思ふ人の許には得至らず、早くその愛しき君を、行至りて相見むと思ふに、
かくてはいつか、其處に至らむぞ、となり、此歌は、思ふ人のもとへゆくとき、草香山を夕暮にこゆ
るとて、やがてその物もて、序としてよめるなり、君とは思ふ人をさすなり

右一首。依作者。微不顯名字。

櫻花歌一首并短歌

嬌嬌等之。頭挿乃多米爾。遊士之。纒之多米等。敷座流。國乃波多三爾。開爾鷄類。櫻
花能。丹穗日波母安奈爾。

國乃波多且は、契沖、國のはてにて、あらゆる國のかぎりに、さくはなをおもひやるなり、又しはつ山といふに、四極山とかきたれば、はてはきはみにて、大君のしきます國のあるかぎり、と云ころなるべし、と云り、(但し、おもひやるなりと云るは、すこしいかど、鶏流とあれば、親く見て云るやうにいへるなり)今按に、國の中央はいふまでもなし、極までもといふほどのころなるべし、○安奈爾(爾字、舊本に何とあるは荷の誤なるべし、今は一本に従つ)は、歎息の辭、あなにやし、あなにに同じ、嗚呼さても賞怜や、と歎きたるなり

反調。

去年之春。相有之君爾。戀爾手師。櫻花者。迎來良之母。

戀爾手師は、思ふに、師は、伎字を草體より誤れるものにて、コヒニテキなるべし、○迎來良之母は、ムカヘケラシモと訓べし、待迎へけるらしの謂なり、母は歎息辭なり、○歌意は、去年の春、花盛の時、花見がてらに逢てかたらひし、其君にわかれて、戀しく思ひてのみ月日を、經渡りしに、今日又櫻花の下にて、ゆくりなく其君にあへるは、櫻花が其君を待迎へけるならし、さてもうれしき事ぞ、となり、花の下にて人に行逢たるを、懽てよめるなるべし

右二首。若宮年魚麻呂誦之。

年魚麻呂は、三卷に出づ

山部宿禰赤人歌一首。

百濟野乃。芽古枝爾。待春跡。鶯居之。鷺鳴爾鷄鷓鴣。

百濟野は、大和郡十市郡にあり、既く出、舒明天皇紀に、十一年秋七月、詔曰、今年造大宮及大寺、則以百濟川側爲宮處、云々、十二月、云々、是月於百濟川側建九重塔、十三年冬十月己巳朔丁酉、天皇崩于百濟宮、丙午、殯於宮北、是謂百濟大殯、天武天皇紀に、元年六月辛酉朔己丑、是日大伴連吹負、繕兵於百濟家、自南門出之、など見えたる地の野なるべし、○來居之鶯は、來字、舊本になきは脱たること著し、故今補ひつ、(スミシウグヒス、又ヲリシウグヒスなどよみては、平穩ならず)必キキシウグヒスとあるべきところなり、○歌意かくれたるところなし、百濟野の春色をおもひやりてよめるなり

大伴坂上郎女柳歌二首。

吾背兒我。見良牟佐保道乃。青柳乎。手折而谷裳。見綵欲得。

綵は、契沖云、縁の誤、○歌意は、吾夫子が行て、親見給らむ佐保道の青柳を、吾は太宰府にありて、行て見る事もかなはざれば、うらやましくのみ思ふことなれど、京にありせば、すべきやうも有べきをと、いよく戀しく、いかでく手折たる枝なりとも、見べきよしもがなあれかし、とねがへるなり

打上。佐保能河原之。青柳者。今者春部登。成爾鷄類鴨。

打上は、枕詞なり、ウチアグルと訓べし、(舊本にも然訓り)打は、いひおこす詞とて、手して物す

ることによくはそへていふ詞なり、さて打揚る眞帆と云意に、いひつゞけたるなるべし、(此地、名集中に、猿帆とも書たるを思ふべし、)帆を揚るといふは常のことなり、佐は、佐衣、佐小牡鹿などの佐にて、眞といふに通ふことなり、又はウチノボルとも訓べきにや、打は、前の如くいひおこす詞なり、手して物することより轉りて、さならぬことにも、そへいふこと多し、さらば打登る眞穂といふ意に、いひかけたるなるべし、(此地、名狹穂とも多く書たるを思ふべし、)登とは、穂の發出るに隨て、すくすくと立登るよしなり、佐は、眞に通ふよしは前に云るが如し、(冠辭考に、佐保道は、打上りつゝ行處ならむからに、冠らせしにや、と云るは、一わたりに思ひよれるまゝにして、論に足す、)○今者とは、待々て、其時を正しく待得たるよしなり、此までは、かたへは春に至りながら、かたへははまだ冬の氣の残りてありしを待々て、其春の節を正しく待得たる今は、といふなり、すべて今者と連くは、二方にわたりし事の一方に決りたる時にいふ詞なり、○歌意は、佐保川の邊の柳は、春の節を正しく待得て、青々と發出て、緑の絲の靡くらむ、今は其時節になりける哉、さても京方の戀しく思はるゝ事ぞ、となり、已上二首は、太宰府にありしほどよめるならむ、此歌六帖には、打のぼる佐保の川邊の青柳の萌ける春に成にける哉、と載たり、又玉葉集には、打わたす佐保の川原の青柳は今ほはるへともえにけるかも、と改めて載られたり

大伴宿禰三依梅歌一首。

大伴宿禰三依の傳は、四卷上に委云り、林は、依の誤なるべし
霜雪毛。未過者。不思爾。春日里爾。梅花見都、

未過者は、未過ぬにの意なり、既に二卷下に委云り、○不思爾は、思ひがけもなきにといふ意なり、三卷に、昨日社公者在然不思爾濱松之上於雲棚引、四卷に、不念爾妹之咲儂乎夢見而、心中二燎管會呼留、五卷に、大船乃於毛比多能无爾於毛波奴爾、横風乃云々、などある皆同じ、○歌意は、霜雪のふる節も未過行ず、猶寒けくあれば、思ひがけもなきに、春日の里にて、梅花の早開出たるを見つるがめづらし、となり

厚見王歌一首。

厚見王の傳は、四卷下に委云り

河津鳴。甘南備河爾。陰所見。今哉開良武。山振乃花。

甘南備河爾云々、集中に、高市郡にも、平群郡にも、神名火をよめり、此歌なるは何郡のにや、一説に、此なるは平群郡なり、とも云り、○歌意かくれたるところなし、(金葉集に、春深み神なび河に陰見えてうつろひにけり山吹の花)

大伴宿禰村上梅歌二首。

大伴宿禰村上は、續紀に、神護景雲二年七月壬午、日向國、獻白龜、九月辛巳、勅、今年七月十一日、得肥後國葦北郡人刑部廣瀨女、日向國宮崎郡人大伴人益所、獻白龜赤眼、青馬白髮尾、云々、大伴人益刑部廣瀨女、並授從八位下、賜緇各十匹、綿廿屯、布卅端、正稅一千束、云々、又父子之

際同心天性、恩賞所被、事須同沐、人益父付上者、恕以緣黨、宜赦入京、寶龜二年四月壬午、正六位上大臣宿禰村上、授從五位下、十一月辛丑、爲肥後介、三年四月庚午、從五位上大臣宿禰村上爲阿波守、と見えたり

含有常。言之梅我枝。今日零四。沫雪二相而。將開可聞。

含有常は、いまだつぼみてありと、といふ意なり、下に、十二月爾者沫雪零跡不知可毛梅花開含不有而、とあり、此は雪ふる時に開出ては、いたみやすきを、さともしらす、つぼみて春節をも待ずに、さきたるをいひて、今の歌とは、意の表裏なるが如し、○歌意は、昨日までいまだ花のつぼみてありと、人のいひしその梅枝は、今朝降し沫雪にあひ、競ひて開出ぬらむか、さても美しからむを、早く見まほしや、となり、雪にあひて咲よしにいふは、下に、今日零之雪爾競而我屋前之木梅者花開二家里、とあり

霞立。春日之里。梅花。山下風爾。落許須莫湯目。

霞立は、カスミタツとよむべし、(略解に、カスミタチとよめるはわろし、)○落許須莫湯目は、ゆめゆめちることなかれと云意なり、下に、官爾毛縱、賜有今夜耳將飲酒可毛散許須奈由米、十一に、吾以後所生人如我戀爲道相與勿湯目、などあり、なほ集中に、ありこそすなゆめ、きこそすなゆめ、などよめり、○歌意は、春日の里の梅花よ、ゆめくあらしの風にさそはれて、散失ることなかれ、いつまでもかく賞愛まむぞ、となり

大伴宿禰駿河麻呂歌一首。

霞立。春日里之。梅花。波奈爾將問常。吾念奈久爾。

波奈爾將問常は、あだに將問と、云が如し、波奈は、集中に、しらがつく木綿は花物、又人ははな物ぞなどよめる花物も、はなぐしくあだなる物をいへり、こもその花なり、廿卷に、麻比之都々伎美我於保世流奈豆之故我波奈乃未等波無伎美奈良奈久爾、とあるも同じ、○歌意は、春日の里の梅花を深く賞愛みて、問來しにこそあれ、かりそめにあだぐしく思ひて、とひ來しにはあらぬことなるを、いかで此花を、よそに見すて、は行べきぞ、となり、(或人説に、波奈爾將問常は、廿卷に、波都乎婆奈波奈爾見牟登之安麻乃可波弊奈里爾家良之年緒奈我久、とあるに同じく、花の咲る時に問れむと思はざりしに、はからずも花の時に問來しを、歡べるなるべし、と云るはわろし、廿卷なるは、花やかにめづらしく相見むとて、と云意なり、凡て、花に問、月に問、など云て、花の咲る時、月の照る時に訪意とするは、後世のことこそあれ、古言にさる云さまなるは、かつてなきことぞかし

中臣朝臣武良自歌一首。

武良自は、傳未詳ならず

時者今者。春爾成跡。三雪零。遠山邊爾。霞多奈婢久。

時者今者トキハイマは、荒木田氏説に、今者の二字、イマと訓例なりとて、こゝもトキハイマとよめり、されど、四卷に、戀者今葉コイハイマとあると、同じ語勢なり、さればこゝも、トキハイマハと六言に訓べし、さて今者とは、待々て、正しく其時を待得て、春に至りぬ、といふ意なり、此上に委云り、○歌意は、今は兼て待々し、春の時節に既く至りぬるとて、雪のふりたりしかなたの遠き山邊に、のどかに霞の立たなびきて、げにもうらゝかなる春のけしきぞ、となり

河邊朝臣東人歌一首。

東人は、續紀に、神護景雲元年正月己巳、正六位上川邊朝臣東人授從五位下、寶龜元年十月辛亥、爲三石見守、と見えたり

春雨乃。敷布零爾。高圓。山能櫻者。何如有良武。

歌意は、春雨の日をかさねて、重々に降ば、草も木も萌出て、何處も春のけしきになりぬれば、高圓山の櫻花は、此頃いかにあるらむ、今は開出ぬらむと思ひやらるゝを、いかで早く行て見ばや、となり

大伴宿禰家持 鶯歌一首。

打霧之。雪者零乍。然爲我二。吾宅乃苑爾。鶯鳴裳。

打霧之とは、打はいひおこす詞とて、搔といふに同じ、其は多く手して物することにそへいふ詞なり

り、今も空に雲霧を、手して打散したる如くなるをいへり、霧之は、霧の伸りたる詞なり、伎流とは、雲霧などの立覆ひ陰りたるをいふ、さてその伎流様の絶ず緩なるを伸て、伎良須とも、伎良布ともいへり、其中に、伎良須といふは、然令むる方にいひ、伎良布とは、自然の方にいへるにて、いさゝか差別あることなり、此は雲霧の空に立覆ひ陰らせて、絶ず雪のふる様なり、○歌意は、雲霧の空に立覆ひ陰らせて、絶ず雪はふりつゝ、なほいと寒くはあれど、さすがに春の節に至りぬとて、吾家の苑に鶯の鳴よ、さてもめづらしの聲や、となり、後撰集に、かきくらし雪はふりつゝしさすがに我家のそのに鶯ぞなく、と改めて載たり

大藏少輔丹比屋主真人歌一首。

屋主は、續紀に、神龜元年二月壬子、正六位上多治真人屋主授從五位下、天平十七年正月乙丑、從五位下多治比真人屋主授從五位上、十八年九月己巳、爲備前守、二十年二月己未、授正五位下、天平勝寶元年閏五月甲午朔、爲左大舍人頭、とあり、既く六卷にも丹比屋主見えたり、其は屋主は、家主の誤なるべきよし、彼處に云り、披見て考べし

難波邊爾。人之行禮波。後居而。春榮採兒乎。見之悲也。

人と云るは、夫なり、○歌意は、公任などにて、攝津國に別れて夫の行てあれば、遺り居てわびしく物うさに、もしやむすぼゝる思ひのはるけむこともあらむかとして、しひて野邊に出て、若菜を採其婦を見れば、いとほしくあはれにて、そのかなしさとへむ方なし、となり、契沖云、せめての

心やりにつめば、おもふことなき人の、野邊の興につむとかはりて、かなしきなり

丹比真人乙麻呂歌一首。

乙麻呂は、目錄に、屋主真人第二之子也、と註せり、續紀に、天平神護元年正月己亥、正六位上多治比真人乙麻呂授從五位下、十月辛未、行幸紀伊國、以云々從五位下多治比真人乙麻呂爲御前次第司次官、と見ゆ

霞立。野上乃方爾。行之可波。鷺鳴都。春爾成良思。

野上は、ヌノヘとよみて、たゞ野のことなり、上は、高圓の上、藤原が上など云上にて、たゞ軽くそへたる言なり、(これをノガミとよみて、美濃國の地名と心得る説はわろし、二卷に、佐美乃山野上乃字波疑、六卷に、飽津之小野筭野上者、などあるに同じ、○歌意は、霞の立野邊の方に出て行しかば、鷺の鳴初音を聞つるよ、これにて思へば、實にのどかなる春の節に至れるにてあるらし、となり

高田女王歌一首。

高田女王は、四卷に出つ、舊本こゝに高安之女也、と註せり、高安は、高安王のことなるべし、一本には此註なし

山振之。咲有野邊乃。都保須美禮。此春之雨爾。盛奈里鷄利。

都保須美禮は、此下田村家大嬢歌にも見ゆ、都保は、いかなる意にかあらむ、未詳ならず、(含む意にてもあらむか、榮花物語に、おのく屏風をつぼねつゝ、とあるも、開の反なれば、同言ならむ、されど都保須美禮は、二處まで保字を書れば、保は清音なることはしるし、契沖が考に、すみれの花には、下の方にまるくて、つぼのごとくなる所あれば、壺草とは云なり、と云り、壺の保も、古は清て唱へしか知ず、猶考べし、○歌意かくれたるところなし

大伴坂上郎女歌一首。

風交。雪者雖零。實爾不成。吾宅之梅乎。花爾令落莫。

譬喻歌なり、○風交云々、五卷に、風雜雨布流欲乃、雨雜雪布流欲波云々、十卷に、風交雪者零乍然爲蟹霞田菜引春去爾來、○歌意は、たとひ風まじり雪はふるとも、まだ實にならぬ吾庭の梅を、花のみにてちらすことなかれ、となり、初二句は、たとひ世間の人は、とりどりさまへにいはたてさわくとも、と云意を、たとへたり、實爾不成は、まだ實に夫婦となりえぬをいふ、花爾令落莫は、唯風に言かはしたるのみにて、止ことなかれの意なるべし、下に、吾妹子之形見乃合歡木者花耳爾咲而蓋實爾不成鳴、とよめる類なるべし、(略解に、花には、あだにと云意にて、いまだ逢も見ぬ男のうへを、云さわくことなかれと云譬喻歌か、又は譬にはあらで、梅を惜てよめるか、といへるはいかじ)

大伴宿禰家持春鷄歌一首。

春字、舊本に養と作るは、誤なり、今は目錄に従つ

春野爾。安佐留鳩乃。妻戀爾。己我當乎。人爾令知管。

令知管は、人に知れつゝの意なり、さてこの管の言に、歎の餘意を含ませたり、○歌意は、春の野に食を求る雉の、己が妻の戀しく思はるゝ思ひに堪かねて、聲に出して、その隠所を、人にそこと知れつゝ、つひに獵人などに獲れむは、さてもあはれなる事ぞ、となり、按に、此歌も、ただに雉をよめるにはあらで、深くしのびてあひたる女を、思ふ思ひにあまりて、色に出て人にしられつゝ、親の嘖讓にあはむことを、悔歎きてよめる譬喩歌なるべきか、此歌拾遺集には、おのがありかと改て入られたり

大伴坂上郎女歌一首。

尋常。聞者苦寸。喚子鳥。音奈都炊。時庭成奴。

聞者苦寸は、聞まうきといふ意なり、俗にきゝともないと云に同じ、○時庭成奴は、庭とは、他時にむかへていふ詞なり、他時には、然らず、今の時節にはといふなり、奴は已成の奴にて、時には既に成ぬるを云、○歌意は、喚子鳥は常にも鳴ども、他時には聞まうく、くるしき鳥の音なるに、其音を馴着しくおもしろく聞まほしき、春の時節には成ぬる、となり、鳥の聲の時にとりて、面白くも、くるしくも、聞なざるゝは常理なり
〔右一首。天平四年三月一日。佐保宅作。〕

佐保宅とは、坂上郎女の父、大伴安麻呂卿をば、四卷に、佐保大納言といへれば、其家なり

春相聞

大伴宿禰家持。贈坂上家之大嬢一首。

坂上家之大嬢は、大伴宿奈麻呂卿の女にして、田村大嬢の同母妹なり、なほ次に云べし、既にも云

吾屋外爾。蒔之瞿麥。何時毛。花爾咲奈武。名蘇經乍見武。

何時毛は、之といふは助辭なり、この之の言に力あり、すべて之の助辭は、その一すぢをとりたてて、おもく思はする處におく辭なり、此は何時かと、その時を待遠に、一すぢにおもく思ふよしなり、加は、歎にて疑辭、毛は、歎息の意を含めたる助辭なり、○名蘇經乍見武は、大嬢になぞらへつゝ見む、となり、○歌意かくれたるところなし、源氏物語紅葉賀に、よそへつゝ見るに心はなぐさまで露けさまさるなでこの花、花にさかなむと思給へしも、かひなき世に侍ればとあり、とあるは、今の歌によりて書るものなり、(但し是は、此歌にても、咲奈武は必サキナムなるを、サカナムと改めて、とりなしたるものかとも思へど、なほ彼物語よりは前に、サカナムとひがよみしたるによりて、書るものなるべし、此歌にては、サキナムならでは協はず、奈武は、常の奈武の格なればなり、サカナムと云ときは、奈武の詞、希ふ意となるが故に、上に何時毛とあるにかなはざるなり、すべ

て咲をサカナム、待をマタナム、逢をアハナム、摘をツマナム、有をアラナムなど、五音の第一位の阿韻よりつゞけたる奈武は、いづれも希ふ意の奈武なる格なればなり、しかるを此歌をも、いつしかもはやく花に咲かしと希ふ意と心得て、サカナムと訓は、後世意なり、すべて希ふ意の奈武の上のかゝりは、曾也何等の辭をおくこと、古に例なきことなればなり、十七に、霍公鳥來鳴牟都奇爾伊都之加母波夜久奈里那牟云々、とあるも、後世ならば、奈良奈牟といひて、いつしかもはやく成かすと希ふ意とすべけれど、上に伊都とあれば、希ふ意の奈武には云れぬ格なるが故に、常の奈武の格に、奈里那牟と云るをも思合すべし、しかるを後撰集に、松もひき若菜もつまずなりぬるをいつしかさくらはやもさかなむ、拾遺集に、いつしかもつくまのまつりとくせなむつれなき人のなべのかず見む、など、上にいつしかといひて、希ふ意の奈武にてうけたるは、古にたがへり、そもそもいつしかといふは、何時かと、その時を、待遠に思ふのみの意の詞なるより轉りて、いつの間によらむはやくといふ意とせるより、希ふ意の奈武にて、下をうくることになれるなり、さてそれより後には、いつしかといふ一の詞の如くになりて、いつしかぬるゝ、などやうに云ることの多かるは、又再サテに轉りたるものなり、

大伴田村家之大嬢 與ニ妹坂上大嬢ニ歌一首

田村家之大嬢（之字、舊本には毛に誤）は、大伴宿奈麻呂卿の女にて、母は坂上郎女なり、卿の田村里に生まれけるにつきて居れし故に、田村大嬢と呼り、大嬢と云るは、長女のよしなり、○坂上大嬢は、母の坂上里に生まれしに、つきて居れしによりて、坂上大嬢と呼り、かくて田村大嬢の同

母、妹なれば、大嬢と云ることいかゞなれど、坂上家に居れし女子にては、第一の女なりけるが故に、長女になすらへて、大嬢と呼て、其妹を第二女になすらへて、坂上一嬢と呼なせるなるべし、なほこの姉妹の傳は、三卷下、四卷上等に註るをも考合すべし

茅花拔 淺茅之原乃 都保須美禮 今盛有 吾戀苦波

茅花は、チバナと訓べし、○本句は序にて、盛をいはむ料なり、○今盛有は、今盛の時にてありといふなり、盛は、妹を戀しく思ふ心の、盛りに甚しきをいへり、十卷に、吾瀬子爾吾戀良久者奥山之馬醉花之今盛有、とあるに同じ、○吾戀苦波は、吾戀しく思ふやうはと云意なり、○歌意かくれなし

大伴宿禰家持 坂上郎女ニ歌一首

坂上郎女は、大伴坂上郎女にて、家持卿の叔母、又姑なり、傳三卷下に委註り

情具伎 物爾曾有鶏類 春霞 多奈引時爾 戀乃繁者

情具伎は、四卷下に委註り、此は愛憐しく思ふ心の、いよく深切をいふなるべし、(岡部氏、神代紀の初に、混沌をクモルと訓しを合せ思ふに、くもること、聞ゆ、然れば、おぼつかなくこゝろもとなきを云なり、と云れどいかゞ)○歌意は、春霞立たなびきて、けしきうらゝかに、いとおもしろくめでたき時に、二人居たらば、いかにたのしからむと思ふを、郎女に離れ居て、唯獨戀しく

思ふ心の繁きは、いよく愛憐しく思はるゝ心のまさりて、深切き物にてぞありける、といふなるべし、(六帖に、初句を、心うきと改めたるはいかゞ)

笠女郎。贈二大伴家持一首。

水鳥之。鴨乃羽色乃。春山乃。於保東無毛。所念可聞。

本二句は、春山をいはむ料の序なり、廿卷に、水鳥乃可毛能羽能伊呂乃青馬乎、此下に、水鳥乃青羽乃山、ともよめり、○於保東無毛は、契沖、鬱の字を、オホツカナキとよめり、鬱の字の心は、たとへば、さかりにもゆる木を、灰の下にさしいれたるが、さすがにもえ出ねど、下にふすぼるやうの心なり、春山の陽氣下にみちて、やゝもえ出れど、猶ゆるるやうなるを、むねにおもひのふさがりたるやうに、たとへていふなり、といへり、十卷に、今夜乃於保東無荷霍公鳥喧奈流聲之音乃遙左、又春去者紀之許能暮之夕月夜鬱東無裳山陰爾指天、なども見えたり、○歌意は、君を戀慕ふ心の、胸にみちふさがりて、せむ方なく、さしせまりても思はるゝ事哉、さてもくるしや、となり

紀女郎歌一首。

紀女郎は、四卷下に出つ、古本に、鹿人大夫女、名曰小鹿、安貴王之妻也、と註せり

闇夜有者。宇倍毛不來座。梅花。開月夜爾。伊而麻左自常屋。

伊而麻左自常屋は、而は耐の省文なるべし、此下に、令親麻而爾波、又相時麻而波、十九に、可頭

良久麻而爾、など書たり、(又而はテの訓ある故に、借て書るかとも思ひしかど、濁音の處に用ひたるを思へば、さにはあらじ、又略解に、而は耐の誤歟といへれど、ひがことなり、集中右の如く、あまた所に而と書れば、誤字にはあらず、いかで省文なることをばおもはざりけむ、)さて伊而座は、古事記傳云、記中に、天皇ならずとも幸行と多く書り、此語本は、出る意に云つるにも有べけれども、必さらでも、たゞ行給ふにも、來給ふにも云り、今の俗語にも、御出なさると云を、行ことも、來ことにも用る、同じ意ばえなり、天智天皇紀童謡に、于知波志能都梅能阿素弭爾伊提麻栖古云々、伊提麻志能俱伊播阿羅珥茄云々、とあり、と云り、土佐日記に、講師馬の餞しにいでませり、○歌意は、闇の夜ならば、來まさずとも、けにことわりなり、この梅の花も咲、月もおもしろくてりつゝ、あひにあひて興あるこよひなるに、君は來まさじとやは、さりとも今宵は、來ますべきことにてあるを、となり、十卷に、吾社葉憎毛有目吾屋前之花橋乎見爾波不來鳥屋、語勢似たり、又同卷に、春雨爾衣、甚將通哉七日四零者七夜不來哉、又霍公鳥來鳴、岡部有藤浪見者君者不來登夜、なども有、

天平五年癸酉春閏三月。笠朝臣金村。贈二入唐使歌一首并短歌。

入唐使は、續紀に、天平四年八月、以從四位下多治比真人廣成、爲遣唐大使、と見えたり、五卷山上臣好去來歌につきて註せり、九卷、十九卷、にも同時の歌あり、玉手次。不懸時無。氣緒爾。吾念公者。虛蟬之。代人有者。大王之。命恐。夕去者。鶴

之妻喚。難波方。三津崎從。大船爾。二梶繁貫。白浪乃。高荒海乎。島傳。伊別往者。留有。吾者幣引。齊年。公乎者將待。早還萬世。

王手次は、懸をいはむ料の枕詞なり、○代人有者大王之、この二句、舊本になきは脱たるなり、契沖、九卷長歌に、人と成ことはかたきを云々虚蟬乃代人有者大王之御命恐美、また其つゞきの長歌に、虚蟬乃世人有者大王之御命恐彌、とありて、こゝもかの例に依に、二句脱しなるべし、と云るは、信にいはれたることなりけり、○島傳は、島より島に轉り廻りて漕行を云、七卷に、島傳足速乃小舟風守年者也經南相常齒無二、十三に、二梶貫儀傍回年、島傳雖見不飽、三吉野乃瀧動々落白浪、とあり、○幣引は、岡部氏云、幣引は祓にはあれど、この歌にはかなはず、引は取の誤にて、又サトリなるべし、○待字舊本に往と作るは誤なり

反歌。

波上從。所見兒島之。雲隱。穴氣衝之。相別去者。

兒島は、何地にある島とも定めがたし、難波より見放る海中の島をひろく云るにもあるべし、○相別去者は、アヒワカレナバとよむべし、(略解に、イネバとよめるはわろし)相別とは、こぎゆくふねの見えずなるをいふ詞なり、こぎわかれなむ家のあたりみずとある、こぎわかれも見えずなるを云るにて同し、○歌意は、今君がこぎゆく舟の、波のあはひより見ゆる小島の雲隠れたることく、見えみ見えすみ、はるかになるにつきても、名残をしくて、嗚呼いきづかしや、其船のふつに見え

すなりなば、又いかばかりにかなしからむ、となり、(夫木集に、里わかず花咲ぬれば浪間より見ゆる兒島も雲隠れつゝ、今の歌によれり、)

玉切。命向。戀從者。公之三船乃。梶柄母我。

玉切は、命の枕詞なり、○命向は、戀しく思ふ心の甚しくて、命に對ふを云、(俗言にていはど、命を相手にして、戀しく思ふといふが如し、)梶柄母我は、梶柄を、カヂカラとよむ時は、和名抄に、釋名云、笑、其體曰、簪夜加良、とある、此例によりて、梶の取木を、加治加良ともいふべきことなり、可良加治(十四に見ゆ)といふも、柄楫の義ときこえたり、また弓束と云例によらば、(和名抄にも、釋名云、弓束曰、彌、中央曰、附、由美都加とあり、)加治都加ともいふべきものなり、又和名抄に、方言云、刈劍野王按、桐、鎌柄也、和名加萬都加、ともあり、母我は、三卷に、伊勢海之奥津白浪花爾欲得衰而妹之家裏爲、と見えて、集中に多き詞なり、翼ふ意なり、(頭註、谷川氏云、明を、かちからと譯せり、柁の取木なり、)○歌意は、命に對ひて、甚しく戀しく思はむよりは、中々に堀川百首には、かちはしら、とよめり、人とあらずて、君が御舟の梶柄にだになりて、そひゆかましもを、さらばかゝるくるしき思ひはあるまじきに、となり

藤原朝臣廣嗣。櫻花。贈二娘子。歌一首。

廣嗣の傳は、六卷下に委云り、式部、卿宇合の第一子なり

此花乃。一與能内爾。百種乃。言會隱有。於保呂可爾爲莫。

一與は、一瓣のことなり、と云り、○歌意は、この折て参らする、櫻花の一ひらの内に、君にいほまほしき、百種の詞が隠りてあるぞ、おほ方の花と見てあるな、となり

娘子 和歌一首。

此花乃。一與能裏波。百種之。言持不勝而。所折家良受也。

歌意は、のたまひおこせしごとく、この給はる花の一ひらの内に、百種の詞がこもりてあるらむ、そもこの花は、その百種の詞のおもきにたへずして、をられけるにあらずやは、となり、三吉野乃玉松之枝者波思吉香聞君之御言乎持而加欲波久、思合べし

厚見王。贈久米女郎歌一首。

厚見王は、四卷下に出つ、○久米女郎は、傳未詳ならず、久米連若賣にてもあるべきか、若賣は、續紀に、天平十一年三月庚申、石上朝臣乙麻呂、坐野久米連若賣、配流土左國、若賣配下總國、焉、十二年六月庚午、大赦、久米連若女、召令入京、景雲元年十月甲午、無位久米連若女授從五位下、二年十月乙卯、從五位上、寶龜三年正月辛卯、正五位上、七年正月丙申、從四位下、十一年六月己未、散位從四位下久米連若女卒、贈右大臣從二位藤原朝臣百川之母也、と見えたり

屋戸在。櫻花者。今毛香聞。松風疾。地爾落良武。

屋戸在は、女郎が家庭にあるなり、○今毛香聞は、今哉にて、二の毛は、歎息の意を含めたる助辭

なり、○松風疾は、松風が甚く吹故にの意なり、○歌意かくれたるところなし

久米女郎報贈歌一首。

世間毛。常爾師不有者。屋戸爾有。櫻花乃。不所比日可聞。

不所は、契沖云、これをチレルとよめるは、もとの所にあらぬは、花にてはちるなれば、義を以てかけるなり、○歌意は、のたまふ如く、妾が家庭にある櫻花は、風が甚く吹故に、地に落ちてあり、人の世間も常なきならひにしあるなれば、其如く、花もたゞ一盛にて散失ぬるは、さてくくちをしき事哉、これにて思へば、花も一時、我身も一時にて、君に訪れむも、今しばらくの間にて、ほどなく見苦しきものになり、老はてむとおもへば、あはれかなしき世間にてあらずやは、との下心なり

紀女郎。折攀合歡木花并茅花。贈大伴宿禰家持歌二首。

合歡木花は、六月の比開、茅花は三月の物なれば、時異なり、是は藥にせむために、春抜てたくはへ置たるを、夏贈れるなるべし、と云り、○合歡木花の花字、古寫本には華と作り

戲奴變云。和氣之爲。吾手母須麻爾。春野爾。拔流茅花會。御食而肥座。

戲奴は、人を賤しめて云稱なり、四卷大伴三依歌に、吾君者和氣乎波死常念可聞云々、とある歌の下に、具註せりき、さてこゝは、本居氏、これは家持卿へ贈る歌なれば、賤しめて和氣とはいふべ

くもあらぬを、しかいへるは、たはぶれなり、故戯奴と書て、たはぶれなることを顯はせるなり、戯に奴の如しといやしめて云る意なり、といへるが如し、○自註の變字は、反に改むべしと契沖云り、反は翻と通ひて、翻譯する意なり、○吾手母須麻爾は、此下にも、手母須麻爾殖之芽子爾也、還者雖見不飽情將盡、とよめり、須麻は、本居氏、數の意にや、と云り、○御食而肥座、契沖云、ここに、めしてこえませといひ、返しに、芽花を喫といやせにやす、とあれば、人をこやす功あるにや、本草綱目に、白茅根、有補中益氣之功、茅針及茅花、共無益氣之功、蘇頌曰、俗謂之茅針、甚益小兒、とあれど、他の醫書などにあることにこそ、○歌意は、其方の爲をひとへにおもひて、他事なく、吾手も數に勞きて、春野にてぬける茅花ぞよ、いかでこれを大切におぼして、きこしめして肥賜へ、となり、十六に、石麻呂爾吾物申夏瘦爾吉跡云物曾武奈伎取食、思合べし

晝者咲。夜者戀宿。合歡木花。君耳將見哉。和氣佐倍爾見代。

夜者戀宿は、夜ひとりぬる人の、人をこひしく思ひてぬるによそへて、戀宿と云り、○合歡木花に、品物解に云り、(六帖に、かふかの題に、此歌を載たるは、ねぶの花を、後にかふかの木と云故なり、かふかは、合歡の音をとれるなり、)○君は、吾の誤なりと本居氏云り、○歌意は、晝は見事にさきたれど、夜になれば、獨宿する吾身の、人を戀しくのみ思ひて、戀倦じてうなたれ宿る如き、この合歡木の花を、嗚呼さてもいとほしやと、吾のみひとり見てあるべしやは、いかでひとりのみ見てはあらむ、と其方までに見せむがため、折てまるらするなり、是を一目見給ひて、あはれとおぼし給へ、となるべし

大伴家持贈和歌二首。吾君爾。戲奴者戀良思。給有。茅花乎雖喫。彌瘦爾夜須。

吾君爾は、吾君をと云むが如し、さてかけ歌に、戯れて和氣といひおこせたる故に、又戯れて、此方よりは、尊みて吾君と云るなり、○戲奴者戀良思は、女郎が歌に、わけといひおこせたるを受て、此方のわけとのたまふ我は、吾君を戀しく思ふらし、と云なり、○茅花乎雖喫は、チバナヲハメドとよむべし、○歌意は、君の給はせたる茅花を喫たるからは、肥べき理なるに、さはなくて、いよいまさりて瘦に瘦るは、吾君を甚く戀しく思ひて、心を惱ます故にてあるらし、となり

吾妹子之。形見乃合歡木者。花耳爾。咲而蓋。實爾不成嶋。

不成嶋は、未來を疑ひて歎きたる詞なり、自可母といへるは、十二にも、田立名付青垣山之隔者數君乎言不問可聞、とあり、○歌意は、吾妹子が形見として、たまはせたる合歡木は、のたまふ如く、いかにもいとほしき、花のさまにてはあれど、もし花のみ咲て、實にならずであることもあらむか、さあらむには、あかすくちをしくかひなかるべきことなるを、嗚呼さてもうしろめだきわざ哉、と云て、吾妹子が言うるはしくのたまへども、たどはなくしくのたまふばかりに、あだなるものになりて、信實の心なくて、もし止むかと、末をいぶかりていふならむ、〔頭註、六帖に、かたみのかふ〕

大伴家持。贈坂上大嬢一首。春霞。輕引山乃。隔者。妹爾不相而。月曾經爾來。

春霞。輕引山乃。隔者。妹爾不相而。月曾經爾來。

歌意かくれたるところなし
〔右從久邇京。贈寧樂宅。〕

夏 雜 歌

藤原夫人歌一首

藤原夫人は、二卷に、天皇賜藤原夫人御歌一首云々、藤原夫人奉和歌一首云々、とあると同人なり、さて夫人はオホトジとよむべし、かの二卷なる藤原夫人を、本居氏説を引て、キサキと訓たりしはたがへりき、(夫人は、キサキなることはたがはず、そはたとへば、麻徹都君と云は、公卿大夫にわたりていふ稱なるが如く、キサキと稱するも、皇后には限らず、ひろく妃夫人の列にまでわたりていふ稱なればなり、されど姓名の下に付て、某夫人とあるは、みなオホトジと云ぞ、古言なる、)二卷なるも、舊本の目録にオホトジとよめるは宜し、其證は、この古註に、字曰大原、大刀自、と見え、廿卷に、藤原夫人歌とありて、註に、淨見原宮御宇天皇之夫人也、字曰氷上大刀自也、欽明天皇紀に、青海夫人、敏達天皇紀に、老女君夫人、天武天皇紀下に、阿部夫人、石川夫人(オホトジはオホトジを略稱するべし、)なども見ゆ、又上宮聖德法王帝説に、壬午正月廿二日、聖王枕病也、即同時、膳大刀自得勞也、大刀自者二月廿一日卒也、聖王廿二日薨也、是以明知膳夫人先日卒也、聖王後日薨也、云々、(これに膳、大刀自とも、膳、夫人とも書るにて、夫人をオホトジとよむべきを知れ、)さて夫人某といふときには、キサキと呼、某夫人と云ときには、大刀自と云は、た

とへば皇太子は、日嗣御子と申すことなれども、某皇太子と申すときには、ひつぎの美古とは、申さずて、豊聰皇子尊、高市皇子尊など申すが如し、書紀の訓なども、大抵この差別を、わきまへてよめりと見ゆ、さるは夫人某とある所にては、大方キサキとよみ、某夫人とある所にては、オホトジと訓たればなり、(其中に、舒明天皇紀に、夫人蘇我島大臣女、法提郎媛、天武天皇紀に、夫人藤原大臣女、氷上娘、などある訓はたがへり、これらの夫人をば、キサキと訓べき理なるをや、)心をつくべし、(このわきだめをえしらすして、一わたりと思ふは、かたはらいたきわざなりけり、)しばらく中昔の物言にたとへていはず、大臣は大麻徹都君なることはたがはざれども、某大臣と申すときは、たとへば融大臣などいふ如く、其稱かはれる、其類なり、さて大刀自といふは、大は、美稱なるべく、刀自は、すべて女人の稱なり、(岡部氏考、記別に、この夫人の訓を論へるは、わかしくしきことなり、又刀自の義を説るもたがへり、刀自のことは、既く四卷に具註りき
○舊本こゝに註て、明日香清御原宮御宇、天皇の夫人也、字曰大原大刀自、即新田部皇子之母也、とあり、活字本異本等には此註なし

霍公鳥。痛莫鳴。汝音乎。五月玉爾。相貫左右二。

歌意かくれたるところなし、霍公鳥は、五月に鳴を、主とするを、これは四月になくを聞て、未時ならぬに、繁く啼を惜めるなり、さて五月玉は、いはゆる續命縷のことにて、汝が聲を、そのくす玉に相貫まじへむまでは、いたくなきふるすな、と云なり、ほととぎすの聲は、ぬきまじへらるゝ物にはあらざれども、賞翫のあまりに、さるはかなきことをもよむが、歌のならばしなり、〔頭註、

風俗通曰、五月五日、以五彩絲繫臂者、辟鬼及兵、一名長命縷、一名續命縷、

志貴皇子御歌一首。

神名火乃。磐瀨乃杜之。霍公鳥。毛無乃岳爾。何時來將鳴。

磐瀨乃杜は、上に出つ、○毛無乃岳も、穴和にあるなるべし、此下にも、古郷之奈良思之岳能霍公鳥、とよめり、毛無とかけるは、契沖云、左傳曰、昭七年、食土之毛、誰非君臣、(毛草也、)史記鄭世家曰、賜不毛之地、(何休曰、堯堯不毛、)五穀曰不毛、人のふみならして、草のなき心にてかけり、○御歌意かくれなし、御家近き、奈良思の岳に來鳴む事を、待遠におもほして、のたまへるなり

弓削皇子御歌一首。

霍公鳥。無流國爾毛。去而師香。其鳴音乎。聞者辛苦母。

御歌意は、霍公鳥の、むけに無てある國も、海表諸國には在べし、さる遙なる國になりとも、此鳥のなからむ方に行たくぞおもふ、其なく音を聞ば、さてもいよく苦しや、となり、鳥の音なども、時にとりて哀樂の差別あること、人情の常なり、これはいと物むづかしきことのあるをり、ほととぎすの聲をき、給ひて、いよく辛苦のまさるにつき、いかでほととぎすのなき國に行まほしき、との給へるなるべし

小治田廣瀨王 霍公鳥歌一首。

小治田は、王の居給へる地をもて稱せるなるべし、古事記推古天皇條に、坐小治田宮、治天下、書紀に、十一年冬十月、遷于小墾田宮、と見ゆ、大和國高市郡にあり、廣瀨王は、天武天皇紀に、十三年三月丙戌、詔云々廣瀨王云々、令記定帝紀及上古諸事、十二年二月庚辰、遣淨廣肆廣瀨王云云等於畿内、令視占應都之地、十四年九月甲寅、遣云々廣瀨王於京及畿内、各令按人夫之兵、持統天皇紀に、六年二月丁酉朔丁未、詔諸官曰、當以三月三日、將幸伊勢云々、三月丙寅朔戊辰、以淨廣肆廣瀨王云々等爲留守官、續紀文武天皇大寶二年十二月乙卯、以從四位下廣瀨王爲造大殿垣司、三年十月丁卯、任太上天皇御葬司、云々、廣瀨王云々爲御裝副、元明天皇和銅元年三月丙午、從四位上廣瀨王爲大藏卿、元正天皇養老二年正月庚子、正四位下、六年正月庚午、散位正四位下、廣瀨王卒、と見えたり

霍公鳥。音聞小野乃。秋風。芽開禮也。聲之乏寸。

芽、舊本に茅と作るは誤なり、○歌意は、霍公鳥の聲聞なれし野邊に、はや秋風の吹て、芽の花の咲たればにや、そのほととぎすの聲の、ともしくまれになりたるならむ、となり

沙彌霍公鳥詞一首。

沙彌は、契沖も云し如く、三方沙彌なるを、三方二字をおとせるなるべし、沙彌女王あれど、歌に、家なる妹とあれば、女王の歌にあらず、三方沙彌は、持統天皇紀に、六年冬十月、授山田史御形務廣肆、前爲沙門、學問新羅、此集二卷に、藤原宮御宇天皇代とある標内に、三方沙彌が歌あれ

ば、此御形が僧にてありしほどを、三方沙彌といへるならむ、御形を、三方ともかけること、續紀に見ゆ、猶二卷に云るを、考合へし

足引之。山雀公鳥。汝鳴者。家有妹。常所思。

歌意は、山ほととぎすよ、汝が鳴ば、その聲にもよほされて、いよく家に留れる妻が、一すぢに常に戀しく思はるゝ、となり、これは旅にありて、雀公鳥の音に、あはれをもよほして、家妻をこひしくおもふよしなり

刀理宣令歌一首。

物部乃。石瀬之杜乃。雀公鳥。今毛鳴奴。山之常影爾。

物部乃は、枕詞なり、契沖、ものゝふの屯聚、といふ心に云かけたるなり、いはむは、陣を張居る心なり、神武天皇紀に、夫磐余之地舊名片居、(片居此云伽哆婆)亦曰片立、(片立此云伽哆婆)知こ逮我皇師之破虜也、大軍集而滿其地、因改號爲磐余、或曰、天皇往營嚴登糧、出軍而征、是時磯城八十梟帥、於彼處屯聚居之、(屯聚居此云恰波彌婆)果與天皇大戰、遂爲皇師所滅、故名之曰磐余邑、これいはれといふも、八十梟帥がかたの兵ども、いはみ居たるゆゑなれば、今もいはといふを、いはむと云心にしてつゞくるなり、又いはむといふは、陣を張こゝろにもあらず、みちあふるゝ心なり、皇極天皇紀(四年六月)云、佐伯連子麻呂、稚犬養連綱田、斬入鹿臣、是日雨下潦水溢庭、以席障子覆鞍作屍、滿の字、溢の字をよめるにて、心得べし、

と云り、○今毛鳴奴の下、香字などの脱たるなるべし、と契沖云るはさることなり、十八に、敷多我美能夜麻爾許母禮流保等登藝須伊麻母奈加奴香伎美爾妓可勢牟、とあり、考合べし、今毛と云るは、今は即今の今にて、毛は、他時を主と立て云る詞なり、今は時がいまだしければ、さかりに鳴節にはあらざれども、其時の如くに音を出して、いかで即今も鳴かし、との意なり、奴は、希望辭の禰の活用きたるなり、香は、哉にて歎息辭なり、三卷に、吾命毛常有奴可昔見之象小河乎行見爲、十一に、妹門去過不勝都久方乃雨毛零奴可其乎因將爲、などある、皆奴可といへる例なり、○常影は、本居氏云、たを陰なり、山のたわみたる所を云、たをとも、たわとも云、(松岡成章が結毛録に、大和に鳥越のたわと云處あり、江村氏物語に、肥後にて、山のたわみて長く連りたる處を、たわと云とするせり)○歌意は、石瀬の杜に棲ほととぎすよ、いまだ時には至らずとも、今もこの山のたを陰に鳴て、いかで我にきかせよかし、汝がさかりに鳴べき時を待むは、甚待久しきに、となり

山部宿禰赤人歌一首。

戀之家婆。形見爾將爲跡。吾屋戶爾。殖之藤浪。今開爾家理。

戀之家婆(家字一本には久と作り、こひしくばにても意同じ、古今集に、我廬は三輪の山本戀しくば訪ひ來ませ杉樹る門)は、戀しからばの意なり、戀しく思はむ時にはと云むが如し、十四に、古非思家婆伎麻世和我勢古可伎都楊疑宇禮都美可良思和禮多知麻多牟、○形見は、女の形見を云るなるべし、(契沖が、古今集の、わがやどの池の藤浪さきにけり山ほととぎすいつかきかなむ、とある歌を引て、このこひしければ、ほととぎすをいへり、と云るはあらず、○歌意は、女を戀しく思は

む其時には、さきに其女と、二入見愛しことを思出して、其形見にせむとて、殖置し庭の藤浪、今時至りて開にけり、まことに女の形見にせむと思ひしかひありて、美麗しき花ぞ、となり

式部大輔石上堅魚朝臣歌一首。

石上堅魚は、續紀に、元正天皇養老三年正月壬寅、授從六位下石上朝臣堅魚從五位下、聖武天皇神龜三年正月庚子、從五位上、天平三年正月丙子、正五位下、八年正月、正五位上、と見えたり

霍公鳥。來鳴令響。宇乃花能。共也來之登。問麻思物乎。

こは歌の左に註せる如く、三卷、五卷にも見えたるごとく、太宰帥大伴卿の妻、大伴郎女の身まかられたるを、朝廷より、大伴卿をとぶらはせ給ふ勅使に、堅魚朝臣筑紫へ下られける時の歌なり、さて歌意は、いかにあらむ、契沖は、なき人と共にや來しと、時鳥にとはましものをといふ意なり、ほととぎすを、此國には冥途の鳥といひならはせり、むかしよりしかいひならはせることにや、しかよめる歌あり、と云り、さらばなき人と共にやと云るは、亡人の魂と共にやといふ意ならむ、又、卯花をいへるは、ほととぎすと、同時のものなるゆるなるべし、されど平穩ならず、本居氏は、この宇乃花能の能は、五卷に、天地の共に久しくいひつげと、とよめる乃に同じく、トに通ひて聞ゆる一の體なり、さて來は、成の誤にて、第四の句は、ムタヤナリシトとよみて、帥卿の妻は、卯花の散過たると共にうせて、行へもなく成しや、と郭公に問ましものをと云意なり、と云り、(されどそれも、散過し卯花と共にやとやうにいはずて、ただ卯花の共にやとては、いさゝか言足はぬやうなり、)なほ考べし

うなり、)なほ考べし

〔右神龜五年戊辰。太宰帥大伴卿之妻大伴郎女。遇病長逝焉。于時勅使式部大輔石上朝臣堅魚。遣太宰府。弔喪并贈物也。其事既畢。驛使及府諸卿大夫等。共登記夷城而望遊之日。乃作此歌。〕大伴卿は、旅人卿なり、○大伴郎女遇病長逝は、三卷に、神龜五年戊辰、太宰帥大伴卿、思戀故人一歌、ありて、故人はすなはちこゝにいへる、卿妻大伴郎女のことなり、五卷にも、太宰府にて、帥大伴卿報凶問一歌、あり、○也字、舊本には色と作り、今は一本に従り、○及字、舊本には乃に誤、○記夷城は、和名抄に、筑取國遠賀郡木夜、とある、夜は夷の誤にて、其地に造れる城郭をいふならむか、契沖、下座郡城邊木乃倍と見えたる、城山と云も、そこなるべし、さて天智天皇紀に、又於筑紫築大堤貯水、名曰水城、とありて、和名抄に、下座郡三城美都木、と載られたるを見れば、城邊も、此三城のあたりにて、城邊の名は負せたるべければ、記夷城は、彼水城なるべし、夷は、語の助にそへて云るにて、記は、城の心なるべし、五卷に、此きのやまにとよめる歌に、紀字を書り、紀伊國の例を思ふに、紀字なるべきにや、と云り、(今案に、記の字にてもしかるべし、)

太宰帥大伴卿和歌一首。

橘之。花散里乃。霍公鳥。片戀爲乍。鳴日四曾多寸。

鳴日四曾多寸は、四とは一すぢに重きよしをしらせたる言にて、こは一すぢに音に鳴日の多きよしなり、十一に、内日左須宮道爾相之人妻妬玉緒之念亂而宿夜四曾多寸、とあるも、一すぢに念亂れて、宿る夜の多きよしなり、十二に、三吉野之蜻乃小野爾刈草之念亂而宿夜四曾多寸、

十五に、多知可徹里奈氣杼毛安禮波之流思奈美於毛比和夫禮巨奴流欲之曾於保伎、などもあり、○歌意は、橘の散里のほととぎす、今は相思ふべき花のなれば、片思にのみ戀しく思ひつゝ、一すぢに哭に泣日ぞことに多き、となり、鶯の梅を、鹿の芽を、親しみ愛しむごとく、霍公鳥は、橘を己が妻のごと、なれむつるゝことに、いひなれたるより、橘を妻にたとへ、ほととぎすを、やがてみづからに比へて、のたまへるなるべし、契沖云、橘の散をば、妻の身まかられたるにたとへ、ほととぎすのなくをば、戀したひてなくによせたり、おのが妻こひつゝなくやさつきやみ神なびやまの山ほととぎす、とよみて、ほととぎすも、妻戀する鳥なれば、ことによせたり

大伴坂上郎女。思筑紫大城山一歌一首。

坂上郎女は、契沖契、旅人の妹なれば、旅人太宰帥にておはしける時、彼許へ下られけることあり、第六に、天平二年と表して、冬十一月、大伴坂上郎女、發帥家上道、超筑前國宗形郡名見山之時作歌、とて、載たれば、天平二年に旅人に逢、ついでにつくしをも見むとて、くだられけるなるべし、さてかへりて、みやこにてよまるゝうたなれば、天平三年の夏のうたなるべし

今毛可聞。大城乃山爾。霍公鳥。鳴令響良武。吾無禮杼毛。

今毛可聞は、今哉にて、二の毛は、歎息の意を含める助辭なり、○大城乃山は、本居氏、筑前の國人のいへるは、大城の山は、御笠郡今の四天王寺山のことなり、城山とは、別なるよしへり、と云り、○令響とかけるは、令響意なり、○歌意は、筑紫の大城の山にて、今この頃か、ほととぎすの鳴とよもすらむ、今は帥卿も歸京し給ひ、吾も其地に居ねば、昔の如く聞賞す人もあるまじけれど、ほととぎすは、なほ當時にかはらず鳴らむと思へば、さても戀しや、となり

大伴坂上郎女。霍公鳥歌一首。鳴音聞者。戀許曾益禮。

何哥毛は、何しにかの意にて、毛は、歎息を含めたる助辭なり、四卷に、生而有者見卷毛不知何如毛將死與妹常夢所見鶴、七卷に、佐保河爾鳴成智鳥何師鳴川原乎思努比益河上、十三に、不聞而默然有益乎何如文公之正香乎人之告鶴、などある、これら何師可聞といひて、流とうけたる例なり、○幾許戀流は、ほととぎすのなくを、殊外に甚く戀しく思ふぞ、と云意なり、○戀許曾益禮は、おのが夫を戀しく思ふ心こそ、まされの意なり、(ほととぎすをこふることの、まさるにはあらず、)索性法師、ほととぎすはつこ多きけばあぢきなくぬしさだまらぬこひせらるはた、思合べし、○歌意は、ほととぎすの鳴聲をきけば、なぐさみはせず、其聲にもよほされて、いよゝゝ己が夫を戀しく思ふ心のまさりこそすれ、となり

小治田朝臣廣耳歌一首。

廣耳は、契沖、續日本紀を考るに、廣耳といふ人見えず、小治田廣千と云人あり、これにやあらむ、耳字、草書千に似たる故に、紀の古本草書などにて、寫生の誤れるにや、今の印板の續日本紀、文

字のあやまり、脱字錯簡等すくなからねばなり、と云り、續紀聖武天皇天平五年三月辛亥、正六位上小治田廣千授外從五位下、十一年正月丙午、從五位下、十三年八月丁亥、爲尾張守、十五年六月丁酉、爲讚岐守、とあり

獨居而。物念夕爾。霍公鳥。從此間鳴渡。心四有良思。

從此間鳴渡は、此間を鳴渡る、と云意なり、(此よりと云意にはあらず、)集中にいと多き詞なり、從は、例の乎の辭に通ふ從なり、古事記に、降出雲國之肥川上在鳥髮地、此時箸從其河流下、古今集題訓に、山川より花の流れけるをよめる、などある、よりも皆同じ、既く委云り、○歌意は、唯一人居て、人戀しく物思ひをする夕に、ほととぎすのこゝを鳴てわたるは、彼も心ありて、妻など戀しく思ふは、己も同じさまなるぞと、我にしらせて鳴わたるならし、とほととぎすを一すぢにあはれみたるなり

大伴家持。霍公鳥歌一首。

宇能花毛。未開者。霍公鳥。佐保乃山邊。來鳴令響。

未開者は、未開ぬにといふ意に通ふ言なり、此例既く委云り、○山邊は、ヤマヘニと訓べし、○歌意は、卯花の盛ならばさもあるべきを、いまだ開ねば、思ひがけなきに、ほととぎすの、佐保の山邊に初音もらして、來鳴とよもすは、めつらしの聲ぞ、となり

大伴家持。橘歌一首。

吾屋前之。花橘乃。何時毛。珠貫倍久。其實成奈武。

歌意は、吾庭の花橘の實の、いつか續命縷に貫交ゆべく成なむ、さても待遠や、となり

大伴家持。晚蟬歌一首。

晚蟬は、品物解にいへり

隱耳。居者鬱悒。奈具左武登。出立聞者。來鳴日晚。

鬱悒は、おぼつかなく、心のふさがる故にの意なり、○歌意は、簾など垂て、内にこもりてばかり居れば、おぼつかなく、心のふさがる故に、其ころをなくさめむとて、外に出立て聞ば、又ひぐらしの來鳴て、あはれをもよほすよ、となり、良暹法師の、さびしさにやどを立出てながむればいづこもおなじ秋の夕ぐれ、心ばえ似たり

大伴書持歌二首。

我屋戸爾。月押照有。霍公鳥。心有今夜。來鳴令響。

月押照有は、おしなべて照みちたるをいふ、集中に、まどこしに月おしてれりとも、春日山おしててらせる此月は、などもよめり、○歌意は、吾やどをおしなべて月は照みちたり、又思ふ友人も訪ひ來たり、かく興ある今夜なれば、いかでほととぎすも心して、此處に來鳴とよもせよ、となり

我屋前乃。花橘爾。霍公鳥。今社鳴米。友爾相流時。

友爾相流時は、書持の、友人にあへるときなり、(契沖が、橋をほととぎすの友といへり、と云るは、あらず)○歌意は、今夜は、思ふ友人のとぶらひ來あひたる夜ぞ、今こそ吾庭の花橋に來て、ほととぎすの鳴べきことなれ、他時には、いかに鳴ともかひなかるべきを、となり

大伴清繩歌一首。

大伴清繩は、傳未詳ならず、繩、一本には綱と作り、十九に、大伴清繩といふも見えたり、もしは同人にして、字を誤れるものか

皆人之。待師宇能花。雖落。奈久霍公鳥。吾將忘哉。

皆人は、人皆とありしを、下上に寫誤れるなるべし、○歌意は、世人皆の、いつかくと待し卯花も開て、又散失、ほととぎすの鳴音も、それにつれて自然かれ行とも、此ほととぎすの聲のおもしろさを忘れむやは、いつまでもわすれはすまじ、となり

庵君諸立歌一首。

諸立は、傳未詳ならず

吾背子之。屋戸乃橋。花乎吉美。鳴霍公鳥。見谷吾來之。

花乎吉美云々は、花がよき故に、ほととぎすの鳴、と云意なり、○歌意は、吾兄子が家の庭の花橋

が、おもしろくうつくしく開てある故に、その花にめで、ほととぎすのなくさまを見むとて、わざわざ見にぞ來りし、となり

大伴坂上郎女歌一首。

霍公鳥。痛莫鳴。獨居而。寐乃不所宿。聞者苦毛。

歌意かくれたるところなし

大伴家持。唐棣花歌一首。

唐棣花のことは、品物解に云

夏儲而。開有波彌受。久方乃。雨打零者。將移香。

歌意かくれなし

大伴家持。恨霍公鳥晚暄二首。

吾屋前之。花橋乎。霍公鳥。來不喧地爾。令落常香。

歌意かくれなし

霍公鳥。不念有寸。木晚乃。如此成左右爾。奈何不來暄。

木晚は、葉のしげりあひて、こぐらくなるを云、木の下やみなど後に云も同じ、○歌意は、我待戀
る霍公鳥は、かくまで木の葉も茂くなるまで、など來鳴ぬぞや、これにて見れば、ほとゝぎすは、
わが思ふごとく、我を思はずありき、と云なるべし、と中山嚴水云り、又かく木茂くなるまで、來
鳴ざらむとはおもはざりき、といふ意と見てもよし

大伴家持。權ニ霍公鳥一歌一首。

何處者。鳴毛思仁家武。霍公鳥。吾家乃里爾。今日耳會鳴。

何處者は、イヅクニハと訓べし、何處ぞにはと謂なり、此は他を云何なり、十七に、宇梅能花伊都
波乎良自等伊登波禰登佐吉乃盛波乎思吉物奈利、とあると、同格なり、此も何ぞの時は折まじと、
取わきていとふにはあらねども、といふ意なり、○今日耳會鳴は、今日ばかりぞ、はじめて鳴とい
ふ意なり、耳とは、すぎし日に對へて云るなり、○歌意は、何方そには、初音もらして、鳴たる事
もありぞしけむ、この吾里には、今日ばかりぞ、はじめて鳴なる、となり

大伴家持。惜ニ橋花一歌一首。

吾屋前之。花橋者。落過而。珠爾可貫。實爾成二家利。

歌意かくれたるところなし

大伴家持。霍公鳥歌一首。

霍公鳥。雖待不來喧。菖蒲草。玉爾貫日乎。未遠美香。

菖蒲の菖字、舊本に無は、脱たるなり、古寫本傍書に従つ、〔頭註、菖古寫本傍書、〕○未遠美香は、
いまだ遠き故にかの意なり、○歌意かくれなし

大伴家持。雨日聞ニ。霍公鳥喧一歌一首。

宇乃花能。過者惜香。霍公鳥。雨間毛不置。從此間喧渡。

過者惜香は、散過なば、惜からむとてかの意なり、惜からむといふ意の所を惜美といふは、一格
なり、三卷に、不見而往者益而戀石見云々名積叙吾來並一、とあるは、見ずして往ば、益て戀しか
らむとて、云々を煩ぞ吾來し、といふ意なり、又同卷に、足日本能石根許其思美菅根乎引者難三
等標耳會結焉、とあるは、石根が凝々しさに、菅根を引ば引難からむとて、標ばかりを結、といふ
意なり、四卷に、今夜之早開者爲便乎無美秋百夜乎願鶴鳴、とあるは、爲便が無らむとて、秋
の百夜を願ひつる哉、といふ意なり、十五に、伊毛爾安波受安良婆須徹奈美伊波禰布牟伊故麻乃山
乎故延旦會安我久流、とあるは、妹に逢ずあらば、爲便なからむとて、生駒の山を越て來る、とい
ふ意なり、廿卷に、之良奈美乃與會流波麻倍爾和可例奈波伊刀毛須徹奈美夜多妣蘇旦布流、とある
は、白浪のよする遠き濱方に別れ往なば、爲便なからむとて、彌度袖を振、といふ意なり、十卷に、
天漢湍瀨爾白浪雖高直渡來沼待者苦彌、とあるは、此方に待居ば、待遠に思ひつゝ苦しからむ
とて、浪の高き天漢の瀨を、直に渡り來ぬるといふ意なり、十七に、和我夜度能花橋乎波奈其米
爾多麻爾會安我奴久麻多婆苦流之美、とある苦流之美も同じ、十一に、此如耳戀者可死足乳根之
母毛告都不止通爲、とあるは、此如耳に戀しく思はゞ、死ぬべからむとて、といふ意、又同卷に、

妹之名毛吾名毛立者惜社布仕能高嶺之燒乍渡、とあるは、妹名も吾名も立たらば、惜からむとて、
妹之名毛吾名毛立者惜社布仕能高嶺之燒乍渡、とあるは、妹名も吾名も立たらば、惜からむとて、
といふ意、十一に、言出云忌々山川之當都心塞而在、とあるは、言に打出して云たらば、忌
忌しからむとてといふ意、十七に、安佐疑理能美太流許己呂、許登爾伊泥底伊波婆由遊思美、刀
奈美夜麻多牟氣能可未爾、奴佐麻都里安我許比能麻久、とあるも同じ、十九に、吾屋戸之芽子開爾
家理秋風之將吹乎待者伊等遠彌可母、とあるは、秋風の吹む時節を待ば、いと待遠ならむとてか、
芽子の咲たる、といふ意なり、や、後にも此格あり、古今集に、花すき穂に出て戀ば名を惜み下
ゆふ紐の結ほれつゝ、とあるも、名が惜からむとて、といふ意に用ひたり、後撰集に、しぐれふ
りふりなば人に見せもあへず散なば惜みをれる秋はぎ、とあるも、散なば惜からむとて、といふ意
にて、全同し、然るを、中古以來、此用様を辨へたる人なくして、一首の大概を、解誤れること多
きによりて、今わづらはしきをいとせずして、具にいへるなり、此例なほ既くも委云り、○雨間毛
不置は、雨の零間も息ずの意なり、こゝの雨間は、雨のふる間をいへるなり、此下に、久堅之雨間
毛不置雲隱鳴會去奈流早田鷹之哭、とある、全同し、十二に、十月雨間毛不置零爾西者誰里之間
宿可借益、とある雨間は、雨の晴間をいへるなり、歌によりて意異れり、又十卷に、雨間開而國見
毛將爲乎、とあるも、晴間をいへるなり、○歌意は、時過て卯花の散失なば、いかにをしむとも、
かひなからむとて、雨のふる間も息ずして、ほとゝぎすの、此處を鳴てわたらむか、となり

遊行女婦は、和名抄に、楊氏漢語抄云、遊行女兒、和名字加禮女、又云阿會比、
橘 歌一首。 遊行女婦。

遊行女婦は、和名抄に、楊氏漢語抄云、遊行女兒、和名字加禮女、又云阿會比、
橘 歌一首。 遊行女婦。

君家乃。花橘者。成爾家利。花乃有時爾。相益物乎。

成爾家利は、實に成にけりなり、○花乃有時爾は、花のあるときにの意なり、ノアの切ナとなれり、
明日も來む野路の玉川はぎこえて色なる浪に月やどりけり、など云も、色之有浪にて、同意か、○
歌意は、君が家の庭の花橘は、悔しくも散失て實に成にけり、花のある時に早く訪來べかりしもの
を、遅く來しこそ本意なけれ、となり、末句は、古今集に、かはづなくなるでの山吹ちりにけり、と
いふ歌に同じ

大伴村上。橘 歌一首。
吾屋前乃。花橘乎。霍公鳥。來鳴令動而。本爾令散都。

本爾令散都は、大町稻城、本は地の誤にて、ツチニチラシツなるべし、本と地と、草書相似たり、
と云り、さもあるべし、此下に、志許霍公鳥云々、徒、地爾令散者、又妹之見而後毛將鳴霍公鳥花
橘乎地爾落津、又如今心乎常爾念有者先咲花乃地爾將落八方、十卷に、去年咲之久木今開、徒
土哉將墮見人名四二、又霍公鳥來居裳鳴香吾屋前乃花橘乃地二落六見牟、又此上にも、屋戸在
櫻花者今毛香聞松風疾地爾落良武、などあり、○歌意は、吾庭の花橘に、ほとゝぎすの來鳴とよも
して、其聲のひびきにゆるがして、花を地に落しつるは、をしき事ぞ、となり

大伴家持。霍公鳥歌二首。
夏山之。木末乃繁爾。霍公鳥。鳴響奈流。聲之遙佐。

繁は、しげみといふが如し、繁りてある間のことなり、○歌意かくれたるところなし

足引乃。許乃間立八十一。霍公鳥。如此開始而。後將戀可聞。

足引乃の枕詞を、即山のこととして、木とも、磐ともつづけたるなり、抑足引といふことは、字は種々に書たれども、いづれも借字にして、其中に、比紀を檜木と書るところ多き、そは正字にして、安之比紀といふは、茂檜木といふことのつづまれる言なるよし、はやく云たる如し、されば、足引之許乃間とつづけたるも、やがて茂檜木之木、とつづけたるかとも思はれ、菅原大臣の、足引の彼方彼方に道はあれど、とよみ給へるも、同じ意ならむとすべかめれど、彼大臣のは、此集十七に、安之比奇能乎底母許乃毛爾、とあるを、本としてよみ給へるなるべく、此なるは、十卷に、足檜木乃山下風波、十一に、足檜木乃下風吹夜者、などあるに同じく、足引といふを、やがて山のこととしていへるなり、三卷に、足日本能石根とあるは、さらなり、○許乃間立八十一は、本間立潛なり、くゞは、くゞることなり、神代紀に、漏字をクキとよめり、八十一と書るは、九々の義なり、シ、を十六と書る類なり、○後將戀可聞、十卷に、秋芽子之下葉乃黃葉於花繼時過去者後將戀鳴、○歌意は、聲を聞きしきさきには、さのみには思はざりしかど、今日木間をくゞりつたひて、鳴ほど、ぎすの音を聞きそめて、今より後常にほとゝぎすを戀しく思はむか、さてはなつわしの聲や、となり

大伴家持。石竹花歌一首。吾屋前之。瞿麥乃花。盛有。手折而一目。令見兒毛我母。

令見兒毛我母は、此方より見すべき兒もがな、いかで來れかし、と冀ふよしなり、へ此方に見すべき兒もがな、といふにはあらず、十卷にも、青柳之絲乃細紗春風爾不亂伊間爾令見子裳欲得、とあり、同意なり、○歌意は、吾庭のなでしこの花は、この頃盛にてあり、この盛なる間、手折てた一目見せまほしく思ふに、その見すべき女もがな、いかではやく來れかし、となり

惜不登筑波山歌一首。

惜は、残念におもふ意なり、又恨の誤にてもあらむ

筑波根爾。吾行利世波。霍公鳥。山妣兒令響。鳴麻志也其。

鳴麻志也其は、其は、ほとゝぎすをさす、其ほとゝぎすが鳴ましやは、なきはすまじ、といふ意なり、○歌意、此は、つくばねに登りし人の返り來て、ほとゝぎすの云々鳴しとかたるを聞て、さてさて共に登りたらむには、きくべきことなるに、遺憾きことかな、さはいへど、かく物のふさはぬ身なれば、又我登りたらむには、存外さやうに其鳴ましやは、鳴はすまじ、といふならむ

〔右一首。高橋連蟲麻呂之歌集中出。〕

夏相聞

大伴坂上郎女歌一首。無暇。不來之君爾。霍公鳥。吾如此戀常。往而告社。

無暇、三卷に、然之海人者軍布刈拾燒無暇髮梳乃小櫛取毛不見久爾、○不來之は、之は、坐か益かの誤なるべし、この歌、新千載集戀二に、きまさぬきみに、とてのせたり、○社字、コソとよむこと、社は、物を乞祈所ゆゑに、しか訓と契沖は云り、○歌意は、事繁暇無き故に、問來座ざる君を、吾はかほど戀しく思ふといふことを、いかで其君に行て告よかし、ほととぎすよ、となり

大伴四繩宴吟歌一首。
事繁。君者不來益。霍公鳥。汝太爾來鳴。朝戸將開。

歌意は、わが待戀る君は、事繁くて、暇なき故にきまさず、よしやほととぎすよ、汝なりともきなけ、さらば朝戸ひらきてきくべきに、汝だになかずば、われは朝戸ひらく力なし、となり

大伴坂上郎女歌一首。

夏野乃。繁見丹開有。姫由理乃。不知所戀者。苦物乎。

繁見丹開有は、繁りてある間に咲る意なり、七卷に、道邊之草深由利、とよめるごとく、草のしげみにさくものなればなり、○姫由理は、百合の一種なり、品物解に云、姫は、後に姫松、姫桃など云姫の如し、○歌意、本は序にて、姫ゆりの、草深き野にさきたる如く、人にしられず戀しく思ふ心は、くるしきものなるを、などか人のおもひおこせぬぞ、とらむるなり、(ものをは、ものなるをの意にて、餘意を含むる詞なり、)

小治田朝臣廣耳歌一首。

霍公鳥。鳴峯乃上能。宇乃花之。獸事有哉。君之不來益。

獸事有哉(獸、玉篇曰、足也飽也)は、我につきて、なにぞ君が心に、つらき事あればにやの意なり、○歌意かくれたるところなし、本句は、獸をいはむ料の序なり、十卷に、鶯之往來垣根乃宇能花之獸事有哉君之不來座、後撰集に、白妙にほふ垣根の卯花のうくも來てとふ人のなき哉、古今集に、水の面におふるさつき草のうきことあれやねをたえてこぬ、などあり、思合べし

大伴坂上郎女歌一首。

五月之。花橘乎。爲君。珠爾社貫。零卷惜美。

五月之、之は、山字の寫誤なり、サツキヤマと訓べし、十卷に、五月山花橘爾云々、又五月山宇能花月夜云々、などあり、例すべし、○社字、舊本になきは脱たるなり、今は一本に従つ、○歌意は、五月山に咲たる花橘の、散む事の惜さに、君が爲に、玉に貫置て、貯ふるにこそあれ、といふなり

紀朝臣豐河歌一首。

豐河は、續記に、天平十一年正月丙午、正六位上紀朝臣豐河授外從五位下と見えたり
吾妹兒之。家乃垣内乃。佐由理花。由利登云者。不謂云二似。

由利は、後と云むに同じ意の古言なり、さればやがて、後字を、由利と云べき所にも用たり、(現存

六帖に、今はげに秋近からしきゆり花ゆりあふまでに置く白露、とあるは、今の歌によりてよめりと見ゆるに、由利を動る意に心得てよめるか、又は後を動にうつして云るか、いづれにまれ、彼歌は動合と云なるべし、○不調云二似は、調字は、許の誤にて、イナチフニニツなるべし、と云る説によるべし、此下にも、不許者不有、と見えたり、○歌意、本は序にて、後にと妹がいへれば、いなあはじと云に、似つることなり、となり

高安歌一首

高安は、一卷に、高安、大島とあると同じきか、又は高安王なるべきが王、宇脱たるか

暇無。五月乎尙爾。吾妹兒我。花橋乎。不見可將過。

歌意は、たとひ事繁くとも、五月には、妹が家の花橋を、行て見愛むと思ひしに、この五月をさへに、暇がなき故に、行て見ることかなはずして、いたづらにすぐしなむか、となり

大神女郎。贈大伴家持歌一首。

霍公鳥。鳴之登時。君之家爾。往跡追者。將至鳴。

鳴之登時は、ナキシスナハチと訓べし、神武天皇紀に、登時、續紀に、登時、捕亡令に、登共追捕、さてすなはちてふ言は、俗言にていはし、その時すぐさまなどいはむが如し、後世に用たるとはいささかかはりあり、六帖、貫之、春たゝむすなはちことに君がため千年つむべき若菜なりけり、竹取物語

に、綱を曳過して、綱たゆるすなはちに、やしまのかなへの上に、のけざまにおち給へり、云々、たてこめたる所の戸、すなはちたゞあきにあきぬ、云々、宇津保物語鶴子に、うまれ給ひしすなはちより、御ふところはなち奉り給はず、云々、さきゝて侍しすなはち、舞をなむし侍りし、俊蔭に、うまれおつるすなはち、女おのが布のふところにいできて云々、濱松中納言物語に、御せうそこつたへ給ひつるを、かへりまうでこしすなはちも、えたづね出し奉らず、落窪物語に、この少將を、見いでぬるすなはち、北方おとどに申給ふ、云々、かむの君、さすがにあはれにて、こゝにはすなはちより、御夜中暁のこともしらでや、となげき待しかど云々、狭衣に、いとすなはちのやうなる御心まどひは、おほしのどめてありつるを云々、蜻蛉日記に、此除目のとくにや、と思給へしかば、すなはちもきこえさすべかりしを云々、源氏物語寄生に、わざとめしとは侍らざりしかど、れいならず、ゆるさせ給へりしよろこびに、すなはちもまらまほしく侍りしを云々、枕冊子に、里にてもあるくすなはち、これを大事にして見せにやる、云々、しかくの人こもらせ給へりなど、いひきかせていぬるすなはち、火桶くだ物などもてきつゝ云々、大和物語に、みづから只今まるりてとなむいひたりける、かくてすなはちきにけり、云々、などあり、○歌意は、ほとゝぎすの鳴やいなや、すぐさま、君が家に行てなけとて追やりしを、其處に至りて鳴けむか、嗚呼さてもはやくきかまほしや、となり

大伴田村大嬢。與妹坂上大嬢歌一首。

故郷之。奈良思之岳能。霍公鳥。言告遣之。何如告寸八。

故字、舊本に舌と書るは誤なり、今は拾穂本に従つ、○何如告寸八は、告しや如何にありしといふ意なり、何如の言を、下に置いて心得べし、いかにやうに告しや、といふ意にきよては、甚わろし、源氏物語眞木柱に、かきたれてのどけき頃の春雨に、ふる里人をいかにしのぶや、とあるも、しのぶやいかに、といふ意にて同じ、告寸八は、告しやといふ意なり、かやうに、しやといふ意なる所を、きやと云は、古歌の格なり、三卷に、雨爾零寸八、四卷に、夢所見寸八、十卷に、妹等所見寸哉などあるも、同じことなり、○歌意は、奈良思の岳のほととぎすに、云々言傳をあつらへて告やりしを、其處に至りて、我言の如く、告しやいかに、きかまほし、と問やりたるなり

大伴家持。攀橘花。贈坂上大嬢。歌一首并短歌。

伊加登伊可等。有吾屋前爾。百枝刺。於布流橋。玉爾貫。五月乎近美。安要奴我爾。
花咲爾家里。朝爾食爾。出見每。氣緒爾。吾念妹爾。銅鏡。清月夜爾。直一眼。令觀
麻而爾波。落許須奈。由米登云管。幾許。吾守物乎。宇禮多伎也。志許霍公鳥。曉之。
裏悲爾。雖追雖追。尙來鳴而。徒。地爾令散者。爲便乎奈美。攀而手折都。見末世
吾妹兒。

伊加登伊可等云々は、稻掛大平が考に、伊追之可等待吾屋前爾、とありしを、かやうに誤れるなるべしといへり、さもあるべし、○安要奴我爾は、(本居氏、この安要奴を、不交と解たるは、誤なり、交は阿間にて、假字も異なり、橘の玉に阿陪貫などよめるあへと、思ひ混ふべからず、阿要は、本草の實のなることにて、奴は、いはゆる畢ぬなり、我爾は、我爾爾のつゞまりたるにて、むこが

ね、后がねなどいふがねと同意にて、言の意は、豫て設くるよしなり、されば實になるべき設にかねて花の咲る、といへるなり、十卷に、秋づけば水草の花の阿要奴蟹おもへどしらすたどにあはざれば、とあるは、その設にかねて咲たる花の、實になるべく思へど、といへるにて、戀の成をたとへたるなり、十八橋の長歌に、安由流實波多麻爾奴伎都追、ともあるを以て、安要は、實になることをいへり、といふことを、しるべし、安要、安由と活用く言なりといへり、安要を交とする説の非なるよしを辨たるはよし、安要を、水草の實のなることといひ、我爾は、我爾爾のつゞまりたる詞とせるは、ひがことなり、なほ次に云む、荒木田氏、豊後國佐伯の書生柴田三満がいひけるは、西國にて、菓の類の梢に在るを、落し取るをあやすといひ、おのづから落るをあゆるといふ、すべてものゝ落こぼるゝをいふ、といへり、是古言なり、今血をあやすといふも、こぼるゝ意なり、安要奴がに花咲にけり、とあるは、こぼるゝ程に花咲たるなり、十卷に、水草の花の阿要奴蟹も同じ、十八に、阿由流實は多麻にぬきつ、云々、とあるも、落たる實は、玉に貫つゝ手に纏なり、といへり、此説によりぬべくおぼゆ、さて我爾は、(本居氏の、我爾爾の切りたるにて、豫になりといへるは、いかゞなり、我爾と我爾とは、もとより異なる言なり、さるはまづ、我爾てふ言は、古歌にあまたよみたれども、我爾爾といへるは一もなくして、みな我爾とのみいへり、我爾爾の切ならば、我爾爾と云るもあるべきことなり、さて又我爾と我爾とは、つかへる様もかはりたり、なほ次に引歌どもを考へて、其差別を知べし、)ばかりにといふが如し、安要奴我爾は、あえなむ許にの意なり、四卷に、吾屋戸之暮陰草乃白露之、消蟹本名所念鴨、又道相而咲之柄爾零雪乃消者消香二戀云吾妹、此卷に、秋田刈借廬毛未壞者鴈鳴寒霜毛置奴我二、十卷に、音之干蟹來喧喜目、十三

に、海處女等、纒有領巾文光蟹手二卷流玉毛湯良羅爾、十四に、武路我夜乃都留能都追美乃那利奴賀
爾古呂波伊傲杼母伊未太年那久爾、(十卷に、今朝去而明日者來牟等云子鹿丹、且妻山丹霞霏、と
ある、鹿丹は誤字と見ゆ、)これら、けぬ我爾は、消なむ許にの意、音のかるがには、音のかれなむ
許にの意として、よくきこえたり、(餘もみな、此定に心得てよくきこゆ、これらを豫にの意とし
て、けぬがにもとなおもほゆるかもは、けぬべき豫ての設に念ゆる意とし、音のかるがには、聲の
かるべき豫ての設になく意としては、通ゆべからず、これにて、我爾と我爾とは、差別あること分
明なるをや、)これらにて考るに、この安要奴我爾を、落こほれなむばかりにの意とせむこと、さも
あるべし、花のあまりに繁く盛に咲たれば、枝に持かねて、落こほれむとするばかりなるを、いふ
なるべし、さて因に、我爾の言をいはむ、我爾は、其料にといふ意の言なり、この言の本は、之根
てふ義(即十卷には、之根とかけり、)にて、その根は、基の意にて、何にまれ、その基を開る謂
にて、之根とは云なり、(かたりつぐがねは、後世にかたりつぐべき、その基を開、おく意なり、故お
つるところは、かたりつぐが料に、といふことにきこゆるなり、)三卷に、丈夫之弓上振起射都流
矢乎後將見人者語繼金、四卷に、佐保河乃涯之官能小歷木莫刈烏在乍毛張之來者立隱金、五卷
に、余呂豆余爾伊比都具可爾等、十卷に、梅花吾者不令落青丹吉平城在人來管見之根、又、橘之
林乎殖霍公鳥常爾冬及住度金、又朝露爾染始秋山爾鍾禮莫零在渡金、又、足曳之山田佃子
不秀友繩谷延與守登知金、又、秋都葉爾爾寶傲流衣吾者不服於君奉者夜毛着金、又、雪寒三咲者
不開梅花縱此來者然而毛有金、十二に、里人毛謂告我爾縱咲也思戀而毛將死誰名將有哉、十七に、
伊未太見奴比等爾母都氣牟於登能未毛名能未母伎吉底登母之夫流我爾、十八に、白玉乎都々美氏夜

良那安夜女具佐波奈多知婆奈爾安倍母奴久我爾、十九に、大夫者名乎之立倍之後代爾聞繼入毛可
多里都具我爾、これらかたりつぐがねは、語り繼が料にの意、立隱金は、立隱る、料にの意なり、
(餘もみなこの定なり、)古事記仁德天皇條に、美淤須比賀泥、これも同じ、○氣緒爾吾念妹爾、十
二に、氣緒爾吾念君者鷄鳴東方坂乎今日可越覽、○落許須奈由米登云管、上に、霞立春日之里
梅、花山下風爾落許須莫湯目、とある處に云るを、考合へし、○宇禮多伎也は、慨哉なり、十卷に、
慨哉四去霍公鳥云々、古事記八千矛神御歌に、云々宇禮多久母那久那留登理加云々、書紀神武天
皇卷に、慨哉此云于黎多乘伽夜神樂歌に、きりぎりすのねたさうれたさや云々、など見ゆ、○志許霍
公鳥は、志許は、罵辭なり、ほととぎすの、橘の花をふみちらすを、惡み罵ていへるなり、○地爾
令散者は、九卷に、宇能花乃開有野邊從、飛翻來鳴令響、橘之花乎居令散、云々、とよめり

反歌。

望降。清月夜爾。吾妹兒爾。令觀常念之。屋前之橘。

望降とは、望は十五夜なり、満月をもち月といふより、十五日を、もちとも、もちのひとも云、十
五日夜をもちのよと云り、もちは満なるべし、降はくだる意にて、十五夜より已後を云べし、○歌
意は、妹と共に居て、あくまで見愛ることはならずとも、十五夜已後の清月夜に、たゞ一目ばかり
なりとも見せむと思ひしに、それさへかなはねば、せむ方なしに、攀折て參らする、この吾庭の橘
ぞ、となり

妹之見而。後毛將鳴。霍公鳥。花橘乎。地爾落津。

將鳴は、ナカナムと訓て、奈武は希ふ意なり、十卷に、默然毛將有時母鳴奈武日晚乃物念時爾鳴管
本名、とあるに同じ、○落津は、チラシツと訓べし、○歌意は、妹が見て後に鳴ば鳴なむ、いまだ
妹に見せもせぬ前に來鳴て、花橋をふみて地にちらしつるは、うれたき醜霍公鳥ぞ、となり

大伴家持。贈紀郎女歌一首。

紀郎女は、紀女郎なるべし、○歌の上、舊本に作字あるはわろし、目錄になきぞよき

瞿麥者。咲而落去常。人者雖言。吾標之野乃。花爾有目八方。

歌意は、なでしこは散失ぬ、さぞくやくしく思ふらむ、と人はいへど、そのなでしこは、嗚呼わがし
めゆひし花にてあらむやは、さらにわがものにてはあらぬをや、と云るにて、是は契りし女の、心
がはりしたるよしいひたるに、吾はさは契らざりしと、郎女にことわりたる意をたとへたるか、三
卷に、大伴駿河麻呂、梅花開而落去登人者雖云吾標結之枝將有八方、大方おなじ歌なり

萬葉集古義八卷之下

秋雜歌

岡本天皇御製 歌一首。

岡本天皇は、舒明天皇なり

暮去者。小倉乃山爾。鳴鹿之。今夜波不鳴。寐宿家良思母。

小倉乃山は、九卷に、龍田の山の瀧の上のをくらの嶺、とよめる、をくらの嶺は、この小倉の山にて
侍らむ、と契沖云り、○大御歌意は、暮べになれば、いつも小倉の山にて、妻戀しつゝ鳴鹿の今夜
は鳴ず、妻を得て安く宿にけるらし、嗚呼さても、これまで幾夜か辛苦して、妻を求めむ、となり、
仁徳天皇紀云、三十八年秋七月、天皇與皇后、居高臺而避暑時、每夜自兎餓野有聞鹿鳴、
其聲寥亮而悲之、共起可憐之情、及二月盡以鹿鳴不聆、爰天皇語皇后曰、當最夕而鹿
不鳴共、何由焉云々、○此大御歌、九卷初には、第三句、臥鹿之として載たり、さてそこには、
雄略天皇のとして、後に岡本天皇御製と註せり

大津皇子御歌一首。

經毛無。緯毛不定。未通女等之。織黃葉爾。霜莫零。

織黄葉とは、契沖云、錦といふべきを、その錦はもみちのことなれば、おしてのたまへるなり、懐風藻云、七言述志、(大津皇子、四首之中第三、)天紙風筆畫雲鶴、山棧霜杼織葉錦、今の歌此後の句とおなじ、いづれをかさきにつくらせ給ひけむ、第七、みよしぬのあをねがみねのこけむしろたれかおりけむたてぬきなしに、第十三に、山の邊のいそしの御井はおのづからなれるにしきをはれる山かも、古今集に、霜のたて露のぬきこそよわからし山のにしきのおればかつちる、立田川にしきおりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして、などあり、○御歌意かくれたるところなし

穂積皇子御歌二首

今朝之旦開。雁之鳴聞都。春日山。黄葉家良思。吾情痛之。

吾情痛之、皇極天皇紀に、四年六月、云々、古人大兄、見走入私宮、謂於人曰、韓人殺鞍作臣、吾心痛矣、即入臥内、杜門不出、○御歌意は、今朝の旦開に、初雁の鳴てわたる音を聞つ、又我心も秋としるく、何となくかなしくいたし、これにて思へば、春日山も、この頃は色付にけるらし、となり

秋芽者。可咲有良之。吾屋戸之。淺茅之花乃。散去見者。

淺茅之花は、契沖云、つばななり、つばなは、春の末に穂に出て、薄のやうに見え、夏野にも猶ちらず有が、秋萩もや、咲ぬべき頃にちるを、かくはよませ給ふなり、心をつけて、つばなのやうをみたる人、この御歌にまことあることを知べし、○御歌意かくれたるところなし

但馬皇女御歌一首

一書云。子部王作。

皇女を、舊本に皇子と作るは誤なり、○子部王は、傳未詳ならず、十六に、兒部女王、とあるに同じきか

事繁。里爾不住者。今朝鳴之。鴈爾副而。去益物乎。

不住者(不字、舊本には下に誤、今は活字本に従)、は、住むよりはの意なり、○御歌意かくれなし、世間の繁務をいとはせ給へるとき、よみ賜へるなるべし

山部王 惜ニ 秋葉一歌一首

山部王は、契沖、山部王にふたつあり、そのひとつは、天武天皇紀上(元年七月)云、時近江命山部王、蘇我臣果安、巨勢臣比等、率數萬衆、將襲不破、而軍于大上川、濱、山部王、爲蘇我臣果安、巨勢臣比等見殺、由是亂、以軍不進、乃蘇我臣果安、自犬上返刺頸而死、此山部王は系圖を知らず、今ひとり、桓武天皇いまだ諸王にておはしましける時の御名なり、續紀云、延暦四年五月乙未朔丁酉、詔曰、云々、又臣子之禮、必避君諱、比者先帝御名、及朕之諱、公私觸犯、猶不忍聞、自今以後宜並改避、於是改姓白髮部、爲眞髮部、山部爲山、此中に今のつゞき、初の山部王にあらず、桓武天皇の御歌なり、いまだ山部王にて、經させ給へる位階は、稱徳天皇紀云、天平神護二年十一月、無位山邊王授從五位下、光仁天皇紀云、寶龜五年三月、兼駿河守、

十年六月、從五位上山邊王爲大膳大夫、十一年正月、正五位下、三月、任備前守、天應元年十一月、正五位上、とありと云り、今按に、此集は、天平寶字三年までしるされたれば、桓武天皇とせむこと、時代いたく後れさせ賜へり、これを天平寶字の初年に製せたまへる御歌としても、平天神護二年叙爵ありしより逆推するに、寶字元年まで凡十年におよべり、又此は但馬皇女御歌の次、長屋王歌の上に入たるを見れば、此歌も、和銅より天平年間に、よまれたる歌と見えたるをや、さればなほ二の王にはあらで、同名別人なるべし

秋山爾。黃反木葉乃。移去者。更哉秋乎。欲見世武。

黃反（反は、變と書るに同じ、反變集中に通用たり、略解に、反は變の省文か、と云れどあらず、）は、ニホフと訓べし、○移去者は、ウツリナバとよむべし、○歌意かくれなし

長屋王歌一首。

味酒。三輪乃祝之。山照。秋乃黃葉。散莫惜毛。

三輪乃祝之は、本居氏云、ミワノイハヒノと訓べし、いはひの山とは、神を齋まつる山といふことなり、○散莫惜毛は、散むことの、さても惜や、といふ意なり、○歌意かくれなし

山上臣憶良。七夕歌十一首。

七夕の事、皇朝にて、孝謙天皇、天平勝寶七年にはじまれるよし、公事根源に見えたるは、乞巧奠

の行はれし濫觴をいはれしにや、牽牛織女の事は、それより、なほさきにさだせしなり、但集中に七夕の事を、天地之別、時由云々、など多く云るは、その起れることの舊しきを、神代になぞらへていへるのみにて、實に神代よりあり來しことと思ふは、ひがことなり、牽牛織女の事は、もはら漢國にならへることなるを、集中の歌によりて、神代より皇朝にあり來し事なり、といふ説もきこゆるは、さらにあらぬことなり、その本はもろこしにて、桂陽成武丁と云し人のいひそめしを、彼國の詩人のともがら、言ぐさにして、かにかくつくり、又婦女の巧を乞事などのあるを、皇朝にうつせるものなり、からぶみ事物紀原に、吳均續齊諧記曰、桂陽成武丁、有仙道、忽謂其弟曰、七月七日、織女當渡河、暫詣牽牛、至今云、織女嫁牽牛、周處風土記曰、七夕、灑掃於庭、施几筵、設酒果於河鼓織女、言二星神會、乞富壽及子、歲時記曰、七夕、婦人以綵縷穿七孔針、陳瓜花以乞巧、則七夕之乞巧、自成武丁始也、とあり、又一年に一度會と云ことは、荆楚歲時記に、天河之東有織女、天帝之子也、年年織杼勞役、織成雲錦天衣、天帝憐其獨處、許嫁河西牽牛、即嫁後遂廢織、天帝怒責、令歸河東、但使其一年一度相會、と見えたり、さて又烏鵲の羽をならべて、橋を成と云事も、もろこしの書に此かれ見えたれど、皇朝にて、古くはそのさだなし、獨七夕祭の式は、公事根源、江家次第等に、委しく見えたり

天漢。相向立而。吾戀之。君來益奈利。紐解設奈。

歌意は、天漢の河門に立て、牽牛の方に相向ひて、今か今かと戀待し、其君が今來座なり、吾下紐を解設けむ、いざさらば、と急ぎ進めるなり、十卷には、天漢川門立吾戀君來奈里紐解待、と

てあけたり

〔右養老八年七月七日。應令作之。〕

八年は、續紀を考るに、元正天皇養老七年九月に、神龜出、八年二月、改號神龜、とあれば、こゝは七年を誤れるか

久方之。天漢瀨爾。船泛而。今夜可君之。我許來益武。

我許は、わがもととなり、妹許、君許、又人の許などいふに同じ、○歌意は、天の河瀨に船を泛べて、今夜ぞ吾待戀し牽牛の君が、わが許に來座むとなり

〔右神龜元年七月七日夜。左大臣宅作之。〕

左大臣は、長屋王なり

牽牛者。織女等。天地之。別時由。伊柰牟之呂。河向立。意空。不安久爾。嘆空。不安久爾。青浪爾。望者多要奴。白雲爾。滯者盡奴。如是耳也。伊伎都枳乎良牟。如是耳也。戀都追安良牟。佐丹塗之。小船毛賀茂。玉纏之。眞可伊毛我母。朝奈藝爾。伊伎渡。夕塩爾。伊許藝渡。久方之。天河原爾。天飛也。領巾可多思吉。眞玉手乃。玉手指更。餘。宿毛寐而師可聞。秋爾安良受登母。

牽牛織女の事は、前註にことわれるが如し、和名抄に、牽牛、爾雅註云、牽牛一名河鼓、和名比古保之、又以奴加比保之、織女、兼名苑云、織女牽牛是也、和名太奈八太豆女、とあり、かくて彦星と

いふは、漢國にならひて、二星の聚合の事を、此方にて歌に作ことゝなれる、其時に新に設けて呼ぶ稱にして、固より皇朝にて、しかいひし星ありとせしことは聞えず、棚機津女といふは、かの二星のことに就て、新に設けて呼ぶ稱にはあらず、神代に、天棚機姫神といふあり、この神は、高皇産靈大神の御子、萬幡豊秋津師比賣命、一名を栲幡千千姫萬幡姫命と申すを、天棚機姫命とも稱したりと思ふよしあり、(前にいひたる如く、漢土の俗説に、織女を天帝の子といひつたへたるは、皇産靈大神の御子、天棚機姫神を、ほゞゆがめて、いひつたへたることなるべくおもはるゝを、今世の心狭き儒者などは、かゝることはとりあげぬことなれど、俗説なればとて、むげにゆるなくしてはいふまじければ、古人は、かの國にて織女といへるは、まさしく、天棚機姫神に符合るをしりて、タナバタツメといへるなるべし、もしさらずして、新に設けて施し稱ならむには、織女星なれば、ハタオリボシなどやうにこそ、いふべきことなれ、なほ牽牛織女の事は、別に許悉に考へてしるせるものあれば、こゝには略きて、その大かたをいへるのみなり、○天地之別時由は、其はじまれる事の舊しきを、神代になぞらへて云るのみにて、實に神代より來し事にはあらざること、上に云るが如し、○伊柰牟之呂(牟字、舊本に宇に誤、今改)は、枕詞なり、稻席なり、袖中抄に、田舎には、おのづから稻を敷こと有ば、田舎をば、稻敷ともいひ、いなむしろともいふなり、公實卿詠云、これにしく思ひはなきを草枕旅にかへすはいなむしろとや、と云るが如し、さて河とつゞくは、門人南部嚴男が強といふ意にとりなして續つらむ、稻席は、ことに強ばれるものなればなり、と云り、さもあるべし、○意空嘆空は、思ふこゝち、嘆くこゝちと云むが如し、○不安久爾は、安からぬことなるをの意なり、かくばかりこゝち安からぬことなるに、何とかせむとい

ふ義を含めたるなり、○青浪爾望者多要奴は、遙々の蒼浪を望み見やるに、遠くして見届かねば、目のつきたるをいふならむ、○白雲爾滯者盡奴も、天雲をふりさけ望むに、戀の涙のかぎりの盡ぬると云ならむ、○佐丹塗之小船毛賀茂は、佐は、眞に通ふ美稱にて、丹にぬり色どりたる舟も願といふ、三卷に、山下赤乃會保船、十三に、赤會明舟、とよみ、十九には、こゝの如くよみたり、又十六に、赤羅小船、ともよめり、さていかで、さやうの舟もがなあれかし、となり、○玉纏之眞可伊毛我母は、古は何によらず、玉をまきてかざりとせしこと多ければ、かい、かちの類にも玉を纏りしなるべし、さていかで、さやうの榜もがなあれかし、さらば秋ならずとも、常に漕わたりて相見むをの意なり、舊本一云、小棹毛何毛、と註せり、いづれにもあるべし、○伊可伎渡は、伊は、そへ言、下の伊許藝の伊に同じ、可伎は、搔にて、水を搔ことなり、○夕塩爾(舊本註に、一云、夕倍爾毛とあるはわろし)は、河に塩は叶はざれども、この歌すべて、天漢を海のごとくによみなして、青浪といひ、眞かいてもといひ、あさなぎになどよみなしたり、素二星の天漢をわたると云こと妄誕なれば、信るにたらず、故歌によむ人も、自己が心まかせに、さまざまによみなしたりと見えたり、○天飛也領巾とは、天を飛行料の領巾といふなるべし、也は、天知也、高知也などいふ也に同じく、助辭なり、領巾は、織女の領巾なり、さて領巾は、すべて、上代の女の裝束なるよし、既く五卷に云るが如し、さて此に天飛といひ、十卷に、織女之天津領巾、とよみ、續後紀十九、興福寺僧等が長歌に、三吉野爾有志熊志禰、天女來通旦、其後波蒙譴天、昆禮衣着、巨飛爾支度云々、とあるなどを併思ふに、天女といふもの、虚空飛行には、必この領巾を着るよし云りとおぼえたり、○眞玉手乃云々、古事記八千矛神御歌詞をとれり、五卷にもよめり、○餘多、

多字、舊本になきは脱たるなり、今は岡部氏の考によりて補へつ、アマタ。ピとよむべし、○宿毛寐而師可聞、舊本に、一云、伊毛左禰而師加、と註せり、いづれにもあるべし、○秋爾安良受登毛、舊本、一云、秋不待登毛、と註せり、いづれにもあるべし

反歌。

風雲者。二岸爾。可欲倍杼母。吾遠孀之。事會不通。

風雲者云々は、たゞ風と雲とは、彼方此方の兩岸に往來ども、といふなり、神代紀天孫降臨條に、遺疾風、擧戸致天、と見えたり、其即疾風を使に差たること、きこゆ、(契沖、河圖帝通紀云風者天地之使也、文選陸士衡擬古詩、遊子眇天末、遠期不可尋、驚飈裏反信、歸雲難寄音、第廿に、家風は日にけにふけどわぎもこがいへごともちてくる人もなし、みそら行雲も使と人はいへど、家づとやらむたづきしらずも、などあり、といへり、風を使とせし事は、なほこれから見えたれど、此歌にては、たゞまことの風と雲とを云るのみにて、使のよしには非ず、使ならば、事會不通とはいふまじきなり、)○遠孀之、舊本に、一云、波之孀乃、と註せり、遠孀は遠方に在よしなり、波之孀は愛孀なり、○歌意は、天河の河一隔れるのみにて、常に風と雲とは、彼方此方の兩岸に往來へども、秋にあらねば、相見ることとはさらにて、使を遣來すこともかなはねば、わが遠孀の言傳ぞ、通ひ來ぬ、となり

多夫手二毛。投越都倍伎。天漢。敝太而禮婆可母。安麻多須辨奈吉。

多夫手二毛、礫にてもと云むが如し、たぶては、つぶてと云に同じ、言意は、手棄なるべしと云り、これは天の川の渡の、いくばくもあらずて、近きよしにいへり、さて二字はもと乎なりけむを、手と混へて多夫手々毛と書しを、つひに二に誤れるなるべし、と別府信榮は云り、然する時は、ダブテヲモと訓べし、○安麻多須辨奈吉は、甚じくすぐれて、爲む方のなきといふなり、安麻多は、甚じく殊にすぐれたるをいふ、かやうの處に用ひたるは、七卷に、鳥自物海二浮居而奥津浪驂乎聞者數 悲哭、十二に、草枕客去君乎人目多袖不振爲而安萬田悔毛、などある是なり、○歌意は、天河の渡は、いくばくの間もあらず、礫を投ても、彼方の岸に至り届くべく、甚近くはあれども、容易く渡り行事のかなはねばにや、かくへだより居て、甚じくすぐれて、爲む方なく思ふらむ、さても戀しく思はるゝ事哉、となり

〔右天平元年七月七日夜。憶良。仰觀天河二作。一云。帥家作。〕

河の下、舊本作字を脱せり、○帥は旅人卿なり

秋風之。吹爾之日從。何時可登。吾待戀之。吾曾來座流。

君は牽牛をさす、○歌意かくれたるところなし

天漢。伊刀河浪者。多多禰杼母。伺候難之。近此瀨乎。

伊刀は、甚なり、者の下にめぐらして聞べし、河浪は甚は雖不立、といふなり、○歌意は、天河の河波は、いたくは立はせねども、たわやすくわたることを得ねば、牽牛のもとに侍従ひがたし

この近きわたり瀨なるものを、といふならむ

袖振者。見毛可波之都倍久。雖近。度爲便無。秋西安良禰波。

歌意かくれたるところなし、さきにたぶてにも投こしつべき、といへるごとく、間近きわたり瀨をいへり

玉蜻蜒。髣髴所見而。別去者。毛等奈也戀牟。相時麻而波。

毛等奈也戀牟は、俗にむざくこひしう思はむ、といふ意なり、○歌意は、たゞほのかに相見えたるばかりにて、心だらひに、こまやかに相語ふ間もなく、こなたかなたに相別れなば、又の秋になりて相見む時までは、常にむざく戀しく思ひて過さむか、となり

〔右天平二年七月八日夜。帥家集會。〕

牽牛之。迎孀船。己藝出良之。漢原爾。霧之立波。

歌意は、天河原にきりのたてるは、彥星の織女を迎る舟をこぎゆくさわきに、水霧立るならむ、といふなるべし

霞立。天河原爾。待君登。伊往還程爾。裳欄所沾。

伊は、そへ言なり、○歌意は、天の河原に出居て、牽牛の君が來座むを待とて、此處に御船泊む

か、彼處に泊むかと、河上に行、河下に行など、かなたこなたに行かまひ待間に、裳のすそぬれひたりぬる、となり

天河。浮津之浪音。佐和久奈里。吾待君思。舟出爲良之母。

浮津之浪音、岡部氏云、浮洲と云へば、浮津ともいはむか、されどなみといへるは、おぼつかなし、仍て思ふに、浮は御の誤にて、ミツノナミノトとよむべく覺ゆ、○歌意は、天河の河津の浪音が、常にまさりて、さわくくと動く音すなり、わが一すぢに待居る牽牛の君が、今舟發をして漕來賜ふ故に、かくさわくにてあるらし、さてもはやく、此方に泊賜へかし、となり

太宰 諸卿大夫并官人等 宴 筑前 國 蘆城驛家一歌二首。

官人(官字、舊本宮に誤れり)は、大夫よりは下の官職の人ゆゑに、并官人と云り、岡部氏云、諸王諸臣百官など書も、諸臣は五位以上、百官は六位以下にあたり、其官省にて官人と書は、かろきものを云例なり、○蘆城驛家は、筑前國御笠郡にあり 十二に、惡木山とあるも同じ、〔頭註、前名寄云、御笠郡蘆城、太宰府の南にあり、米の山といふ所をこえ通しとなむ、〕

娘部思。秋芽子交。蘆城野。今日乎始而。萬代爾將見。

歌意かくれたるところなし

珠匣。葦木乃河乎。今日見者。迄萬代。將忘八方。

珠匣は、まくら詞なり、(契沖、玉くしけ明といふ心に、あとといふひともじに云かけたり、あくとも、あけとも、あかむとも、あきとも、下はうごけば、上は主、下は伴なるゆゑに、主にかゝれば、おのづから伴を攝するなり、と云り)按に、此は葦木を、淺笥の意にとりてつゞけたるなるべし、佐氣と志伎と音通へり、さて笥は、古麻笥、飯笥、蘭笥、大笥、など云類の名あまた見えて、其種々あるが中にも、櫛笥は殊に淺き器なるよしもて、櫛笥の淺笥と云意に續けたるならむとは思はるゝなり、○今日見者はケフミテバと訓べし、○歌意は、蘆城の川の勝景を今日見てあらば、今より行さき萬代の後までも、このおもしろきけしきのわすれむやは、忘るゝ世はいつまでもあるまじ、さてもおもしろのけしきや、となり

右二首作者未詳。

笠朝臣金村。伊香山 作歌二首。

伊香山は、近江國伊香郡にあり、神名式に、伊香郡伊香具神社みゆ、契沖云、第三に、金村の鹽津山のうたあり、角鹿の歌なり、越前へ下られける時、今の歌も道にてよまれたるか、もしは別時の歌歟

草枕。客行人毛。住觸者。爾保比奴倍久毛。開流芽子香聞。

爾保比奴倍久毛は、色に染べくもといふが如し、○歌意は、旅行人の、かりそめにも行觸たらば、衣に着て、其色に染べくもさけるはぎの花哉、さてもく見事に咲たる花や、となり

伊香山。野邊爾開有。芽子見者。公之家有。尾花之所念。

公といへるは、本郷にさす人ありてよめるなり、○歌意は、この伊香山の野邊に咲たる、はぎの花を見れば、本郷なる某公の家の庭にある、尾花のさまの思ひ出されて、一すぢに家の方戀しく思はるゝ、となり

石川朝臣老夫歌一首

老夫は、傳未詳ならず、契沖云、續紀云、文武天皇二年秋七月己未朔癸未、直廣肆石川朝臣小老爲美濃守、此小老の子などにや

娘部志。秋芽子折禮。玉梓乃。道去褻跡。爲乞兒。

折禮は、本居氏、折那を誤しと見ゆ、といへり、折那は、折武を急に云るなり、○道去褻跡は、道すがら得たる家づとなり、○歌意は、道すがら得給へる家づとを賜へと乞む、其女の爲に、女郎花、秋はぎを折て行む、いざさらば、と急ぎ進めるなり

藤原宇合卿歌一首

我背兒乎。何時曾且今登。待苗爾。於毛也者將見。秋風吹。

何時曾且今登は、何時か來座む、今か來座むと、といふ意なり、何時曾は、何時かと云むが如し、○

於毛也者將見は、略解に、兩說擧たる中に、於毛也は、面輪の意かといへるはしかるべし、(その一説に、於は聲の誤、也は世の誤にて、聲毛世者將見あきかぜのふけなるべし、といへるは、いみじき謾言なり、いかにといふに、風音の人の問來にまがへるをば、厭ふこそ人の常情なれ、其を風の音もせば、思ふ人の來しかと見む、其がために秋の風ふけと、風にあつらへつくべきことかは、さて和と也と通ふ例多し、十一に、秋柏潤和川邊云々、とある歌を、其下に、重出たるには、閨八河邊云々、と書る、これ通ふ證なり、又この閨八を、閨丸の誤として、ウルワとよむもわろし、又十三に、少子等率和出將見云々、神武天皇紀に、頭八咫鳥鳴之曰、天神子召汝、怡昇過怡昇過(過音和)云々、などあるいざわは、全イザヤと云に同じ、又十六能登國歌に、新羅斧墮入和之云々、浮出流夜登將見和之云々、又眞奴良留奴和之云々、などある和之は、愛也之、縦惠也之などの也之と同言とおもはるゝに、なほ正しく面輪を於毛也と云るは、十八に、於毛夜目都良之美夜古可多比等、と云る是なり、この於毛夜を、面彌の意とするは非ず、○歌意は、わがせこは、いつか來まさむ、いまか來まさむ、と待につれて、秋風のそよくと吹來るは、もはや來まさむしるしなるべし、と云るなり、思ふ人の來むとする前表には、風のそよくと吹來ると云ならはしのありしならむ其由は、四卷、君待登君戀居者我屋戸之簾、動秋風吹、といふ歌の註に云り

緣達師調一首

緣達師は、傳未詳ならず、契沖云、緣といふ僧にて、師は、法師の心なるべし
暮相而。朝面羞。隱野乃。芽子者散去寸。黃葉早續也。

本二句は、隱野を云む料の序なり、一卷に、暮相而朝面無美隱爾加氣長妹之廬利爲里計武、とあるに全同じ、○也は、徒に添て書るなり、○歌意は、隱野のはぎの花は散失にけり、早くその花に續きて、諸木の木葉黄變して、野邊の興を絶しむる事なかれ、となり

山上臣憶良。詠秋野花歌二首。

歌字、舊本にはなし、目錄にはあり

秋野爾。咲有花乎。指折。可伎數者。七種花。一其

指は、和名抄に、指手指也、和名由比、俗云、於與比、とあり、(俗云とあるはいかゞ)士佐日記に、今日いくか廿日三十日とかぞふれば、於與比もそこなはれぬべし、源氏物語空蟬に、於與比をかゞめて、とをばたみそよそなどかぞふるさま、いよのゆげたもたどくしかるまじう見ゆ、などあり、○可伎數は、十七に、可伎加蘇布敷多我美夜麻、とあり、可伎は添いふ言なり、打といふに同じ、古事記、須勢理毘賣命の御歌に、宇知微流斯麻能佐伎邪伎、加岐微流伊蘇能佐岐涙知受、とある加岐に同じ、(これに打見、搔見と對言るにて、打と搔と同じきことしるし)本居氏云、打は、常にひるく萬に云ひ、搔は、たゞ手して爲事にのみ云が如くなれども、打も本は手して爲事なれば、同じことなるべし、搔曇搔絶などは、手の事ならねど添いへり、○歌意かくれたるところなし、夫木集に、夏野をばおなじ縁に分しかど秋ぞ折つる七草の花

芽之花。乎花葛花。瞿麥之花。姫部志。又藤袴。朝貌之花。二其

旋頭歌なり、(頭註、契沖、薄は、鳥けだもの、の尾に似たれば、尾とは異名を付たる也、と云り、今云、こそ行めもの、ふのなとこをみなの花にほひ見に、と云は、花を男花とし、女郎花を女花とせし意とおぼゆ、尾花は葉など男々しげなる故に、男花と云べく、をみなべし、のなよびたるは、女花とすべし、是によれば、尾と書は借字にて、男花なるべし、とあるはあたらす、かの廿卷) ○歌意かくれなし、契沖云、此歌は、十六に、詠二双六頭二歌に、一二の目のみにあらず、五六、三四さへ有双六のさえ、此歌とおなじ體なり、只數などのあるものを、ありのまゝによくいひのぶるなり

天皇御製歌二首。

天皇は、契沖云、これは聖武天皇なり、第四にも、天皇思酒人女王御製歌一首、八代女王獻天皇歌一首、此外獻天皇、といふ歌三首あり、此卷下冬歌中にも、天皇御製歌あり、第六にもあり、是家持のえらばれたる中にも、その時のみかどなるゆゑに、かくはしるせり、孝謙天皇御治世にいたりて、えらびつがれたるには、太上天皇、といへり、心をつくべし、第三卷に、天皇御遊雷岳之時、柿本朝臣人麿作歌、天皇賜志悲姬御歌、これは古事記にまかせたりと見えたり

秋田乃。穗田乎雁之鳴。闇爾。夜之穗杼呂爾毛。鳴渡可聞。

本二御句は、秋の穂に出たる田を刈、といひかけたり、田を刈時に來る鳥なる故に、つゞけさせ給へり、穗田は、穂に出たる田を云、四卷、十卷などにも見えたり、○闇爾は、クラケクニと訓べし、闇くあるにといふほどの意なり、今の心にていはゞクラケクニといふべき所を、かく云は古風の言格なり、既く一卷下に委云り、○夜之穗杼呂は、夜の離にて、未闇きと、明るなるとの間を云、此

言のこと、既に四卷に具云り、披見て考べし、○大御歌意は、いまだ夜もあけはなれざれば、猶くらくあるに、田面をさして初鴈の鳴て渡る哉、さてもなつかしの聲や、となり

今朝乃旦開。雁之鳴寒。聞之奈倍。野邊能淺茅會。色付丹來。

大御歌意かくれたるところなし

太宰 帥大伴 卿 歌二首。

吾岳爾。棹牡鹿來鳴。先芽之。花孀問爾。來鳴棹牡鹿。

先芽は、初はぎなり、榛を前榛といふも同じ、(サイイハリはサキハリなり、キをイといへるは、後の音便なり)○花孀問爾は、花を妻問にといふなり、ツマをすみてよむべし、花妻をとひにと云にはあらず、(しかるを、後世此歌によりて、はぎをやがて、鹿の花妻といふものところ得て、さる意によめる歌おほきは、わらふべし、現存六帖に、人はこぬ草葉のこの露の上にかたしき宿たる秋が花妻、とある類なり)鹿は芽子の咲ころ、その芽子原におきふしなどもするゆゑに、秋芽子を妻問と云ならはせり、はぎを、後に鹿鳴草と云も然り、〔頭註、歌袋、寶治二年百首に、正三位知家卿、人が花つま、と全く鹿心ば、萩が花つま〕とし給へる、いはいはれなし、備考、〕○歌意は、わがをる地の岳に牡鹿の來て鳴よ、これは初はぎのや、咲たれば、その花を妻問とて、來て鳴よ、となり

吾岳之。秋芽花。風乎痛。可落成。將見人裳欲得。

歌意は、わがをる處の岳の、秋はぎの花が、風がつよく吹故に散くなりぬるよ、いかで今の間に來て、見て愛む人もがなあれかし、となり

三原 王 歌一首。

三原王は、續紀に、元正天皇養老元年正月乙巳、授无位御原王從四位下、十月戊寅、益封、聖武天皇天平元年三月甲午、從四位下三原王授從四位上、九年十二月壬戌、從四位上御原王爲彈正、十二年九月乙未、治部卿從四位上三原王云々、十八年三月戊辰、以從四位上三原王爲大藏卿、四月癸卯、正四位下、十九年正月丙申、正四位上、二十年二月己未、從三位、孝謙天皇勝寶元年八月辛未、從三位三原王爲中務卿、同十一月丙辰、正三位、四年七月甲寅、中務卿正三位三原王薨、一品贈太政大臣舍人親王之子也、と見えたり、續後紀に、承和四年十月丁酉、右大臣從二位清原朝臣夏野薨、御原王孫、正五位下小倉王之第五子也、とあれば、夏野大臣の祖父なり

秋露者。移爾有家里。水鳥乃。青羽乃山能。色付見者。

移とは、草木の花を、先紙などに染置て、さていつにても、絹にうつし染る、それをうつしといへり、古よりしかするわざのありしならむ、○水鳥乃は、青羽といはむ料なり、○青羽能山は、青葉の山といふなるべし、さて水鳥乃と云よりのか、りは、羽とつゞき、うけたるうへにては、葉なるべし、上に、水鳥之鴨乃羽色乃青山乃、とよみ、廿卷に、水鳥乃可毛能羽能伊呂乃青馬乎、ともよめり、古事記垂仁天皇條に、爾出雲國造之祖、名岐比佐都美、飭青葉山而云々、新古今集に、立

よれば涼しかりけり水鳥の青葉の山の松の夕風、源氏物語若菜上に、身に近く秋やきぬらむみるま
まにあをばの山もうつろひにけり、とある所に、めとどめ給ひて、水鳥の青ばは色もかはらぬを萩
の下こそけしきことなれ、同夢、浮橋に、をのには、いとふかくしげりたる、あをばの山にむかひて
云々、などあり、みな青く茂りたる山を云、(地名にはあらず)○歌意は、青く茂りたる山の、うつ
ろひかはりて、色づくを見れば、秋露は絹にうつし染る、いはゆるうつしにてありけり、となり、
六帖に、しら露は、とて載

湯原王。七夕歌二首。

牽牛之。念座良武。從情。見吾辛苦。夜之更降去者。

從情は、牽牛の心よりも、まさりての意なり、○歌意は、夜の更ゆけば、今は程なく逢給らむ、と
思ひやりて見るわがこゝろは、とにかく物思し給ふらむ彦星のこゝろよりも、まさりてくるしとな
り、(六帖に、第三句、ことよりも、として載たるは、誤なり、)

織女之。袖續三更之。五更者。河瀬之鶴者。不鳴友吉。

袖續三更之は、(續にては、通難し)續は纏字の誤にて、ソデマクヨヒノなるべし、○歌意は、織女
の衣の袖を纏て、相宿する夜の曉は、天河の河瀬に住鶴の鳴て、夜の明るを告ずとも、縦や今夜ば
かりはさて有なむ、さらば曉に至るを知らずして、かく別のいそぎはすまじきに、となり、此歌は、
牽牛の心に擬てのたまへるなり

市原王。七夕歌一首。

妹許登。吾去道乃。河有者。附固緘結跡。夜更降家類。

附固緘結跡(固字、舊本には、目と作り、結字、一本にはなし)は、附は脚の誤にて、脚固は、ア
ユヒなるべしといへり、さて緘結跡は、本居氏、ナダストと訓べし、といへり、あゆひは足結にて、
袴をかゝけて、其を結固むる帯の類と見ゆ、七上に委云り、なだすは、契沖、正す意なるべし、とい
へり、雄略天皇紀歌に、阿遙比那陀須暮、とあり、○歌意は、織女の許にと行道筋の、天河の河道
にてあるなれば、其河を渉らむ用意して、足結をむすび正すとて、其間に早夜ぞ更にける、織女の
いかに待わぶらむ、となり、此も牽牛の心に擬へてのたまへるなり

藤原朝臣八束歌一首。

棹四香能。芽二貫置有。露之白珠。相佐和仁。誰人可毛。手爾將卷知布。

旋頭歌なり、○相佐和仁は、本居氏、物語書に、おほざふと云詞あり、これ此あふさわの訛れるに
て、其おほざふと云る詞の意と、あふさわと全同じ、と云り、十一に、開木代、來背若子欲云余相
狹丸吾欲云開木代、來背、とあり、物語書に云へるおほざふは、源氏物語帚木に、やむごとなく、
せちにかくし給ふべきなどは、かやうにおほざふなるみづしなどに、打置ちらし給ふべくも非ず、
關屋に、御心のうち、いとあはれに、おほし出ること多かれど、おほざふにてかひなし、薄雲に、
おほざふのすまひはせじとおもへる、おふけたしとはおほすものから、未通女に、此君たちの、す

こし人数にもおほしぬべからましかば、おほざふのみやつかへよりは、奉りてまし、玉髪に、おほざふなるは、こともおこたりぬべしとて、藤袴に、おほざふの宮づかへのすぢに、らうろうせむとおほしおきつる、若菜下に、今はかうおほざふのすまひならで、のどやかに行ひをもとなむ思ふ、柏木に、此頃は何事もおほされで、おほざふの御とぶらひのみぞ有ける、幻に、御獨寐に成ては、いとおほざふにもてなし給ひて、東屋におほざふならぬところにてすぐして、又も參らせむと聞えていざなふ、云々、これかれあるつらにておほざふにまじらはせむは、ほいながらむ、などやうに見えたり、大かた、又はなみくなどいふ意の處に用ひたり、○知布は、登伊布の約れる言なり、既く委云り、○歌意は、牡鹿の入立て、妻問する野のはぎの糸に、その牡鹿が貫置たる、露の白玉の愛たきを、誰人か、大かたなみくの事に思ひて、手に纏むといふぞ、誰も深く思ひ入てこそ、手にまかむといふなれ、さても愛たき露や、となり

大伴坂上郎女。晚芽子歌一首。

咲花毛。宇都呂(布)波(狀)。奥手有。長意爾。尙不如家里。

宇都呂の下、布字、舊本になきは、脱たり、○奥手有は、契沖云、いねのおそきをおくてといへば、よろづの草木も、おかれて花咲などするを、奥手といはむことさもあるべし、おもふに、おくてといふは、第九に、わぎもこはくしろにあらなむひだり手のあがおくの手にまきていなましを、此奥の手とよめる心なり、肘の袂よりおくにかくれたる所を、おくの手といふ、ながき心とつゞくるも、袖より出るところはみじかく、袖にかくれたる所は長ければ、奥手なるながき心とはよめるとぞ聞

えたる、世に秘藏する物を、常はかくしおきて、今はとあらむとき用むとするを、奥の手にたくはふるといふも、いにしへよりある詞残れるなるべし、(已上)今按に、稻に限らず、萬の草木の、世におくれて花咲などするを、奥手といふよし云るは、さることなれど、九卷なる歌を引るは、すこしいかゞなり、彼は、左手の吾奥手といひたれば、左を主としていへりときこえたり、もし契沖説のごとくならば、左右にかぎらず、袂よりおくにかくれたるところを、奥の手といふこと、きこえて、いかゞなり、そもく、古は、左手を奥手といひ、右手を邊手とぞいひけむ、さるは右の手は、事をなすによく利て、はしちかなれば邊といひ、左の手は、事をなすにおそくて、利にくければ、いつも後ならでは出さぬゆゑに、奥といへるなるべし、されば左を奥といひ右を邊といふは、人手をいふがもにて、それより何にても、左右を奥邊といひて、別てるにぞあるべき、二卷に、奥津加伊、邊津加伊、とあるも、船の左にぬけるを奥津權、右に貫るを邊津權といへりときこえたるよし、既く彼卷に註たる如し、古事記、伊佐那伎命禊祓條に、次於投棄左御手之手纏所成神名奥疎神、次奥津那藝佐昆古神、次奥津甲斐辨羅神、次於投棄右御手之手纏所成神名、邊疎神、次邊津那藝佐昆古神、次邊津甲斐辨羅神、とあるにて、左を奥とし、右を邊とせしこと著明なり、なほ九卷に至りていふべきなれど、人のまどふことなれば、わづらはしけれど、こゝにも註るになむ、○歌意は、すべてはやく人に愛らるゝは、ふるされていとほし事もはやし、花にても、其如く四方にさきだちてはやく開るは、すぐれて人にもてはやするれども、又うつろひちることもはやければ、人にかきもの思はるゝもはやし、晩れて心長く開たるは、散事もおそければ、末久しく人に愛らるれば、早きは中々遅きには、なほ及ばざるものにてありけり、さればわれは、この晚芽子に心を

よせて、よに愛たきものに思ふぞとなり

典鑄正紀朝臣鹿人。至衛門大尉大伴宿禰稻公跡見庄。作歌一首。

典鑄正は、イモノシノカミと訓べし、職員令云、典鑄司、正一人掌造、鑄金銀銅鐵、塗飾瑠璃（謂火齋珠也）、玉作、及工戸、戸口名籍事、佑一人、大令史一人、少令史一人、雜工部十人、使部十人、直丁一人、雜工戸、○衛門は、ユケヒと訓べし、和名抄に、職員令云、近衛府、兵衛府、衛門府、由介比乃豆加佐、とあり、○大尉は、オホキマツリゴトヒトと訓べし、和名抄に、判官、本朝職員令、二方品員等所載云々、兵衛、衛門、四府曰尉云々、（皆万豆利古止比止）とあり、○跡見庄は、神名式に、大和國添下郡登彌神社、神武天皇紀に、乃有金色靈鷲飛來止于皇弓、弭、其鷲光曄煜狀如流電、由是長髓彦軍卒皆迷眩不復力戰、長髓是邑之本號焉因亦以爲人名、及三皇軍之得、瑞也、時人仍號鷲邑、今云鳥見是訛也、と見えたり、今外山村と云地なりとぞ

射日立而。跡見乃岳邊之。瞿來花。總手折。吾者持將去。寧樂人之爲。

旋頭歌なり、○射日立而は、枕詞なり、此は射部人の立わたりて、禽獸の跡を見ると云意につゞけたるなり、射目とは、射部にて、狩獵に禽獸を射るともがらを云稱なり、六卷に、見芳野乃飽津之小野笑、野上者跡見居置而、御山者射日立渡、朝獵爾十六履起之、夕獵爾十里踰立、九卷に、五椌乃入江響奈利射目人乃伏見河田井爾鷹渡良之、十二に、高山峯之手折丹射日立十六待如、など

よめり、さて右の六卷に、跡見居置而、とある跡見は跡見部なるを、今の跡見乃岳邊とよめるは、跡を見るといふ意にて、用にとりなして、いひかけたるものなり、○總手折は、ふさやかに手折なり、十七に、秋田乃穗牟伎見我底利和我勢古我布佐多乎里家流乎美奈敵之香物、とよめり、又十四に、安左乎良乎遠家爾布須佐爾宇麻受登毛、安須伎西佐米也伊射西乎騰許爾、とよめる布須左も、布佐と同言なるべし、宇津保物語鶴子に、父君にしとふさにかけて、國讓に、ところどころより、をかしきものども、ふさにたてまつり給へり、初秋に、北のかた、きぬあやふさにとうでえさせ奉り給ふ、大和物語に、わだつみと人やみるらむあふことのみだをふさになきつめつれば、かけるふの日記に、わりこや何やとふさにあり、云々、道すがらうちもわらひぬべきことどもをふさにあれど、ゆめぢかものもいはれぬ、枕冊子に、ゆづる葉のいみじうふさやかに、つやめきたるは云々、源氏物語空蟬に、かみはふさやかにて、ながくはあらねど云々、契沖云、田の穂に出るを、ふさなるといふも、是におなじ、又俗に、ふさくと、ものもくはぬなどいふも、おなじ詞なり、○持字、舊本にはなし、今は一本に従つ、○歌意かくれたるところなし

湯原王。鳴鹿歌一首。

秋芽之。落乃亂爾。呼立而。鳴奈流鹿之。音遙者。

落乃亂爾は、多くの芽の花の、ちりみだれ紛ふによりて、おのが妻を見失ひて、呼立るよしにのたまへり、○歌意かくれなし

市原王歌一首。

待時而落鐘禮能雨令。零收開。朝香山之。將黃變。

第二三句、もとのまゝにては、平穩ならず、(舊本に、オツルシグレノアメヤミテと訓るは、ことにつ
たなし、〔頭註、和名抄に、霽雨〕且雨霜などをおつると云る事、古言に非ず、そはおつると云は、落字
につきたる訓にして、さらに雨霜の類に云べきにあらず、今世にすら、雨ふる、霜ふるなどのみ云
て、おつるとはいはざるをや、されどこゝは、ふるしぐれのと、六言に訓ても心ゆかず、故按に、
落は混入たるにて、衍字なること、うつなし、さて令は之とありけむを、草書にまこと書るを、をと
見て誤り、收は敷なりけむを、これも草書にて涙と書るを、涙と見て誤りしものならむ、開字(此字
舊本にはなし、一本にはあり、)は、これも耳の草書可を、涙と見て誤れるものなるべし、さて鐘禮能
雨之零敷耳、とありしなるべし、(又岡部氏は、三の句已下は、雨霽將開朝者山之將黃變、などや
ありけむ、といへれど、いかゞなり)下にも、沫雪保杼呂保杼呂爾零敷者、とあり、考合べし、○
朝香山は、攝津國住吉郡なる、淺香山なるべし、難波の古き圖に、住吉社南の方に、細江とて沼あ
りて、その南の方に、淺香山あり、浦はその西の方にあり、淺香浦は二卷に出、又は此なるは、陸
奥の安積山にてもあらむか、さらば此市原王も、陸奥へ下り賜へることありしか、考なし、とまれ
此歌は、朝香山をおもひやりて、よみ給へるなり、○歌意かくれなし

湯原王。蟋蟀歌一首。

蟋蟀は、虫名、品物解に委云り、きりぐすの一種なり、しかるに、今京より此方の歌などに、古
保呂伎といへること見えす、きりぐすをのみよめるによりて、あやしむ人あれど、集中に見えた
る蟋蟀は、みなこほろぎなり、(四季物語に、玉虫など云ていみじけれど、きりぎりすはたおりこほ
ろぎにさへおとりて、聲たてぬもあれど云々、とあれは、きりぐすの種類にて、きりぐすとは、
いさゝか別物なり、擁書漫筆に猿源氏冊子に、まきゑのばんに、こほろぎのさかづきすゑて、と見
ゆ、うらみの介下卷に、雪のうすやうに、こほろぎの墨すりながしなどあるを、思ひあはすれば、
黒漆の盞を、こほろぎのさかづきとはいへるなるべし、こほろぎといふ虫も、その色黒ければよし
有、)

暮月夜。心毛思努爾。白露乃。置此庭爾。蟋蟀鳴毛。

心毛思努爾は、心もしなゆるばかりに、といふが如し、既く委云り、○歌意は、夕月の幽かにてり
て、心も靡ゆるばかり、物あはれなる夕暮に、白露の置たる吾家の庭にて、蟋蟀の鳴よ、さてもあ
はれなる聲ぞ、となり

衛門大尉大伴宿禰稻公歌一首。

鐘禮能雨。無間零者。三笠山。木末歴。色附爾家里。

歌意は、霽雨が一寸おちにつよく隙なくふるゆゑに、御笠山の梢が、残なしに色附にけり、となり、十
卷に、四具禮能雨無間之零者眞木葉毛争不勝而色付爾家里

大伴家持和歌一首。
皇之。御笠乃山能。黃葉者。今日之鐘禮爾。散香過奈牟。

皇之は、枕詞なり、○歌意は、いでそよあまなく色付にけり、とのたまふ、その御笠山の黄葉は、かやうにつよくふる今日のしぐれにあひて、散失なむかと思ふ、となり

安貴王歌一首。
秋立而。幾日毛不有者。此宿流。朝開之風者。手本寒母。

幾日毛不有者は、いく日もあらぬにの意に通ゆる一體なり、次の歌の、未壞者も同じ、既く委云り、○此宿流朝開は、寐ぬる夜の明る、此朝開の意なり、此は、朝開の上になつして心得る言なり、(新古今集に、此宿ぬる夜の間に秋は來にけらし朝開の風の昨日にも似ぬ)○歌意は、秋が立て、いまだいくばくの日數もあらぬに、はや此朝開の風は、袂寒しや、今より後は、いかに寒く堪がたからむ、となり

忌部首黑麻呂歌一首。
秋田刈。借廬毛未。壞者。雁鳴寒。霜毛置奴我二。

壞字、舊本に壤と作るは誤なり、○霜毛置奴我二は、霜もおくべきばかりに、と云ほどの意なり、○歌意は、稻刈しは、いつのことなるぞ、昨今のことにて、いまだその秋田の借廬もこぼちあへぬ

に、はや霜もおくべきばかりに、鴈が寒く鳴わたるよ、となり

故郷豊浦寺之尼私房宴歌三首。

故郷豊浦寺は、大和國高市郡豊浦村にあり、又廣嚴寺とも、向原寺とも云り、欽明天皇十三年十月、百濟國聖明王、金銅釋迦像一軀、幡蓋經論等を奉りける時、物部大連尾興、中臣連鎌子、同奏すやう、我國家の百八十神を祭拜をこそ、天皇の事とはせめ、何ぞも蕃國の神をしも、崇め賜はむやと奏されける故、佛像を蘇我稻目に賜はりければ、小墾田家に安置て、向原家を淨捨て、寺となしけるが、終に國內に疫氣行て、民こゝだくみうせける故、尾興大連、鎌子連、また同奏して、寺を燒はらひ、佛をば難波堀江に投けるよし、書紀欽明天皇卷に見えたり、この向原寺、後に再興ありて、建興寺と改めけるなるべし、三代實錄四十二に、元慶六年八月廿三日壬戌、太政官下符大和國司一傳、散位從五位下宗岳朝臣木村等言、建興寺者、是先祖大臣宗我稻目宿禰之所建也、本緣記文具存灼然、望請宗岳氏檢領、而彼寺別當、傳燈大法師位義濟確執曰、太政官、仁壽四年九月十三日、下當國符傳、彼寺推古天皇之舊宮也、元號豊浦、故爲寺名、凡厥緣起具、存前志、佛法東流、叡始於此云々、宗我稻目宿禰、以家爲佛殿、天皇賜其代地、遂相移易施入皇宮、稻目宿禰、奉詔造塔、然則建興寺之建、出自御願、不可爲宗我氏寺明矣、官商量宜停氏人檢領之望、不得重致寺家之愁、と見えたり、持統天皇紀に、朱鳥元年十二月丁卯朔乙酉、奉爲天淳中原瀛真人天皇、設無遮大會、於五寺大官飛鳥川原小墾田豊浦坂田、續紀卅一童謡に、葛城寺乃前在也、豊浦寺乃西在也、於志止度刀志止度、櫻井爾白壁之豆久也云々、續古今集に、かづらきや豊

浦の寺の秋の月西に成まで影をこそみれ、玉葉集に、春を慕ふ名残の花も色暮ぬ豊浦の寺の入根の鐘、などあり、推古天皇のあまつひつぎしろしめし、豊浦宮と申ける所なり、小墾田宮に遷都させ給ひしより、故郷と云るなり

明日香河。逝回岳之。秋芽子者。今日零雨爾。落香過奈牟。

逝回岳は、明日香河邊を、ゆきめぐれる所の岳なり、(後にゆき、のをかと云て、地名とするは、ひがことなり、)歌意は、飛鳥川を、ゆきめぐれるところの岳のはぎの花は、今日ふる雨にあひて散失なむか、このつよき雨にあひては、持つことはあるまじ、をしきことならずや、となり

右一首。丹比真人國人。

鶉鳴。古郷之。秋芽子乎。思人共。相見都流可聞。

鶉鳴は、契沖云、野とならば鶉となりて鳴をらむ、とよみて、うづらは人目なき野にすむものなれば、此集にも、第四、第十一、第十七などに、おなじ體によめり、故郷豊浦寺なれば、うづらなくふりにしさと、いへるなり、和漢朗詠集に、うづらなくいはれのを、秋はぎを思ふ人もみつるけふかな、などあるは、此歌にこそ、○歌意は、故郷なれば、人目稀にて、常は思ふ友どち會事もかたきを、今日はこのはぎの盛に愛て、心のあひかなふどち依會て、共にはぎを相見つる哉、さてもおもしろや、となり

秋芽子者。盛過乎。徒爾。頭刺不挿。還去牟跡哉。

挿、舊本搖と作るは誤なり、今は拾穂本、古寫一本、異本等に從つ、○歌意は、はぎの花は、今の盛も、程なく過行を見すて、頭刺にもさゝず、唯しばしの間かたらひ給ふのみにて、罷りましなむとにや、さてく薄き御情哉、と云て、客をとどむるなり

右二首。沙彌尼等。

大伴坂上郎女。跡見田庄。作歌二首。

妹目乎。始見之琦乃。秋芽子者。此月其呂波。落許須莫湯目。

妹目乎は、枕詞なり、次に云、○始見之琦乃は、岡部氏、此歌の端に、跡見田庄作歌と書つれば、他所を思ひてよめる歌ともいふべからず、はた此上に、紀朝臣鹿人至大伴宿禰稻公跡見庄作歌とて、射目立而跡見乃岳邊之、とよみたるも、端の詞、今とひとしくて、即跡見の岳邊をよめるを思ふに、今も跡見之岨邊とありしを、例の草書にて、跡を始に誤りて、みそめと訓たれば、その下の訓がたき故に、さかしらに、岨邊を琦の一字よとて、字も訓も改めて、みそめのさきとはしけむかし、さて妹目乎跡見とは、妹が目を速く見むと、こひいそぐ意にいひかけたるなり、卷一に、我妹子乎早見濱風、とよめるがごとし、と云り、(冠辭考に見ゆ、)此説信によくいはれたり、これに依てなほよく考るに、琦を岨邊の二字の誤ぞと云るは、此上に、跡見乃岳邊とあるには、よく叶へることなれど、字形もいと遠く、其うへ上に岳邊とあればとて、こゝも必て然有べきことぞと思ふは、甚偏ならずや、かれ思ふに、琦はもとのまゝにて、乃是有字の誤なるべし、乃有草書混易ければなり、さらば跡見之琦有と訓べし、琦といふこと海邊ならずてはいかゞ、と思ふ人もあるべけれど、

上に、春山之開乃乎鳥里、とあるも、開とあるは借字にて、山の岬を云るなれば、いづくにもいふべきを知べし、○月字、舊本に目と作るは誤なり、今は古本に従つ、○落許須莫湯目、上に霞立春日之里、梅花山下風爾落許須莫湯目、橘の長歌に、直一眼令親麻而爾波、落許須奈由米登云管、云々、などあり、○歌意は、跡見の埼に、おもしろく咲てある、このはぎの花は、この月ばかりは、ゆめくちる事なかれ、となり

吉名張乃。猪養山爾。伏鹿之。孀呼音乎。聞之登聞思佐。

吉字、舊本古に誤、○猪養の山は、二卷に出て註す、○登聞思佐は、面白さと云むが如し、その面白さ、いふかぎりなし、といふ意なり、○歌意かくれたるところなし

巫部麻蘇娘。雁歌一首。

誰聞都。從此間鳴渡。雁鳴乃。孀呼音乃。乏知左寸。

誰聞都は、誰が聞つらむと云むが如し、都の下に、良武の言を、假に加へて聞べし、さて上に、誰とあるからは、聞都良武、或は聞都留など云こと、氏爾乎波のとゝのひの定なれど、此歌は偏格にとゝのへて、良武の言を、都の下に假に加へて、聞べくいひたるものなり、此例は、伊勢物語塗籠本に、いづこまでおくりはしつと人とはあかぬ別れの涙川まで、とあるに同じ、これもおくりはしつらむといふべきを、つとゝのへて、らむの言は、假に加へてきくべくいひたるものなり、くはしくは、余が歌詞三格例といふものを見て考ふべし、(しかるを、岡部氏が都は跡字の誤にて、タ

レキケトとありしなるべし、といへるは、ひがことなり、さるは誰といひて、都と結むべからぬこととなり、と思へるより、しか云るなるべけれど、其は常格のみを思ひて、偏格の例をまで、ふかくたどらざりしかたおちなり、そもく此歌は、鷹の妻呼を主として鳴る趣にて、人に聞するを主として、鳴よしにはあらず、人の聞はおのづからのことにこそあれ、設て聞するよしは、さらになきことなり、しかるを誰聞跡とありては、人に聞するを主として、鳴るよしにきこゆるを、末にいたりては、妻呼を主として、鳴る趣なれば、しかするときは、たちまち本末支離てきこゆるをや、(されば和へたる歌にも、聞津哉登妹之問勢流、とはいへるなり、(誰聞跡にては、和歌にもかけあはぬことなるをや、)十卷に、宇能花乃咲落岳從霍公鳥鳴而沙渡公者聞津八、とありて、聞津八跡君之問世流霍公鳥小竹野爾所沾而從此鳴綿流と云る、考合べし、○從此間鳴渡は、こゝを鳴わたると云意なり、上に出つ、○乏知左寸は、誤字なり、(岡部氏は、去方不令知とありしを、誤脱せるものなり、と云れど非ず、)本居氏の、乏蜘蛛在可の誤ぞといへりしは、さることながら、猶考るに、知は右の草書を知と見て誤り、寸は爾の草書を寸と見て誤り、さて左右を又下上に誤れるにて、乏左右爾とありしなり、九卷に、妹當衣刈音夕霧、來鳴而過去及乏、十卷に、久方之天漢原丹奴延鳥之裏敷座津乏諸手二、などあるを、考合べし、○歌意は、鷹が音の、孀呼聲のはるくきこえて、此間の空を鳴渡るが、感を催さるゝまでおもしろきを、誰か聞つらむ、さだめて心ある君こそ、先聞給ふなるらめ、いかできかせ給へ、といひたるよしなり、さてこそ和歌に、聞津哉登云々とは、いはれたるなれ

大伴家持 和歌一首。
聞津哉登。妹之問勢流。雁鳴者。眞毛遠。雲隱奈利。

歌意は、吾聞つるやいかに、さだめて聞しならむと、わざ／＼妹が問給ふ鴈が音は、けにも雲居はるかに鳴ひよきて、感を催せしぞとなり、枕冊子に、鴈の聲は、遠く聞えたるあはれなり、とあり、思合べし

日置長枝娘子歌一首。

日置長枝娘子は、傳未詳ならず、日置はへきと唱しが、後世にも、日置とかく氏ありて、へきと唱ふるなり、和名抄に、伊勢國一志郡日置、(比於木)越後國蒲原郡日置、(比於木)但馬國氣多郡日置(比於木)などあるは、後に字に就たる唱か、又能登國珠洲郡日置、(比於木)とあり、弊伎にても比伎にても、置字は伎なり、置を伎と云は、稻置など云如く、古唱なるべし、本居氏も、古事記應仁天皇條に、是大山守命者、土形君、弊伎君、榛原君等之祖也、とあるに依りて、弊伎と云ぞ、正しき唱なるべき、と云り、(但し弊伎と云が本ならば、日置と書こと、いかなるよしにか、所由ある文字なるべし、)

秋付者。尾花我上爾。置露乃。應消毛吾者。所念香聞。

歌意は、身も消失べきばかりに物思をする事哉、さてもくるしや、となり、本三句は全序なり

大伴家持 和歌一首。

和字は、衍なり

吾屋戸乃。一村芽子乎。念兒爾。不令見殆。令散都類香聞。

殆は、本居氏、言意は、邊々にて、其近き邊まで至る意なり、と云り、此は散す邊まで至りつるといふ意なり、(俗語にしていはゞ、あぶないことちらしをつた、と云意なり、)さてこの殆と云言は、物を爲畢ぬ内のことにいふことなれば、殆散しぬべき、あるは殆散しなむ、などやうに、いふべきこと、おもはるゝに、(三卷に、吾盛復將變八方、殆寧樂京師乎不見歟將成、源氏物語に、翁もほと／＼舞出ぬべき、などいへる類なり、)七卷に、三幣取神之祝我鎮齋杉原燎木伐、殆之國手斧所取奴、十卷に、春之在者酢輕成野之霍公鳥保等穂跡妹爾不相來爾家里、十五に、可敞里家流比等伎多禮里等伊比之可婆保等保登之爾吉君香登於毛比豆、などあれば、殆散しつる、殆とらえぬ、殆來にけりとやうにいふも、古言なり、(殆所取奴は、あぶないこととられをつた、殆來爾家里は、あぶないこと來をつた、といふことなるなり、)○歌意は、吾庭の一群はぎの、おもしろく咲るを思ふその女に得見せずして、あたら危ふきこと散夫らしつる哉、今日見に來ずば、明日は地に散はてぬべきを、よくこそ見に來つれ、とよるこべるなり

大伴家持 秋歌四首。

久堅之。雨間毛不置。雲隱。鳴曾去奈流。早田雁之哭。

雨間毛不置は、雨の零間も息ずの意なり、此上霍公鳥歌に、既く委云り、○早田鷹之哭は、田を刈といひかけたるのみなり、此上にもよめり、○歌意は、雨のふる間は息ふべきに、時節と云ば、雨のふるをもいとはずて、雲居はるかに、鷹が鳴てぞ行なる、となり

雲隠。鳴奈流雁乃。去而將居。秋田之穗立。繁之所念。

歌意は、繁く透間もなく一すぢに人の戀しくおもはるゝ、となり、第四句までは全序なり

雨隠。情鬱悒。出見者。春日山者。色付二家利。

歌意は、雨の晴間なくて、家の内へのみ隠りてをれば、心がふさがりむすほ、れたる故に、もし心をなくさむこともあらむかと、家を出てみれば、物あはれに、かなしき秋としられて、春日山は色付にけり、となり、上に、隠耳居者鬱悒奈具左武登出立聞者來鳴日晚

雨晴而。清照有。此月夜。又更而。雲勿田菜引。

歌意かくれたるところなし、雨晴のきて清く照たる月に、又再び雨雲の覆ひ來むことを、恐れていへるなり

〔右四首。天平八年丙子秋九月作。〕

藤原朝臣八東歌二首。

此間在而。春日也何處。雨障。出而不行者。戀乍曾乎流。

歌意は、此間にありて、春日山やいづくなるらむ、遠き方にあるなるべし、雨に障られて、出て行て其山を見ることかなはねば、唯其山の黄葉のけしきをのみ、戀しく思ひつゝぞをる、となり、三卷に、此間爲而家八方何處白雲乃棚引山乎超而來二家里、四卷に、此間有而筑紫也何處白雲乃棚引山之方西有良思

春日野爾。鐘禮零所見。明日從者。黃葉頭刺牟。高圓乃山。

者字、一本に夜と作り、○歌意かくれたるところなし

大伴家持白露歌一首。

吾屋戸乃。草花上之。白露乎。不令消而玉爾。貫物爾毛我。

草花は、ヲバナなり、十卷、十六にもかく書り、集中に、草字をカヤと訓り、カヤは薄をいふ、さ

れば、草の花てふ意にて、ヲバナとは訓ことなり、へさる意をも得しらずて、岡部氏の、草は葛の誤にて、クズバナガウヘノなるべきか、といひ、又或人は、草は尾の草書より、寫誤れるものなるべし、といへるは、大じき非なり、○歌意は、吾庭のをばなかうへにおきたる、白露のおもしろきを、其ま、消さずして、まことの玉にして、貫べきものもがなあれかし、となり、枕冊子に、あはれなるもの、云々、秋ふかき庭のあさちに、露の色々玉のやうにひかりたる、云々、此歌後撰集に出

大伴利上歌一首。

大伴利上、契沖云、利は村の誤なるべし、村上が傳は、上卷に云り

秋之雨爾。所沾乍居者。雖賤。吾妹之屋戶志。所念香聞。

雖賤は、此歌、旅にありてよめるなるべし、故吾郷の家を云なるべし、○歌意は、旅にありて、秋雨にあひて、くるしきめをみれば、いやしくはあれど、吾妹がすむ吾宅の、一すぢに戀しくおもはるゝ事哉、となり

右大臣 橋家 宴歌七首。

右大臣は、諸兄公なり、御傳は六卷下に委云り

雲上爾。鳴奈流雁之。雖遠。君將相跡。手回來津。

歌意は、道の間遠くはあれども、偏に君に相見奉らむと思へばこそ、此處彼處曲り廻りて、辛苦して來つるなれ、となり、本は序なり

雲上爾。鳴都流雁乃。寒苗。芽子乃下葉者。黃變可毛。

歌意かくれたるところなし

右一首。

此下に作者の名を脱せるならむ

此岳爾。小牡鹿履起。宇加涅良比。可聞可開爲良久。君故爾許曾。

宇加涅良比は、うかどひねらふ意なり、十卷に、窺良布跡見山雪之、とよめり、推古天皇紀に、問課者、天武天皇紀に、處々置候、などあり、これらのうかみもつかどふ意なり、此までは、次句を云む料の序なり、○可聞可開爲良久は、楫取彦魚云、開は聞の誤なり、カモカモスラクと訓べし、と云り、可聞可開は左右なり、かもかくもと云が如し、かもかくもといふべき處を、カモカモといへること、集中にあり、おほならば左右せむを、などもよめり、(可聞可開居良久の誤とし、又萬智乍居良久の誤とする説は、みなしひ言なり、)かもかくもは、後にともかうもといふに同じ、こゝはともかうもする事は、と云むが如し、○君故爾許曾は、君がゆゑによりてこそ、といはむが如し、○歌意は、色々に心をいたつきて、ともかうもする事は、深く思ひ奉れる君がゆゑによりてこそ、かくはすなれ、となり、契沖云、此對馬朝臣は、ことに右大臣を頼みける人にや、第六に、天平十年秋八月二十日、右大臣の宴席にてよまれたる歌あり、大帳などをもちて、のぼられける時なるべし、今も七首の終の註をみるに、第六にあると、同日の歌なり

右一首。長門守巨曾倍朝臣津島。

巨曾倍朝臣津島(巨、舊本に臣に誤、津、六卷には對と作り、)の傳は、六卷下に云り

秋野之。草花我末乎。押靡而。來之久毛知久。相流君可聞。

來之^{コシク}久毛^{モシク}知久^クは、九卷に、欲見^{ミタカ}來之^{コシク}久毛^{モシク}知久^ク、とあり、來し事のかひありて、といはむが如し、之^ノ久^クは、過にし方の事をいふ言なり、四卷下に委^{ウケ}云^クり、知久^クは驗^{シル}くにて、かひありての意なり、○歌^ノ意^ハ、秋の野の草花^{クサハナ}が末^シを押^{オシ}靡^{カセ}かせ、辛^{カラ}苦^ク難^ナて來^キし事のかひありて、相^アへる君^{キミ}哉^カ、さてくよ^クろこばしき今日^{ケノ}ぞ、となり

今朝^{ケサナキテ}鳴^{ナリ}而^ニ。行^{ユキシ}之^ノ雁^{ガリガネ}鳴^ネ。寒^{サムミカ}可^カ聞^モ。此^{コノ}野^ノ乃^ノ淺^{アサデ}茅^チ。色^{イロ}付^{ツキ}爾^ニ家^{ケル}類^ル。

歌意は、今朝鳴て行し雁が音の寒くて、霜などもふれる故にや、此野の淺茅の色付にけるならむ、さても見事なるけしきや、となり

右二首。阿部朝臣蟲麻呂。

阿部朝臣蟲麻呂（阿字、四卷には安と作り、この傳は、四卷下にいへり

朝^{アサト}扉^{アケテ}開^キ而^ニ。物^{モノ}念^{モト}時^{トキ}爾^ニ。白^{シラフユノ}露^ノ乃^ノ。置^{オケル}有^{アキハギ}秋^ノ芽^{ハギ}子^ハ。所^モ見^{エツ}喚^ツ鷄^ツ本^{モト}名^ナ。

喚鷄は、にはとりを呼に、今はとといへど、むかしはつといひけむ故にかけり、○歌意は、朝戸開て、興出て、ほれ、くと物思をする時に、心なくむざくと、白露のおける秋はぎの、見るとなけれど見えつ、秋のあはれのもよほされて、いと物思をする、となり

棹^{ササ}牡^シ鹿^カ之^ノ。來^キ立^{タチ}鳴^{ナク}野^ノ之^ノ。秋^{アキハギ}芽^ハ子^ハ者^ハ。露^{ツユシモ}霜^{オヒテ}負^フ而^ニ。落^{フリ}去^{ニシ}之^ノ物^{モノ}乎^ナ。

落去之物乎は、例の意を含めたる詞なり、秋芽子は散すぎにしものを、なにをか今よりは愛賞にせむ、といふほどの意なり、（略解に、このものをの詞、軽く心得べし、と云るは、非なり、）○歌意かくれたるところなし

右二首。文忌寸馬養。

馬養は、續紀に、元正天皇、靈龜二年四月癸丑、詔、壬申年功臣、贈正四位上文、忌寸彌麻呂息、正七位下馬養等一拾人賜田各有差、聖武天皇、天平九年九月己亥、正六位上文、忌寸馬養等授外從五位下、十二月丙寅、授外從五位上、十年閏七月癸卯、爲主税頭、十七年九月戊午、爲筑後守、孝謙天皇、寶字元年六月壬辰、爲鑄錢長官、二年八月庚子朔、授從五位下、と見えたり
〔天平十年戊寅秋八月二十日。〕
これは上につくべし、六卷に、天平十年秋八月二十日宴右大臣橋家歌四首、とあると全同日なり

橋朝臣奈良麻呂。結集宴歌十一首。

橋朝臣奈良麻呂の傳は、六卷下橋宿禰奈良麿、とある處に、委云り、續紀に、天平勝寶二年、橋宿禰諸兄賜朝臣姓、と見ゆ、是はそれよりも前のことなれば、朝臣とせるは、後にめぐらして、記せるものなり

不^マ手^ラ折^ズ而^ニ。落^チ者^バ惜^シ常^ト。我^{アガ}念^{モヒシ}之^シ。秋^{アキ}黃^{モミ}葉^チ乎^ナ。挿^{カザ}頭^{シツル}鶴^カ鴨^{カモ}。

落者惜常は、チラバチシミトと訓べし、(チリナバヲシトとよめるはわろし、)散ばをしからむとの意なり、○歌意は、折取ぬ内に散失なば、いかに後悔しく惜からむ、と思ひし黄葉を、今日の宴席にかざしつる哉、さても見事の黄葉や、となり

希將見。人爾令見跡。黄葉乎。手折曾我來師。雨零久仁。

希將見(希字、舊本布と作るは誤なり、今改)は、メヅラシキなり、十卷、十一、十二にも如此あり、米豆良志は愛しき意なり、希に見る物は、殊に愛しまるゝより、かく書るなり、神功皇后紀に、云云皇后曰、希見物也、希見此云、梅豆邏志、履中天皇紀に、希有、崇峻天皇紀に、此犬世希見聞、靈異記に、奇メヅラシク、又阿也シ支、字鏡に、貨女豆良志、などあり、又佛足石碑歌には、米太志などあり、(メダシは、メヅラシの約れるなり、ヅラの切はダとなれり、)○零久仁は、布留仁の伸りたる詞なり、布留を布良久と伸云は、その物の緩なるを云り、緩なるは、その物の絶間なく、引つゞきて物するよしなり、○歌意は、愛しき人に見せむが爲にとて、雨の絶間なくふるに、からうして、この黄葉を折取て來しぞ、となり

右二首。橘朝臣奈良麻呂。

黄葉乎。令落鐘禮爾。所沾而來而。君之黄葉乎。挿頭鶴鴨。

君之黄葉は、君が家の黄葉と云むが如し、○歌意かくれたるところなし、しぐれにぬれてきて、かさすとのたまふは、心ある君の家のもみちを、賞翫る意の深切きよしなり

右一首。久米女王。

久米女王は、續紀に、聖武天皇天平十七年正月乙丑、無位久米女王授從五位下、と見ゆ

希將見跡。吾念君者。秋山。始黄葉爾。似許曾有家禮。

歌意は、愛しと吾思ふ君を、何にかはなぞらへむ、たとへば、今見る秋山の初紅葉に似て、みれどもあかず、うるはしくこそありけれ、となり

右一首。長忌寸娘。

長忌寸娘は、傳未詳ならず

平山乃。峰之黄葉。取者落。鐘禮能雨師。無間零良志。

取者落は、甚微きをいへり、○歌意かくれたるところなし

右一首。内舍人。縣犬養宿禰吉男。

吉男は、續紀に、孝謙天皇寶字二年八月庚子朔、正六位上縣犬養宿禰吉男授從五位下、五月壬午、爲肥前守、廢帝寶字八年十月己丑、爲伊豫介、と見えたり

黄葉乎。落卷惜見。手折來而。今夜挿頭津。何物可將念。

歌意は、黄葉の散失なむ事の惜さに、折取來て、今夜の宴席にてかざしつれば、今は何か思はむ、かく心だらひなれば他に物思はなし、となり

右一首。縣犬養宿禰持男。

持男は、傳未詳ならず、吉男が近族なるべし

足引乃。山之黄葉。今夜毛加。浮去良武。山河之瀬爾。

歌意は、契沖云、山のもみちを賞翫すべき人は、この宿にあつまりて、こゝに賞すれば、山のもみちは、見る人なしに、谷川の水にちりうきてやいぬらむ、とおもひやるなり

右一首。大伴宿禰書持。

平山乎。令丹黄葉。手折來而。今夜插頭都。落者雖落。

令丹は、ニホフと訓べし、ニホフと訓て、令丹意となるは、令響をトヨム、令靡をナビクといふと、全同例なり、(舊訓には、ニホスとあり、これも古言か、十六に、墨江之遠里小野之眞榛持丹穂之爲衣丹、とよめり)○落者雖落は、よしや今はちらばちりぬとも、うらめしくはあらず、といふなり、(古今集に、ひと目みし君もやくると櫻花けふは待見てちらばちらなむ、とあり)○歌意かくれたるところなし

右一首。三手代人名。

三手代人名(三、舊本に之に誤、今は一本に従)は、傳未詳ならず、續紀に、聖武天皇天平二十年七月丙戌、從五位下大倭御手代連麻呂女賜宿禰姓、と見ゆ、一族か

露霜爾。逢有黄葉乎。手折來而。妹插頭都。後者落十方。

妹とは、宴席に出あひたる、侍女などをいふならむ、○歌意かくれなし

右一首。秦許遍麻呂。

許遍麻呂(遍字、官本、水戸本等には、部と作り)は、傳未詳ならず、續紀に、勝寶二年正月乙巳、正六位上秦忌寸首麻呂授外從五位下、と見えたり、一族か

十月。鐘禮爾相有。黄葉乃。吹者將落。風之隨。

十月、可美那月といふこと、むかしより種々の説あれども、みな理に泥みて、ひとつも詳なるはなし、(詞花集に、曾禰好忠、何事も行て祈らむと思ひしに神無月にも成にける哉、とあるは、興にまうけて云るなるべし、下學集に、十月諸神皆集出雲大社、故云神無月也、出雲國神有月云也、とある如く、其謂にて云こと、後世はなべて思へることなれど、諸國に一日も神在らずしては、あり經ることならぬ理なるをや、しかれども此説は、中昔に、人の妄に作出たることにはあらず、所以あることと思はるゝことなり、別に委論へり)大神景井は、稻は九月にもはら刈收て、十月に酒に造る故に、釀成月といふならむ、釀成は、十六に、味飯を水に釀成吾待しかひはかつてなし、とよめ

る釀成は、酒に造ることなれば、さる所由ならむ、と云り、○歌意は、十月の霽雨にあひて、甚微くなれるもみちなれば、風吹來らば、その風のまゝに散失なむぞ、となり、(契沖云、下旬は、ともかくも君にしたがはむの意なり、げにも奈良麻呂、寶字元年に謀反のやうのことありしときに、此歌ぬしも方人をせられける、倭歌も詩文も兼たる人とみゆるを、惜むべきことなり、)

右一首。大伴宿禰池主。

黄葉乃。過麻久惜美。思共。遊今夜者。不開毛有奴香。

過麻久惜美は、散過む事の惜き故にの意なり、○不開毛有奴香は、いかで不開もあれかし、と願ふ心なり、(後の歌の格にていはゞ、あけずもあらなむと云に似て、詞強し、)この言のこと、既に具云り、○歌意かくれたるところなし

右一首。内舍人大伴宿禰家持。

〔以前冬十月十七日。集於右大臣橋卿之舊宅宴飲也。〕

冬十月は、天平十年なり

大伴坂上郎女。竹田庄。作歌二首。

然不有。五百代小田乎。苜亂。田廬爾居者。京師所念。

然不有は、然は默字の誤なり、と岡部氏云り、モダアラズとよむべし、默止てあらずと云意なり、

歌意かくれたるところなし
〔右天平十一年己卯秋九月作。〕

佛前唱歌一首。

思具禮能雨。無間莫零。紅爾。丹保敵流山之。落卷惜毛。

歌意は、紅にはほへる山の紅葉の、散失なむ事のさても惜や、霽雨の雨は、いかで隙なくしけくふ

(俗に、だまつてをらすといふが如し、)さてこれは枕詞なり、五百とつゞくは默止て在す云といふ意なり、いふをいほに轉して連ねしなり、ふとほとは、親通ふ例なり、集中に、延を波保、負を於保須、逢を阿保、思を於母抱、戀を許保と云る類なり、又和名抄に、枋和名阿布古、とあるを、字鏡には、阿保己とあるをも、考合すべし、○五百代小田は、かぎりなくひろき田のよしなり、代は、七十二歩を十代とすと云り、書紀には、頃字をもシロとよめり、拾芥抄に、方六尺爲一步云々、積七十七步爲十代、百四十步爲二十代云々、五十代爲一段、と見えたり、○苜亂は、稻穂を刈干とて、縦横に亂るを、業の繁きにそへたり、○田廬は、十六に、可流羽須波田廬乃毛等爾、とある歌の註に、田廬者多夫世也、とあり、五卷に、布勢伊保能麻宜伊保乃内爾、とよめり、田ぶせは、田をまもるふせやなり、○歌意は、五百代と廣き田の稻を、刈干業はふとて、月日久しく竹田の田庄のふせ屋に居れば、一すぢに京師が戀しく思はるゝ、となり

隱口乃。始瀨山者。色附奴。鐘禮乃雨者。零爾家良思母。

ることなかれ、となり

右冬十月、皇后宮之維摩講。終日供養。大唐高麗等種種音樂。爾乃唱此詞。彈琴者。市原王。忍坂王。後賜姓大原真人。置始連長谷等十數人也。

皇后は、光明皇后なり、○維摩講は、契沖云、大織冠のはじめ給ひて、後まで名高き大會なり、孝謙天皇紀云、寶字元年閏八月壬戌、紫微内相藤原朝臣仲麻呂等言、臣聞云々、緬尋古記、淡海大津宮御宇皇帝、功田一百町、賜臣會祖藤原内大臣、云々、今有山階寺維摩會者、是内大臣之所起也、願主乘化三十年間、無人紹興此會、中廢、乃至藤原朝廷、胤子太政大臣、更發弘誓、追繼ニ先行、則以ニ毎年冬十月十日、始關勝筵、至於内大臣忌辰、終爲講了、云々、伏願以此功田、永施其寺、助維摩會、彌令興隆、遂使内大臣之洪業、與天地而長傳、皇太后之英聲、俱日月而遠照云々、勅報曰、備省來表、報德惟深、勸學津梁、崇法師範、朕與卿等共植茲因、宜告所司、令施行、元亨釋書二十云、齊明天皇三年十月、鎌子於山州陶原家、創山階精舍、設維摩齋會、維摩會自此始、内藏省式云、凡興福寺維摩會施料、調綿六百屯、寮每を送、彼寺、玄蕃式云、凡每年起正月八日、迄于十四日、於大極殿設齋、講說金光明最勝王經云々、其講師者、經興福寺維摩會講師者使請之、凡興福寺維摩會、十月十日始十六日終云々、凡興福寺兩寺、維摩最勝會、堅義及第僧等叙滿位者、寺別物錄交名連載一紙、僧綱共署申官、〔頭註、抄に、式部丞和名抄云、上宣云、不參維摩會、藤氏六位、〕○彈琴は、音樂の時に琴を弾人なり、四時祭式に、官人以下須養春夏季祿、戊子舊設戊午、從古寫本、

裝束料云々、彈琴二人、云々、各賜青摺袍一領袴一腰、大嘗祭式に、凡齋服者云々、神祇官伯以下、彈琴以上十三人、各榛藍摺錦袍一領白袴一腰、と見えたり、十六爲蟹、述痛歌に、忍照八難波乃小江爾、盧作難麻理豆居、葦河爾乎王、召跡、何爲牟爾吾乎召良米夜、明久吾知事乎、歌人跡和乎召良米夜、笛吹跡和乎召良米夜、琴引跡和乎召良米夜云々、と見ゆ、○市原王は、三卷下に見えて、傳彼處に委云り、○忍坂王は、續紀に、寶字五年正月戊子、授無位忍坂王從五位下、○後賜姓大原真人赤麻呂也は、考るところなし、○歌子は、音樂の時に歌を誦ふ人なり、天武天皇紀に、十四年九月、詔曰、凡諸歌男歌女笛吹者、即傳己子孫令習歌笛、また朱鳥元年正月、歌人等賜袍袴、三代實錄に、元慶元年十一月二十五日、悠紀主基國宰郡司歌女百姓賜祿有差、四年三月二十七日、伊勢大神宮始置歌長一人、貞觀儀式一卷、園井韓神祭儀に、率雅樂寮并歌人歌女等、就座、江家次第、園井韓神祭條に、云々上宣、歌人將來、少承稱唯退出、率歌人歌女等、着南座、大嘗祭式に、歌人二十人、歌女二十人、また悠紀國司引歌人、入自同門、就位奏國風、四時祭式に、云云坐定大臣命召使、令喚治部、令歌女參入云々、歌者始奏云々、大神宮式に、歌長三人、政事要略に、歌者彈琴笛吹、本朝世記に、天慶五年閏三月二十七日、石清水、被奉遣神財并儺人歌人等云々、なども見えたり、(すべて古に宇多人と云るは、歌を誦ふ人なり、歌を作人を、宇多人と云ることはめづらし、其は多くは宇多與美とこそいひたれ、)以上歌長、歌人、歌男、歌女、などいひて、いさゝか差別あることなれど、みな曲折を調へて歌うたふ人なり、歌子と書るは、歌人といへるに同じかるべし、○田口朝臣家守は、傳未詳ならず、續紀に、神龜三年正月庚子、授正六位上田口朝臣家主從五位下、とある、此家主の子などにや、○河邊朝臣東人の傳は、六卷上に云り、○置始連

長谷は、傳未詳ならず

大伴宿禰像見歌一首。

秋芽子乃。枝毛十尾二。降露乃。消者雖消。色出目八方。

十尾は、十卷に、爲垂柳。十緒、また白杜枝枝母等乎々爾、とありて、或云、枝毛多和多和、とあるなどを、合思ふに、多和多和と撓み靡くを云詞なり、源氏物語竹川に、今一所は、うす紅梅に御くしいろにて、柳の絲のやうにたをく〜と見ゆ、浮舟に、こめきおほどかに、たをく〜と見ゆれど、けだかう世の有さまをもしる方すくなくて、おぼしたてたる人にしあれば、などある、たをたをも同言にて、登遠、多遠、多和、と通云りしなるべし、○降露は、フルツユと訓べし、古は露をも布流といひしなるべし、(略解に、オクツユとよめるはわろし、)○歌意は、縦や設ひ、身は消失るとも、其に障りて、嗚呼色に出て人にあらはさむやは、顯はしはすまじとなり、本句は全序なり

大伴宿禰家持。到娘門作歌一首。

妹家之。門田乎見跡。打出來之。情毛知久。照月夜鴨。

情毛知久は、心もかひありて、といはむが如し、○歌意は、妹が家の門田のさまを見むとて、わざ／＼馬に鞭打て、出て來し心もそのかひありて、照月哉、さてもおもしろのけしきや、となり

大伴宿禰家持。秋歌三首。

秋野爾。開流秋芽子。秋風爾。靡流上爾。秋露置有。

歌意かくれたるところなし

棹牡鹿之。朝立野邊乃。秋芽子爾。玉跡見左右。置有白露。

歌意かくれなし

狹尾牡鹿乃。智別爾可毛。秋芽子乃。散過鷄類。盛可毛行流。

智別は、萩原を、鹿の智にておしわくるを云、二十卷に、麻須良男乃欲妣多天思加婆左乎之加能牟奈和氣由加牟安伎野波疑波良(思加は、萬世を寫誤れるなるべし、)とよめり、又九卷に、胸別之廣吾妹、とあるは、たゞ胸合のひろきをいへれば、異なり、○歌意は、芽子花の散過にけるは、鹿の智にて押分たるゆるか、又はおのづから盛の過て散たるか、いかさまにも、盛の過たる故にてあるらし、さてもをしき事ぞ、となり

〔右天平十五年癸未秋八月。見物色作。〕

内舍人石川朝臣廣成歌二首。

妻戀爾。鹿鳴山邊之。秋芽子者。露霜寒。盛須疑由君。

鹿鳴は、カナクとよむべし、一卷に、鹿將鳴山會、と有、○歌意かくれたるところなし

目頼布。君之家有。波奈須爲寸。穗出秋乃。過良久惜母。

波奈須爲寸は、奈は太字の誤なるべし、神功皇后紀神託の詞に、幡荻穂出吾也、とあり、○歌意は、愛しき君が家の庭にある芒の穂に出て、おもしろき盛の時節のうつり過行事の、さても惜や、となり

大伴宿禰家持鹿鳴歌二首。

山妣姑乃。相響左右。妻戀爾。鹿鳴山邊爾。獨耳爲手。

相響左右は、十卷長歌に、山彦乃答響萬田霍公鳥都麻戀爲良思左夜中爾鳴、とあり、○獨耳爲手は、餘意を含めたるなり、爲手は、うけはりて他事なく物する意の詞なり、此は獨のみにて、あかずくちをしき事を、つよくおもはせむがためにいへるなり、○歌意は、其聲のひよきわたれば、それにこたへて、山彦のとよむまで、妻戀に鹿の鳴山邊に、唯一人のみ居て聞ば、あかずくちをしき事なり、これをいかで、思ふ人にきかせばや、となり

頃者之。朝開爾聞者。足日木篋。山乎令響。狹尾牡鹿鳴哭。

哭は、集中モの借字に多く用へり、哭は歎息辭なり、○歌意かくれたるところなし〔右二首。天平十五年癸未八月十六日作。〕

大原真人今城。傷惜寧樂故郷一歌一首。

今城は、續紀に、孝謙天皇寶字元年五月乙卯、正六位上大原真人今木授從五位下、六月壬辰、爲

治部少輔、廢帝同七年正月壬子、左少辨、四月丁亥、爲上野守、八年正月乙巳、從五位上、光仁天皇寶龜二年閏三月戊子朔乙卯、無位大原真人今城、復本位從五位上、七月丁未、爲兵部少輔、三年九月庚子、爲駿河守、と見えたり

秋去者。春日山之。黃葉見流。寧樂乃京師乃。荒良久惜毛。

歌意は、いつも秋になれば、春日山の黄葉を見て興ある、寧樂の京師の、次第々々に荒ゆく事の、さても惜や、となり

大伴宿禰家持歌一首。

高圓之。野邊乃秋芽子。比日之。曉露爾。開兼可聞。

兼字、舊本葉に誤、一本に従つ、○歌意は、かくれたるところなし、高圓野をおもひやりたるなり

秋相聞

額田王。思近江天皇。作歌一首。

君待跡。吾戀居者。我屋戸乃。簾令動。秋之風吹。

此歌并次の歌と二首は、既く四卷に出て註しつ

鏡女王。作歌一首。

風乎谷。戀者乏。風乎谷。將來常思待者。何如將嘆。

弓削皇子御歌一首。

秋芽子之。上爾置有。白露乃。消可毛思奈萬思。戀管不有者。

戀管不有者は、戀つゝあらむよりはの意なり、○御歌意は、戀しく思ひつゝ心をいたましめむよりは、中々に身も消失なましか、さらばかへりて安かるべきにとぞ思ふ、嗚呼さてもくるしや、となり、本御句は全序なり

丹比真人歌一首。

丹比真人は、傳未詳ならず、この氏姓なる人多し、舊本に名闕と註せり、二卷九卷等にも、かく氏姓のみ見えたり、同人賦

宇陀乃野之。秋芽子師弩藝。鳴鹿毛。妻爾戀樂苦。我者不益。

歌意は、宇陀の野のはぎを、押分凌ぎて、妻戀故に鳴鹿も、その妻を戀しく思ふ事の、我にはよも益りはすまじ、となり

丹生女王。贈太宰帥大伴卿歌一首。

丹生女王の傳は、四卷上に委云り、彼卷にも、此女王の、太宰帥へ贈られたる歌二首あり

高圓之。秋野上乃。瞿麥之花。于壯香見。人之挿頭師。瞿麥之花。

旋頭歌なり、○于壯香見、于は、末の畫の滅失たるなるべし、契沖は、于の下に、良の字脱たるか、と云り、(一本には下と作り、シタワカミとよむか)○歌意は、高圓の野のなでしこの花の、まだうらわかく盛なりしほどは、人の愛て折て挿頭にせしを、今はそのなでしこも盛過たれば、折人もなし、との意をこめてのたまへり、契沖、なでしこは吾身をたとふ、人は大伴卿をさしていふ、さしもめでられし折もありしものをのこるなり、と云り、此時大伴卿も、いと老たりしなり

笠縫女王歌一首。

笠縫女王は、目錄に、六人部親王之女、母曰田形皇女、と註せり、(親王とあるは誤なり、一卷に、六人部王とあり)田形皇女は、天武天皇の皇女なり、天武天皇紀云、次夫人、蘇我赤兄大臣女大蘇娘、生一男二女云々、其三曰田形皇女、續紀に、文武天皇慶雲三年八月庚子、遣三品田形内親王、侍于伊勢大神宮、神龜元年二月、授三品田形内親王二品、五年三月丁酉朔辛巳、二品田形内親王薨、天淳中原瀛真人天皇之皇女也、と見たり

足日木乃。山下響。鳴鹿之。事乏可母。吾情都末。

事乏可母、もとのまゝにては解難し、今按に、事は聲の誤か、さらば、コエトモシカモとよみて、聲愛しき哉の意とすべし、さらば鳴鹿之と云までは、聲といはむ料の序なり、○吾情都末とは、契

沖云、わが心につまとさだめて思ふ人なり、○歌意は、心に夫とさだめて思ふ人の、物いふをきけば、聲愛しき哉、嗚呼さてもなつかしや、となり、吾心に夫と思定めたまへる人の聲を聞て、よみ給へるなるべし、四卷に、佐穂度吾家之上二鳴鳥之音夏可思吉愛妻之兒、とよめる類なり

石川賀係女郎歌一首。

賀係女郎は、傳未詳ならず

神佐夫等。不許者不有。秋草乃。結之綱乎。解者悲哭。

本二句は、四卷紀女郎歌に、神左夫跡不欲者不有八也多八是如爲而後二佐夫之家牟可聞、(八也多八は、八多也八多を誤れるなり)とあるに全同じ、○歌意は、契沖云、我身軀に老なりて神さびたれど、君が逢むといふを、いなと思ふにはあらず、されど霜おく頃の秋草のごとく、むすぼほれたるひもを、今更とかむがやさしくてかなしき、とよめるなるべし、秋は草も老ゆけば、身をたとふるなり、(已上契沖説)今按に、秋草乃は、枕詞なるべし、草結といふことあれば、秋草乃は、結といふにかゝれるのみの言なり、さてむすびし紐といふは、今は身もさだすぎたれば、人に交接もせじと、かたく結びし紐なれば、今更にとかむは、やさしくかなしや、と云ならむ

賀茂女王歌一首。

賀茂女王は、四卷に出つ、舊本に、長屋王之女、母曰阿倍朝臣也、と註せり

秋野乎。旦往鹿乃。跡毛奈久。念之君爾。相有今夜香。

跡毛奈久は、一たび中絶て、あとかたもなく思ひし、といふなり、○歌意かくれたる所なし、本二句は序なり

〔右歌。或云椋橋部女王。或云笠縫女王作。〕

椋橋部女王は、傳未詳ならず、三卷に、倉橋部女王とあると、同人なるべし

遠江守櫻井王 奉天皇歌一首。

櫻井王は、續紀に、元明天皇和銅七年正月甲子、授無位櫻井王從五位下、元正天皇養老五年正月壬子、從五位上、聖武天皇神龜元年二月壬子、正五位下、天平元年三月甲午、正五位上、三年正月丙子、從四位下、契沖云、二十に、大原櫻井真人、行佐保邊之時作歌、紀續十五に、大藏卿從四位下大原真人櫻井大輔、かくあれば、後に大原真人の氏姓を賜へりて見えたり、〔頭註、大原櫻井眞は、大原は氏、櫻井は名、真人は姓なり、大伴家持宿禰と云むが如し、大原真人櫻井と云ときは、大伴宿禰家持と云むが如し、大輔とあるは疑はし、櫻井大輔と名のりたまへるにや尋ねべし〕

九月之。其始鴈乃。使爾毛。念心者。可聞來奴鴨。

九月、ナガツキといふこと、昔來くさく説あれど、みなあたらず、此は饒月の義なり、このこと既く三下に、委註りき、○使、一本には、便と作れど宜しからず、○可は、所の誤なり、と契沖云り、○歌意は、委曲に承る事はかなはずとも、九月の其初鴈の使になりとも、おもほしめす御心の御消

息の片端ばかりは、いかできこえ来よかし、と願ふなり、これは遠江の任國にありて、御音づれを
希ひ給へるなり、鴈乃使のこと、漢國の故事なり、前漢蘇武といひしものを、匈奴に使はされたり
けるに、匈奴本國に歸ることを得せしめざりしかば、鴈の足に書を係て放しけるに、漢國にとび行
たむしといふこと、漢書に見えたり、その故事をとりて、鴈の使と云こと、多くよむことよなれり

天皇 賜報和御歌一首。

天皇は、聖武天皇なり

大乃浦之。其長濱爾。縁流浪。寛公乎。念比日。

大乃浦は、契沖云、八雲御抄に、遠江と註せさせたまへり、遠江守への御かへしなれば、しかるべき
にや、○寛公乎は、契沖云、日本紀に、富寛とかきて、とみゆたひて、とよめれば、ゆたけくも、
たゆたひとおなじこゝろなり、一旦におもふにはあらで、ゆるくと思ふ心なり、と云り、今按に、
ゆたけくを、たゆたひと同じといへるは、さることなり、ゆるくと思ふ心といへるは、いかとなり、
寛字は借字にて、ゆたけくは御心の動揺として安からず、深切におぼしめす御意なり、○大御歌意
は、消息の聞え来よかしと云るれど、聞ゆべき消息は他になし、たとへばその任國の、大の浦の
長き濱邊によする浪の如く、心は動揺とうごきて安からず、其方をのみ戀しく思ふ此頃ぞ、となり

笠女郎。贈大伴宿禰家持歌一首。

贈字、舊本には賜と作り、今は目錄并一本に従つ
每朝。吾見屋戸乃。瞿麥之。花爾毛君波。有許世奴香裳。

吾見屋戸乃は、吾見とあるは、下上に誤れるものにて、ミルワカヤドノか、○歌意は、毎朝々々見
愛る、吾庭のなでしこの花にてなりとも、いかで君はあれかし、さらば朝夕に撫つかざしつして愛
べきに、嗚呼さてもなつかしや、となり

山口女王。贈大伴宿禰家持歌一首。

山口女王は四卷上に出つ、○贈字、右に同じ

秋芽子爾。置有露乃。風吹而。落涙者。留不勝都毛。

歌意は、其方の戀しく思はるゝあまりに、はらくと落る涙は、人目をはどかりて、留めむとして
も、得とどめあへず、さてもせむ方なしや、となり、本句は全序なり、(六帖に、第三句を、かける
ふは、とせるは誤なり)

湯原王。贈娘子歌一首。

贈字、右に同じ

玉爾貫。不令消賜良牟。秋芽子乃。宇禮和和良葉爾。置有白露。